
SHUFFLE! ~ ENDLESS LINK

クロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHUFFLE！ ～ENDLESS LINK

【Nコード】

N2267J

【作者名】

クロ

【あらすじ】

誰も信じようとせず人を拒みつづけた俺はあの日、小さな繋がりを手に入れた……
小 さ
くも、確かな繋がりはやがて大きな絆へと変わってゆく。

これはSHUFFLE！の二次創作になります。
原作の設定をかなり無視ってます。

それでも大丈夫っという人だけ読んでください。

く永遠の絆 序章く（前書き）

この小説はオリキャラありのたまに設定を変えています。
なるべく本編にそって書きますが嫌な方は戻ってください。

く永遠の絆 序章く

ふわふわとした意識の中でゆっくりと目を開ける。

目に映るは小さな子供がいじめられてる光景。

嫌な夢だな・・・

これまで幾度となく見た夢、いくら気分を害しても夢なので何もする事が出来ない。

しばらくすると気が済んだのかいじめっ子達は、どこかへと行き、男の子は土埃を叩いていた。

夢なら他にもあるだろ

心の中で悪態をつきながらも幼い自分を見る。

黒髪の年相応の背格好をした何処にもいそうな少年。

だがその目は鋭く、なにより瞳の色は朱と蒼。

いわゆるオッドアイというやつだった。

ジャリ・・・

土埃を叩き終わると耳元に土を踏むような軽い音が響く。

ふと顔をあげると目の前に居るのは一人の男の子と俺が怖いのか手を繋いでいる二人の女の子がいた。

本当に懐かしいな

・・・

「うう、ダルいし眠い」

もそもそと布団から出て来たのは黒髪の整った顔立ちをした少年。

「なんで帰ってきた途端、昔の夢見るんだよ・・・」

数年ぶりに帰ってきて家に届いてた荷物を片付けて寝たのはいいが爆睡は出来なかったらしい。

ゴキッと首を捻りふと時計を見る。

7時30分

「・・・まあいつか」

かなり危ない時間帯だったが気にせず制服に着替える。

中学って義務教育だから遅刻してもいいのかな？

そんな呑気な事を考え家を出る。

ここから俺、相沢タクトの日常が楽しく変わっていくことを願いつつ、そしてなにより幼なじみ達と会えることを期待しながら学校へと向かった。

第一話 出会い再開の秋（前書き）

この小説は中学校編から始めます。
オリキャラ、設定無視が嫌いな方は戻ってください！

第一話 出会い再開の秋

もうすぐ秋になるつかというこの季節、気持ちいいくらいの日光を浴びながら、俺は学校へと向かっている・・・はずだ。

何故曖昧かと言うと、朝早く家を出たはいいがなぜか制服姿の学生はいない。

それどころか俺の目の前にはランドセル背負った子供がワイワイ騒がしく歩いている。

7時55分

携帯で時間を見るがそろそろ本当にヤバくなってきた。だが道を聞こうにも人が全く見当たらない。

まあ居るのは居るよ？小学生が。

だけどそれは却下だ、むしろ聞きたい。どんな罰ゲームだよ

「君どうしたの？」

どうすべきか悩んでいるとふいに高い声が響く。
顔を上げると見た目が幼い少女が心配そうにこちらを見ていた。

「さっきからずっと困った顔してるけどどうしたの？」

私服姿で白い帽子を被った少女はゆったりとした口調で聞いてきた。

「えっと、学校に行くところなんですけどちょっと迷ったかな？」

あえて迷子とはいわず何でもないようにふるまってみる。

「だって恥ずかしいじゃん、この歳で「迷子なんです」「なんて言うの。」

「そつかあ、迷子なんだね」

「グハッ!！」

だがオブラートに包んだはずの言葉はこの人には効かなかっただらしい。

にこやかな笑顔をうかべながさらりと言えるこの人は凄いと思う。

「それじゃあボクが学校まで案内してあげるね」

「・・・いいんですか？」「大丈夫だよ、ボクも学校に用事があるから」

そういつつ歩いていく少女。

慌てついで行くこうとするがお互い名前を言っていないのに気づいた。

「そういえばまだ自己紹介してなかったですね、俺は相沢タクトつていいです」「あっ！そうだったね、ボクの名前はね亜麻！」

時雨亜麻だよ

.....

自己紹介をしたあと亜麻さんとたわいのない話をしていると、先ほどの会話でおかしな所があることに気づく。

「あの、亜麻さん？」

「ん？どうしたのたっくん？」

いつの間にあだ名を考えたのか、相変わらずゆったりとした口調で話す亜麻さん。

「さっき用事があるって言ってましたけど何の用事なんですか？」

亜麻さんは見た目はかなり若い、いや幼いと言ってもいいだろう、きつと同じ学校の制服を着ても一切違和感はないと思う。

ただ今この時間帯、更に私服姿を見るときつと卒業生なんだろう。

「えっとね、今日の朝あーちゃんがちょっと寝坊しちゃってバタバ

夕してたんだー、そしたらあーちゃんが日直だったのを思い出してお弁当持たないで家出ちゃったから、ボクが代わりに持って行ってあげてるんだよ。」

「そうだったんですか。」

「・・・あーちゃんて誰ですか？」

「あーちゃんはあーちゃんだよ？」

うん、やっぱりこの人は天然みたいだ。

・・・

「はい到着。」

いつの間にか校門の前に着いていたらしく遅刻寸前の生徒が急いでいる。

「それじゃ亜麻さんありがとうございました！」

「いえいえ たっくんもこれからは迷子になっちゃ・・・めっ！だよ。」

・・・亜麻さん、最後まで心配してくれるのは嬉しいんですけど校門の前でそんなことを言わないでほしかったです。まだ生徒たくさんいるんですよ？

最後までのおんびりとした亜麻さんと別れ、校内へと向かう。

.....

「・・・君は魔族か神族のハーフなのかい？」

亜麻さんと別れたあと無事に手続きを済ませ教室へ向かう途中、不意に担任から聞かれた。

「いえ、正真正銘の人族ですよ？ほら耳も尖ってないですから」

そういつつ耳元を見せる。

数年前にあった開門。

これにより、神族や魔族との交流も盛んになり技術や学問も大きく発展した。

神族や魔族は姿、形は人族とそっくりだが大きく異なっている部分がある。

それが耳元だ。

丸みを帯びた形の人族に対して神族、魔族は両耳が尖っているのが特徴。

だが交流が深くなるにつれて人族と魔族、人族と神族等といった種族の違う者どうしが結婚するようになりその見分け方もだんだんと曖昧になってきているそう。

閑話休題

「急にどうしたんです？」

「・・・やっぱ気になりますか？この眼。」

さつきからちらちらとこつちを見てきた担任に聞く。

「えっ！？えつと、ちよつと気になってね」

「やっぱ気持ち悪いですか？人族なのにこんな眼をしてるのは。」

「そ、そんなことはないよ？とても個性的じゃないか」

どもりながら言われても何の説得力もない弁解を聞き流す。

そんなことは特に気にしてないし、初対面の奴から好奇の目で見られることも畏怖する目で見られることももう慣れた。

（やっぱこの色がいけないんだろうな）

眼を押さえながら考える。

俺の眼は朱と蒼。

だがその色は空のように明るい蒼ではなく、夕日のような燃えるような朱でもない。

黒の絵の具が混ざったような深い朱と蒼だった

.....

「さて、今日からこのクラスに新しい仲間が加わるぞー」

クラス全体に話し掛けるように担任は言う。
途端にクラス中からざわめき声。

「その人カツコイイですか!？」

「やっぱり女子ですよね!？」

等といった声も聞こえてくる。

・・・テンション高くない？

こんなもんなの？中学って。

入って来なさい、

苦笑いしながらも担任から呼ばれたので教室へ入る。教卓の横に立ちながらクラスを見渡すと転入生だから興味深そうにこちらをじっと見ていた。

そんな中懐かしい顔ぶれを見つける。

だがせつかくの再開だというのに、驚いてるのが微動だにせず固まっていた。

そんな姿が可笑しくついつい笑ってしまう。

固まっている幼なじみ達を横目に自己紹介を始める。

「えーと、今日この学校に転入してきた相沢タクトです。いろいろわからない事もあると思うけどよろしく」

と簡単に自己紹介を済ませようとした・・・が、クラスの大半が俺の眼とをじっと見ていた。

「あゝこんな眼をしてるけど純粋な人族なんでよろしく。」

最後の言葉はやる気のない声で締めくり担任から言われた席に座る。

何度も様々な場所で説明してきたからいいかげんうんざりしてくる。

・・・あれ？よく見たら稟と楓の間じゃん。

「二人とも久しぶりだな・・・これからよろしくな？」

「はい！よろしくお願いします。」

「・・・ああ、よろしくな」

「？」

元気のない稟が気になったが、手を振りながらこっちを見ていた桜の所へ行く。

不安はある。

だけど・・・今だけは再会出来た喜びを噛み締めていたい。

第二話 先輩と僅かな違和感

さて、多少の質問攻めはあったが特に何事もなく授業も終わり今は昼休み。

各自、家で作った弁当や購買等に行きパンなどを買い友人などと食べながら友情を育んでいる頃だろう。

まさにこれぞ青春だ！

.....

・・・さて、現実逃避はこのくらいにしてこれからどうするか悩む。
まあ・・・あれだ、簡単に言えば弁当わすれた。
更に言えば作って来たのをだ。

(こんな事になるんだったらちゃんと確認すればよかったな)

今頃テーブルの上にも置いてあるであろう弁当を悔やみながらもどうするか悩む。

・・・あれだな、こういう時は転入祝い、とか久しぶりの再開とかを記念して奢って（この場合たかるとも言う）もらうしかないな。

「そんな訳で昼メシおごって」

「いや、どういう訳だよ」

そそくさと教室から出て行こうとした稟を捕まえ、たかつてみる。

「なら、今からどこに行こうとしてたんだ？購買にでも行くんだろ？」

「ああ、パン買い行くだ」

「なら俺もついていくから奢って」

「その結論はおかしすぎるだろ！？」

ツッコミを放つ稟を無視して一緒に購買へ行く。

「あの、タクト君！」

だが教室を出る前に楓に呼び止められた。

「ん？どうした？」

「もしよかったら、一緒にお昼ご飯食べませんか？」

.....

な、なにいいー！？

楓の発言を聞いた途端、クラスの男子の大半から上がった驚愕の声

が響き渡る。

「……いや、気持ち悪いですからそんな羨ましそうな目で見ないでください。」

「あゝ悪いな楓。今日は稟と食べるからまた今度な」

……

「こゝ、断つただとおおお!？」

「……うるさいからそろそろ黙りなさい。
ほら楓も苦笑いだよ？」

「そうですね……それでは次はみんなで食べましょうね」

少し残念そうに自分の席へ戻って行く楓を見ながらも急いで購買へ
と行く。

……

「……なあ稟、お前楓に何かしたのか？」

「……えっ？」

購買へと向かう途中、元気がない稟を眺めながら気になったことを聞いてみる。

「いや、俺が楓と話し始めてからお前の様子がおかしかった、それに気のせいかもしれないけど俺が「稟」って言った途端楓の表情・
・いや、雰囲気かな、変わった感じがした」

俺が感じた僅かな違和感、楓の表情は変わらず大半の人は違和感など感じないだろう。

だけど俺は確かに感じた。

それが何の違和感なのかは分からないが。

「なあ稟、お前・・・」

バシィィ！！

だがその言葉は言い終わる前に途切れた。

一体何が起こったか分からなかったが次第に感じるのは、背中に感じる痛みと口中に広がっていく血の味。

・・・舌噛んだ。

「やつほ〜稟ちゃ・・・って誰？」

（それはこっちのセリフだろ！？）

舌を噛んだ痛みで上手く喋れない俺は心の中でツッコんでおく。

「亜沙先輩・・・やりすぎですよ？」

「いや、稟ちゃんなら堪えられるかなって思ってた」

そんな、出来心でやっちゃった 的なノリで言われてもダメですよ？
被害者（俺）が出ちゃってるんですから。

「稟、この人誰だ？」

とりあえず舌の痛みを我慢しながら稟に聞いてみる。

「ああこの人は時雨亜沙さん、一応年上だ」

「もー一応ってなによ稟ちゃん」

まあはっちゃけ過ぎてるからな、年上には見えないだろ

「えっと始めまして、俺は相ヒヤワ・・・」

自己紹介しようとしたが怪我してるせいで舌がまわらなかった。

「へー相ヒヤワ君ね」

いや、ニヤニヤしながら言わないでくださいよ。

一応これあなたのせいですよ？

あと稟、お前も笑ってんじゃないやねえ。

・・・よし、稟はあとで絞めておこう、そっ心に誓い舌に指をあてる。

途端に指先から溢れ出す淡い白銀の光が舌を治療していく。

.....

開門により学問は発展した。その中でも一番発展したのは医学だった。

神族と魔族だけが使える魔法。

魔法と聞くとまず大半の人は炎を生み出したり光線を放つ攻撃系を思い浮かべるだろう。

だが実際には攻撃系の魔法より回復といった補助系の魔法の方が多く存在している。神族、魔族の医師は補助系の魔法を応用し、治療をしている人が大半らしい

人族も理論的には魔法は使えるが実際は使っている人はいない。

理由は簡単、魔法に使える魔力が神族と魔族に比べると低すぎるのだ。
故に魔力が低い人が魔法を使ってもほとんど効果ないが、魔力の高い一部の人族が使うと応急処置程度にはなるそうだ。

閑話休題

「ふう、・・・それじゃ改めて俺は相沢タクトつて言います」「

怪我した舌を治癒したあと二度めの自己紹介を始める。

「えっ?・・・ああ!ボクは時雨亜沙だよ、よろしくねタクちゃん」

一瞬、驚いた表情をしていた時雨先輩も同じように自己紹介をする。本日二人目のボクっ子からこれまた似たようなあだ名をつけられながら時雨という名前で今朝会った天然少女（亜麻さん）の事を思い出す。

「時雨先輩ってお姉さんとかいますか？」

年上ということもあり思わずつい敬語になってしまった。

「へっ？ボクは一人っ子だよ」

・・・なら違うのかな？

亜麻さんは外見は幼い方だったけど制服とか着てなかったからおそらく高校生だろう。

・・・あれ？でもこの辺に私服で通っているいい学校とかあったっけ？

「それで、亜沙先輩はどうして購買に居るんですか？いつも弁当作って来てるじゃないですか」

「それがね、朝急いでたから家にお弁当忘れちゃったんだ。今日は久しぶりにお母さんが作ってくれたのに」

少し残念そうに話す時雨先輩の話聞き、亜麻さんと時雨先輩は知り合いではないことがわかる。

「あつ！そろそろボクは行くね。タクちゃんもさつきはごめんね？
今度お詫びするからー」

そう言い終わると時雨先輩は長い緑髪を靡かせながら行ってしまっ
た。

.....

さて、本日最後の授業も終わり今は放課後。

掃除をする人、さつさと帰っていく人、これから部活動をする人、
様々な人がいるなかで俺は・・・

「よかつた！今日タクちゃん暇そうぞ」

「ちよつ！さつきから暇じゃないって言ってる・・・」「もっ小つさ
いことは気にしないの！」

昼に始めて会った緑髪の女の子に拉致られたよ。

おまけに現在進行形でズルズルと引きずられてどこかへ連れていか
れている。

「時雨先輩、人さらいは犯罪ですよ」

「ボクがそんな事するわけないじゃない」

「……………ハア」

今日が初対面だがこの人の性格が少し解った……かもしれない。

「それで、時雨先輩は何処へ連れて行くつもりしてるんですか？」

「さっきタクちゃんに悪い事しちゃったでしょ？だからそのお詫びしようかなって思って」

先輩……ホントならここは感動する場面ですよ……。

でも引きずられながらそんな事言われても全然嬉しく無いですよ？

「ほら！着いたよ」

ハア、やっと解放されるのか……

そう思い安心したのもつかの間、フツと頭に感じたのは一瞬の浮遊感。

次の瞬間、俺の耳にはかなり鈍い音と共に頭に痛みが走る。

……今度は頭かよ。

「えつと……タクちゃん？扉開けようとしてつい右手離しちゃった……えつとごめんね？大丈夫？」

申し訳なさそうな顔をした時雨先輩が覗き込むようにこっちを見る。

そんな顔されながら謝られると大概の人は許すだろう・・・だが俺はその大概の人の中には入らなかったようだ。俺は小さく指を曲げ、先輩のこめかみに当てる。

「へっ？タクちゃんちよつとまつ！？」

グリグリグリグリッ！！

「ニヤアアアア　！」

さすがに二度目はちよつとイラッときたので某アニメに出てくるお仕置きを一分ほどしてやる。

まあ女の子だから軽目にやっておいてやるっ。

.....

「・・・タクちゃんのばか」

さてここは家庭科室。

ちよつとしたごたごたもあつたが今は時雨先輩が焼いてくれたクッキーを摘みながらのティータイム。

時雨先輩はまだ痛むのか頭をさすりながら紅茶を飲んでいる。

「けどあれでも軽くですよ？俺が本気でやれば今頃悶絶してるはずですから」

「・・・やったことあるんだ」

「はい。そういや、小さい頃ブチ切れてやった時は稟の頭からヤバい音したことがありますからね」

そんな時はアイアンクローだったけど・・・あれ？原因何だったけ？

・・・まあいつか。

「へえそんな事が有ったんだ・・・」

そんな懐かしい昔話、話を聞いた先輩はどこか安心した様子にも見えなかった。

「何か時雨先輩と稟を見てると手のかかる弟を心配するお姉さんって感じがしますね」

「そりゃあ稟ちゃんは私の弟みたいなものだからね　ちよつと鈍いところも有るけど気が利くしとっても優しいんだよ」

まるで自分の家族を自慢するような時雨先輩。

ただそれだけなのに俺はどこかモヤモヤした物を感じていた。

「・・・それにちよつと心配だったんだ、稟ちゃんの事」

「?どうしてですか?」

「えつとちよつとね・・・」

最後の言葉を濁されたが特に気にもせずこの話は終わった。

.....

「じゃあそろそろ帰りますね？お茶ごちそうさまでした」
先輩が焼いてくれたクッキーも食べ終わり一息ついたところで窓の外を見れば、辺り一面綺麗な茜色に染まっていた。
荷物をまとめながら先輩にお礼を言う。

「あつ！タクちゃん・・・打ったところ大丈夫？」

「えっ？ああもう痛みもないですから大丈夫ですよ、それに・・・」
「本当！？無理してない？たんこぶとか無い？」

魔法も使いましたから。

そう続けようとしたが先輩の言葉に遮られる。

「あ・・・本当に時雨先輩はお姉さんみたいですね」「へっ？」

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。それにまだ痛かったらもう一回お仕置きしますからね」

「うう～それは嫌かも・・・」

「ハハッ、それじゃさよなら」

先輩に別れを言い、そのまま帰路へつく。

.....

「情けねえな・・・」

家へと帰る途中、胸の中のモヤモヤを掃うように呟く。

俺を心配してくれる時雨先輩を見てようやく気づいた。
あの時・・・稟を本当の家族のように自慢する先輩を見て俺は稟に嫉妬したんだ。

（・・・俺は心のどこかで稟の事が羨ましく感じたのかもな）

元は他人同士だった二人。だけど稟はそんな事まるで関係無いようにその人の為に必死になれる。
それが稟の魅力であり長所だ。結果稟に対して信頼や好意を抱くのは当たり前と言ってもいいだろう。

（ホント、嫌に為ってくるね）

あいつが誰よりも優しいのはわかってる、そして俺は稟を信頼している・・・そう自信を持って言えるはずなのに俺は稟に嫉妬してしまった。

そんな自分に嫌気がさす。

自分には無いものを欲しがる、それが人間の性だ

そう言えばきつと楽なんだろうな。

「・・・家族か」

どれほど聞いてなかった言葉だろう。
懐かし過ぎて言葉を呟いてもそれがどんな物だったのかさえ思い出せない。

(家族つていえば稟と楓つてあれから一緒に住んでたんだっけ)

五年前にあったあの出来事から稟は楓のおじさんに引き取られ、今は芙蓉家に楓と一緒に住んでいる事を思い出す。

けど稟と楓を見ているととてもそんな風には見えなかった。それに二人ともどこか避けている様にも見えた。

(何か理由が有るのか?)

あれからすぐに引越したから何があったのかは知らない。でもあいつの事だ。

また後先考えずに一人で突っ走ったんだろう。

(まあ明日桜にでも聞いてみるか)

もしあいつが一人で突っ走ってるんなら助ける

そう心に誓い、俺は足早に帰路へ着いた。

第二話 先輩と僅かな違和感（後書き）

お久しぶりです（。 。 ） /

クオリティ高めを目指して頑張ってるんだけどなかなか上手くないかないですね〜

亜沙の性格変えすぎですかね？不快感を感じた方はすみません。

もしこの小説が面白いと感じた方は感想お願いします

それではまた来週、さよなら〜

第三話 告白と募る想い

拝啓 土見 稟様

突然このような手紙を書いて申し訳ありません……あつ御安心を、決してラブレターとかでは無いので。

もしそんな勘違いして俺の事をガチホモ野郎とかと勘違いした暁にはお前の頭の形が変わるまでアイアンクロー食らわし続けてやると警告させていただきます。

さて、このようなお手紙を書いたのは他でもありません、あなたと楓の関係についてです。

昨日の質問は思いがけない平手打ちに遮られたので今日の放課後、俺と桜を交えてじつつっくりと！！話し合おうではありませんか？拒否権はありませんから潔く出頭してください。

それでは今日の放課後屋上でお待ちしております。

P・S もし逃げるようなら血を見ることになりますヨ

相沢 タクトより

.....

「・・・よし！これでOK」

さてここは俺の自宅。

稟に明日渡す手紙を書き終わり一息つく。

稟並のツッコミを持つ人が読めば直ぐさまツッコミを入れるような内容だが。

何故こんな脅迫めいた手紙を書いているのか疑問に思う方もいるだろう。

事の始まりは帰りの道中でのことだ・・・

.....

さてここは木漏れ日通り。光陽町で一番大きい商店街で沢山の店が建ち並んでいる。

日用品などを買いに来たのはいいが思いの外、広すぎるようだ。

さて勘のいい人はもう気づいてくれましたよね？
つまりだ、俺がなにを言いたいかと言えばだね？
迷ったんですよはい、本日二度目の迷子ですね、もーイヤ。

どうやら稟にギャルゲー主人公のスペック（鈍感、無意識のハーレ

△創造などなど）があるように俺にも方向音痴というはた迷惑なスベックがあるようだ。

「……ん？」

そんなこんなでウロウロと歩き回っていると一件の店の前に立ち止まってる知り合いを見つける。

おお、どうやら嬉しい事に俺には方向音痴の他に強運というスベックも備わってるらしい。

そこに居たのは店のショーウィンドーをじっと覗き込んでる桜。

「オーイ、さくっ!？」

前言 徹回

この時俺はどれほどあまかったか痛感したよ。
そして悟ったよ。悟られずにはいれなかったね。

ああそっか、強運って凶運にもなるんだね……

「エへへへ……ニヤン」

ショーウィンドーの中には両腕には納まりきれないほど大きい猫のぬいぐるみ。

そのぬいぐるみをじっと見ている桜の表情は傍から見ると誰もが可愛いと言っただろう、現にちらほらと振り返る奴もいる。

が、桜自身もぬいぐるみの可愛さでか口元が緩みきってる。

いろいろとツツコミ所はあるが今はとろけきつた桜をこっちに戻して早くここから離れるのが先決だ。

ああそうとも、例え桜のとろけきつた顔を見た男共の視線が痛かるうと。

例え桜が近寄り難い雰囲気を出していてもこの際気にしてなんかいられない。

寧ろそう考えなきゃやっていけない。

「おい桜、戻って来い」

「エへへ……」

「……………」

ダメだ話し掛けても試しに揺すっても戻って来ない。

今頃、頭の中はお花畑にでもトリップ中なんだろう。

桜、頼むから早く戻って来て下さい。男共の視線がイタすぎます。

そう願いながら、俺は桜の肩を揺らし声を掛ける。

「桜よだれたれてるぞ」「……よし！君の名前はニャン ュウだ！」

「桜、その名前はいろいろとやばいから止めとけ」

・・・嘘にも反応しないとはかなり手強い。
ていうかまだ買ってないのに名前付けるのか？

等と呑気に考えていたがそうもいかないらしい。

さっきまでおとなしかった男共が桜のニヤ チュウ発言を聞いた瞬間、テンションがピークに達したらしく口々にいるんな事を言うてるからだ。

曰くあの子可愛いだとか、曰くぬいぐるみに名前だとおお！？とか
言いながら悶絶する奴まで出てきてる。

ここまで騒いでるのに気づかない桜はいいよな〜俺なんて桜の近く
にいるだけで殺気の籠った視線を受けてるんだぜ？かなり割に合わ
ない。

「・・・ハア、桜いい加減にしないと・・・襲うよ？」

さすがにこれ以上の視線は受けたくないのでSっ気たっぷり発言
を耳元で囁くように言ってみる。

「・・・！！？」

最後の手段として取っというたがやっぱ桜には堪えれなかったらしい。

耳元でポソツと呟いた言葉に、桜の顔は真っ赤に染まって行った。

「へうつ？わたた、私襲われちゃうの！？だ、だ、誰に食べられち
ゃうの！？」

・・・桜？視線がイタいからさもうちよい声落とそうか？あと誰が食べるとか知らないから聞くな。

お花畑から次はどこへ行ったのか今度は、はわわだかあわわだか言いながら慌てふためいている。

「落ち着け桜！早く戻って来い！」

「はわ！？た、タクト君？タクト君が私を食べちゃうの！？」

「桜ああー！！！」

思わぬ爆弾発言に場が沸いたのは言うまでもない。

.....

「落ち着いたか？」

「あううう／＼／＼」

結局桜の意識が戻った頃には視線がハンパなかった。もし視線で人が殺せるなら軽く二桁はいくだろう。

発禁間近の発言をした桜はまだ恥ずかしいのか近くベンチに寄り掛かりながら顔を赤く染めている。

「まあなんだ、俺は気にしてないからな？」

そう言い安心させるように頭を撫でてやる。

「ううありがと・・・」

頭を撫でられて落ち着いたのか目をゆっくりと閉じながら寄り掛かって来る。

「・・・懐かしいなあ、昔も私が落ち込んでた時とか元気がなかった時とかこんなふうに撫でてくれたよね？」

「あの時はほぼ強制的だっただろ？撫でて撫でてって言いながら寄って来たのは誰だっけ？」

「アハハ、だってあの頃のタクト君お兄ちゃんみたいだったんだもん」

「ほお〜 けどお兄ちゃんなら稟でもよかっただろ？何で俺にしたんだ？」

わざとからかう様な口調で言ってみる。

「へっ！？だ、だってタクト君のほうがしっかりしてそうだったし、でも稟君でもよかったかもしれないね」

「へええ〜」

「うう・・・タクト君のいじわる・・・」

そう言うと桜は拗ねた様に顔を背けた。

「くっ、アハハッ！」

気持ちを必死に隠そうとする桜の仕種がかわいくてつい笑ってしまっ

「なあ桜、告白とかしないのか？」
「へう!?!」

そう聞くと桜は素っ頓狂等声を上げ再び顔を真っ赤に染めた。

「だから告白だよ。稟の鈍感是世界に誇れるほどすごいからな、きつと桜の好意とかまだ気づいてないと思うぞ?」

「……………うん」

否定しないのかよ!?!?

すぐさまツッコミたかったがまあいつか。

昔から桜は稟を見てたから…………だからそんな事俺が言わなくても桜自身が一番解ってるんだろう。

「…………ホントはね、中学に上がったたら告白するつもりだったんだ」
「……………はっ?」

思わぬカミングアウト。

流石は稟、中学で桜、楓と三角関係を築くとは…………恐ろしいやつだ。

「でもね、出来なかった…………私ね?中学に上がった時稟君に言われたんだ…………『俺に関わらないほうがいい』って…………」
「はあっ!?!?」

驚愕、今の俺の表情を表すにはこれがピッタリだろう。そう話す桜の表情にはさつきまで楽しく会話してた時の表情はなぐただ悲しみに満ちた表情をしていた。

ただ驚いている俺を見てか桜はこう続けた。

「タクト君・・・みんな変わっちゃったんだ。稟君も楓ちゃんも・・・五年前のあの事故から」

桜はぼつりぼつりと俺の知らない過去の話を紡いでいく。

「あれから・・・ね？タクト君が引越した後、楓ちゃん稟君を見る目が変わったんだ・・・まるで憎むような目で稟君を見るようになった・・・私ね？稟君に何回も訳を聞こうとしたけど絶対に教えてくれなかった」

「・・・」
「最初はとても悲しいって思った・・・でもね？それと同じに悔しくもあつたんだ。なんで頼ってくれないのって・・・」

痛いくらいに桜の気持ちができる。

きっと俺が桜と同じ立場だったら同じ事を思うだろう。

「・・・っ、でね？」

話を続けようとする桜。

だが紡ごうとした言葉は途切れ、桜の目から涙が溢れる。

「楓ちゃんも・・・私に何も言ってくれない、話してくれないんだ・・・なんで・・・なんでみんな一人で抱え込もうとするの?・・・タクト君私どうすればいいのかな・・・小さかった頃みたいに、みんなと一緒に遊んだり笑い合ったり・・・もう出来ないのかな・・・そんなの嫌だよ・・・私もっとみんなと一緒にいたいよお・・・」

.....

結局あれから桜は俺が家に送るまでずっと泣きつづけた。きっと今まで辛かったけど誰にも言えなかったんだと思う。そして別れ際俺は桜と約束した・・・絶対にまた四人で笑い合おうって・・・

そんな経緯があり、どう聞き出そうかと考え思いついたのがこの手紙。

ま、手紙を渡したところで稟が話すとは思えない　　が、それはあくまで渡した時は・・・だ。

「フッフ、稟覚悟しとけよ・・・」

出来るかぎりの布石は用意した、後は運と稟次第だ。

明日のことを考えながら俺は布団に潜る。

そついや時雨先輩が言った『心配してた』っていうのも何か関係あるのかもな・・・明日にでも聞いてみるか。

たまたま俺が帰りに助けると誓った事、たまたま商店街で桜と会えた事、そしてたまたま過去の話を聞けた事・・・偶然とは言いつてもないくらいに重なった出来事。

運命なんて信じない質だったけど今なら信じてみてもいいかもしれない。そう思い倒れ込むようにベットに寝そべる。

・・・さて明日は稟とのたのしいたのしいお喋りが待ってるからさつさと寝よ。

稟、大切な幼なじみを泣かせたんだ、明日のたのしいお喋り、首洗って・・・イヤイヤ、楽しみに待つとけヨ

第四話 解ける心

「あの・・・土見君これ受けとって下さい」

「えっ?・・・」

「・・・ぶっ」

ここは人通りの多いとある通学路。

先ほどからをちらほらと視線を感じるが他の人から今の状況を言わせれば異様。この一言に尽きるだろう。

何故かって?だって朝っぱらから手紙を渡してるんだぜ?

女の子の声マネしてる男が。

そんな光景を朝っぱらから見せられる人達は堪ったもんじゃないだろう。(腐がつく女子を除いて)

大抵の人は俺達の横を小走りで通り過ぎて行く。(腐がつく女子を除いて)

イヤ、しつこいようだけどちゃんと居るんだよ?キラキラした目でこっちを見てる女子が。

・・・でだ、そんな光景を見ながら笑いを堪えてる先輩が一人。声を掛けられ振り返ったはいいが一瞬で固まった男が一人。

この明らかに異様な光景を見て何も感じない人は、きつと腐かあつち系の人の素質ありなんだろう。断言してやる。

やがて、手紙を受けとった男は意を決した様に口をひらいた。

「ゴメン、タクト・・・俺はそんな趣味・・・おーっと！？なに勘違いしてんだこのバカヤローは！？」

さすがにここまで真面目に返されるとは思ってもなかった。

ツッコミを入れた瞬間、反射的にガシツ！と稟の頭を掴む。だが心の広い俺はこんな事で簡単にキレたりはしな・・・

「えっなにがだ！？だってこれ明らかにラブレタ・・・アアああー！！？」

はいっ！一瞬で許容範囲越えましたね！

明らかにホモ野郎と勘違いしやがった稟の頭に渾身のアイアンクローをかましてやる。

その日の朝、閑静な住宅街にはある男の悲痛な叫び声が響き渡ったとか・・・

.....

「・・・で、何のつもりだ？」
「えっ？だからほら手紙」

そう言いながら白い便箋を渡す。
だがテープでとめている時点で可愛さの欠片も無い。

「・・・誰からの？」

「俺からの」

「なぜ！？っていうかそれはラブレター「次はデコピンしてやるうかあ？」すみませんでしたあ！！」

俺のお仕置き用の技はなぜかクローよりデコピンのほうが威力が高い。

威力に序列をつければ、ぐりぐり クロー デコピンってとこだ。

「まあいいや、早く学校に行こうぜ」

そろそろ人通りも少なくなってきたところで学校へと歩きだす。

「おい！お前学校までの道分かってるのか？」

「あゝ一度通った道は覚えてる・・・たぶん」

「・・・ハア」

ため息をつきながらも俺の前を歩くように登校していく稟。

きつとこういうさりげない優しさでいるんな人を食べ・・・

「何朝っぱらからなに变なこと言ってんだよ！？」

「あれ？声出てた？」

「ハッキリな！」

おお、つい声に出てたよーだあぶないあぶない（棒読み）

「・・・まあそれは置いて早く行こうぜ」

「そういえば、亜沙先輩はなんでタクトと一緒にいるんですか？」

あつ、こいつスルーしやがった。

「実は今日久しぶりに寝坊しちゃってね走って学校に行ってたんだ。そしたらタクちゃんの背中にぶつかっちゃって・・・」

「ぶつかってじゃなくてぶつただろ？」

「・・・エヘッ」

背中のだ真ん中を平手打ちが襲った時はマジで心臓止まるかと思っ
た。

笑ってごまかす亜沙先輩に溜息を吐きながら簡潔に説明する。

「まあなんだ、つまり亜沙先輩から一方的に平手打ちという挨拶を
された後、一緒に歩いてたらお前がいたって事だ。」

「亜沙先輩、挨拶で平手打ちをするのはやめましようよ」

「もー稟ちゃんわかってないなあ、あれは平手打ちじゃなくてボク
なりの愛情表情なんだよ？それくらい察してよね！」

これ以上ないほどにバイオレンスな愛情表情である。そしてそれを
察しるとは無理な相談だ。

「俺にやるなら痛くない表現でお願いするよ。さすがにあんなの毎
日喰らわせられるのは堪ったもんじゃないからな」

一応頼んでも亜沙先輩の性格からすると絶対にするだろうが釘は刺

しておく。

「そういや、タクトと亜沙先輩って急に仲良くなったよな？それに時雨先輩って呼んでないし」

「そうか？まあ亜沙先輩って呼び始めたのはさっきからだけどな」

きつとお茶をしてからだろう、知らず知らずの内に仲良くなっていた。

俺達が稟と会う少し前も、亜沙先輩が急に『稟ちゃんもボクのこと亜沙先輩って呼んでるからタクちゃんもそう呼んでねあと他人行儀のもダメだから』と言ってきた。

なぜ！？一瞬そう思ったものの、これも亜沙先輩の性格なんだと勝手に解釈して終わってたが、今考えるとあれも亜沙先輩なりの友好の証なのかもしれない。

.....

「それじゃあタクちゃん、また昼休みに会おうね！」学校へ着いた方がいい・・・が、まるで付き合っている男女が交わすような言葉を言うと亜沙先輩はそそくさと教室へと歩いて行った。

殺気と生暖かい視線が交じり合った中、後ろを振り向くと稟は笑っていた

ニヤニヤと。

「・・・なにニヤついてんだよ」

「いやあ、ついにタクトにも春が来たんだなって思うとつい」
「ありえないからな？」

亜沙先輩と知り合ってまだ二日目だぞ？あと祝福するつもりならニヤニヤすんな。

「それに年がら年中春真つ盛りのお前が言つなよな」「はっ？」

こいつの鈍感さには底が見えない、むしろ底があるのか聞いてみたいところだな。桜が言うには女子からの視線を変な方向に誤解しているらしく自分はモテないと勝手に勘違いしているらしい。今も女子達を送っている熱い視線にも気づかないわ、桜の好意にも気づかないとはどんだけ鈍感なんだか・・・

呆れながら今だにわけが解らないと言いたげな顔をしている稟をほつといて教室へと歩く。

「なら、なんで亜沙先輩から呼ばれたんだ？」

「稟に渡した手紙の事でちょっとな」

「手紙？」

今朝平手打ちをされた後、稟に渡すはずだった手紙を読まれた。

手紙を読んでない稟にはイマイチ解ってないようだが気にせず話す。

「ああそれと手紙を読む時は人がいない所で読めよ」

差出人の所に名前書いちゃったからな・・・もし他の人から見られたら絶対に変な噂流される。

「 ! ! 」

熱弁を振りながら請け負った科目を説明する教師。

授業も飽きてきたのか居眠りをする人もいるなか、俺は稟と楓を観察している。まあ観察といっても普通に見ているだけだが。

昨日桜から聞いた話。明らかに二人の様子が変わった、憎むような目で見えるようになったと言っていた。

そう聞いたが俺の本音を言えば“信じられない”この一言に尽きる。桜を疑うわけではないが、もし五年前の事故が原因だとしても稟を憎むのはお門違いというものだ。

それにあの事故は・・・

「あのタクト君？どうかしましたか？」

「っ！」

不意に声を掛けられ顔を上げると楓が心配そうに俺を見ていた。

「難しい顔をしてましたけど・・・どうかしたんですか？」

「ああ悪い、少し考え事してたんだ・・・」

「？そうですか」

咄嗟にそう答えたがこうして見ると何処も変わってないように見える。

そういやこっちに帰って来てから稟と楓が話してるところを見たことがない・・・そう思ったりもしたが何も知らない俺が二人の疑ったらキリがないのでそれ以上考えるのはやめた。それにいくら考えてもそれは推測だけでそれが事実とは限らない。

そう考えた時キンコンカン・・・とありきたりなチャイムが鳴り響き昼時を知らせる。

教師が挨拶を済ませ出ていくと机をくつつけ友達同士で食べる奴、購買へ買いにいっ奴いろんな人がいる。

「タクト君、よかつたら桜ちゃんも誘ってお昼一緒に食べませんか？」

「あゝ悪いけどちょっと・・・」

「タクちゃん！迎えに来たよ！」

亜沙先輩、なぜあなたは狙ったように出てくるんです！？あとそのクラス中に響き渡る程の声は故意ですか？いや、絶対に故意だろうか？

少し卑屈になりながら今の中学生は餓えてるんだなあと視線の嵐の中、ひしひしと肌で感じていた。

「・・・悪いな楓。用事があるから今日も一緒に食べれない」

「そうですね、残念です」

そう言ってくれる楓には全力で感謝したい。あと亜沙先輩には楓のおしとやかさを見習ってほしいと心の底から願うよ。

「あれ？楓久しぶりだね。たまには部活にも顔出してね」

「はい！わかりました」

「あれ？楓部活入ってたんだ？」

「はい、私料理部に入っているんです」

あまり行けないですけど・・・

そう苦笑しながら言う楓。さらに聞けば亜沙先輩は部長なんだとか。

久しぶりに会う者同士だからか呑気に会話をしている。

「亜沙先輩そろそろ行きましょう」

だが、現在進行形で嫉妬に塗れた視線を受けてる俺としては早くこの場から去りたい、そう思い亜沙先輩の手を引いて歩き出す。戸惑っているのか後ろで何か言っているがこの際無視だ。

.....

「・・・この町って嫉妬深い人が沢山いるんですね」「否定してあげたいけど出来ないよね」

教室から向かったのは昨日お茶した家庭科室。

弁当も食べ終わり先輩が煎れてくれたお茶を飲み、一息ついたところで先程の教室の一件といい昨日の商店街の事といい、思い返せば知らず知らずの内にそう言葉に出してしまうのも仕方ないだろう。

「あの視線どうにかならないもんかなあ・・・そういえば桜と楓と話してる時が一番酷かったような・・・」

転入してきたばかりということもあり稟や楓達と仲良く話しているのを見れば女子も男子も好奇の目でこっちを見てくる。

そう、前半はまだわかる。だが、なぜ桜や楓と話す時だけ男子の視線が鋭くなるのかイマイチわからない。別にわかりたくもないが。

「そういえばタクちゃんは転入して来たから知らないと思うけど、楓には親衛隊がいるんだよ、まあ非公式なんだけどね」

多少変わった学校だと感じてはいたが、まさかここまで無法地帯とは思わなかった。

「・・・それってただのストーカー集団ですよね?」「それがね? この学校の約半分の男の子が楓の親衛隊に入ってるからほぼ公式みたいなものなんだ。それに名前もあるんだよ?」

「・・・」
「きつときつと楓ちゃん」って名前で、頭文字取って皆KKKKって呼んでるよ」

更に聞けば楓程ではないが桜も人気があるためファンが多いそうだ。

ネーミングセンスが無い上にストーカー集団とは・・・呆れ果てて何も言えないが亜沙先輩を見てると慣れるのも時間の問題なんだろうなあとしみじみと思えてくる、まあ慣れるのもどうかと思うが。

そうこうしている内に、キンコーンカーン　と今度は予鈴のチャイムが鳴り響く。

結局手紙の件については何も話さず、そろそろ教室に戻ろうと腰を

上げようとする・・・が上がらない、いや上げられなかった。
原因は覗き込むすぐにわかった、掴まれていたのだ、袖をガツチリとね。

美少女とも言える女の子が顔を俯かせながら男の袖を軽く握っている・・・見る人が見れば、付き合いたての女の子が離れたくないとせがんでいるようにも見えらるだろう。
それでなくても大抵の人は羨ましく感じるような光景だ。

だけど俺達は付き合っていない、それにさっき予鈴のチャイムが鳴っているわけだ。
さらに引き止めているのがあの亜沙先輩だ。
知り合って間もないがこの人の突拍子のない行動で得したことはない。

うんヤバいね、とてつもなくヤバい。

先程から頭の中で警報が鳴り止まない。離れようにもどこにそんな力が有るのかびくともしない。

「・・・ねえタクちゃん」

顔を俯かせたままゆつくりと俺の名前を呼ぶ亜沙先輩。

ただどなぜだろう、その先は聞きたくない。

聞いたら聞いたで絶対に巻き込まれる。そんな嫌な予感がするからか、先程から冷や汗が止まらない。

「朝の手紙の事なんだけどね・・・」

それかよ！？そうツツコミたいが我慢する。

何しろまだ頭の中の警報が鳴り止まない。

「此处で話しても良いんだけどしゅっくり話したいんだ」

「なら放課後にでも」「もう、それじゃ意味が無いでしょ!」「……でも今からだと話す時間無いだろ」

「うんそうだね……だからさ、授業サボっちゃおうか」

上目遣いでとんでもない事を言ってきた。

「……亜沙先輩、転入二日目でサボるのはいろいろとまずいので戻ります」

「ダメ」

「もしかしたらこれを機に男子達が攻めて来るかも……」

大抵楓や桜達と一緒にいるのであながち嘘ではない。

「タクちゃん強いから大丈夫だよ」

「……」

何を基準に言ってるんです？手か？この握力なのか!?

「魅力的な女の子とサボれるんだよー、ほら男の子だったらさっさと決める!」「それじゃ戻りますね」

そう言い腰を上げる。

これには予想外だったのか引き止める様に手に抱き着いてくる。

「……ダメ?」

涙目の上目遣いでこちらを覗き込む亜沙先輩。

必殺とも言えるこのコンボ。これに耐えられる男は少ないだろう。

「ダメ」

だがその数少ない男に分類されるらしく、全く俺には効かない。

「うう・・・稟ちゃんには効くのに」

腕に抱き着いたまま悔しがる亜沙先輩。

うん、そんな反応を見ていると逆にからかいたくなる。

「・・・可愛かったよ亜沙先輩」

「!?!?!?!?!」

そう耳元で呟くと、すぐさま腕から離れる亜沙先輩。恥ずかしいのか、顔が赤く染まっていた。

「~~~~~」

何か言いたいのか口をパクパク動かしている・・・が全く声が聞けない。

どうやらスキンシップは激しいクセにこのての言葉には免疫が無いようだ。

「・・・タクちゃんのイジワル~~~~」

・・・亜沙先輩、その顔でその言葉はヤバいです。

顔を真っ赤に染め、もじもじしている亜沙先輩の姿にまたもや悪戯したくなるが時間も無いので必死で我慢する。

「それじゃ俺はそろそろ戻りますね」
「あっ……うん」

諦めたのか、おとなしく頷く。

「……ねえタクちゃん、手紙の事はもういいからさ、一つ聞いてもいい？」

「なんですか？」

「なんで……稟ちゃん達の問題に関わろうとするの？」

俯いているので表情は見えないが、その声は小さく弱々しい。

「タクちゃんは二人の幼なじみなんだよね？ならタクちゃんは知ってると思うけど、楓は稟ちゃんを嫌ってるんだ」

「そうじゃないんだ」

「えっ？」

「楓は稟を嫌ってなんかない」

これは俺の勘でしかない、だけど確信できる、楓は稟を嫌ってなんかない。

「……なんでそんな事が言えるの？さっきさ、この学校には楓の親衛隊が居るって話したよね……楓って稟ちゃんの事になるとね、露骨に態度が変わるからさ、稟ちゃんその親衛隊からイジメられてたんだよ……何も知らないくせにそんな事言うなんて無責任だよ」
「……」

亜沙先輩からすれば何も知らない俺が何の根拠もない考えを話すということに無責任と感じるのは当然だろう。

「ボクと稟ちゃんが初めて会った場所はね、保健室だったんだ。もうびっくりしたよ！ドアを開けたら顔とが痣だらけの男の子が立ってたんだから・・・でもねそれがきっかけでボク達は仲良くなったんだ」

そう話す亜沙先輩の表情はとても哀しそうだった。

「ボクも楓が稟ちゃんの事が嫌いなのはすぐにわかった。でもね、わかっただけでそれ以上何も出来なかった・・・タクちゃんはさ、あの手紙を渡してどうするつもりなの？」

「・・・どうすると聞かれても俺は何もしないつもりです」

「っ！」

俺の返事を聞いた途端、亜沙先輩の表情が変わる。

「なら！なんであんな手紙を書いたの!？」

声を荒げながら怒鳴るその表情は悔しいのか今にも泣きそうだった。

「そもそも俺は二人の仲をどうこうするつもりは無いんですよ」

「っ！」

パンツ!!

部屋に気持ちいい程のいい音が鳴り響くと同時に頬に広がる痛み。

「タクちゃんがそんな人だとは思わなかった・・・」「・・・」

そう言い残すと亜沙先輩は部屋を出ていく。

痛む頬を撫でながら、先輩が出て行ったドアを見つめる。

出て行く時、ちらりと顔が見えたが亜沙先輩は泣いていた。

途端に罪悪感で胸がいっぱいになるが、今更悔やんでも仕方が無い。
・・・そう切り捨て俺は教室へと戻った。

.....

結局あの後教室へ戻ったが授業に間に合うはずもなく、担任からの説教タイムが待っていた。

説教も終わり気がつけば放課後、とりあえず屋上へ行くと桜が一人立っていた。

「あれ稟は？もしかして逃げた？」

「ううん、亜沙先輩に呼ばれて遅れるって・・・そういえばタクト君も探してたよ？」

「.....」

鉢合わせにならなくてよかった・・・説教万歳！

「なんか亜沙先輩ちょっと元気なかったけどタクト君何かしたの？」

「・・・多分してない」

「何かしたんだね」

「なっ！桜、人を疑うのはよくないぞ？ちょっとケンカしただけだ、一方的な」「それもタクト君が原因でしょ？」

なんとも痛いところばかりつく。

まさか口論で一方的に押されるとは思ってもみなかった。

「確かに俺が原因かもしれないけど、俺は悪く無いはず・・・多分いや、きつと！」

そう言いつつ先程合った事を話す。

俺の無実を証明する為に。

.....

「それは亜沙先輩じゃなくても怒るよ、タクト君ホント不器用だよな？それにもうちよつと具体的に話せば変な誤解もなかったと思うよ？」

「・・・ハイ」

完敗でした！

いやもうね、桜も変わったよねえ、昔は大人しいの女子だったのにこんなに強くなってたんだね。

「タクト君きいてるの？」「はい！聞いてます。ホント、言葉が足りなからこんな事になったんだよねホントごめんなさい」

「それは私に言ってもしょうがないでしょ？」

「ハイ、スミマセン」

何でもいいから早く来いよ稟！

.....

「・・・悪い遅れた」

「遅すぎだこのポケエ！」「ちゃんと遅れるって言ったのに酷くないか!？」

さて、俺達はどのくらい待っただろう、気づけば空は茜色に染まり始めていた。

「ハア・・・タクト、亜沙先輩から伝言だ」

稟は懐から小さな紙を取り出す。

明日、お昼に家庭科室に来て。

亜沙先輩の字で簡潔にそう書かれていた。

この手紙が表すのは一つ。稟に話したんだろう、今日の出来事を。

「なるほど、先輩がこう書いてるって事は説明したのか？」

「・・・ああ」

「なら先輩からも話は聞いてるよな？何があったのか、話すか話さないかはお前自身で決めろよ」

俺が先輩に言った答え。

“何もしない”そして“仲をどうこうするつもりは無い”その言葉通り俺は何もするつもりは無いし二人の関係を弄るつもりもない。

なら、なぜ手紙を渡したのか・・・それはただきつかけを与えたに過ぎない。もし稟があの手紙を読んで俺達に過去を明かしてくれるなら桜と俺は対策を練ることが出来る。

もし稟が話さないならそれはそれでまた違う策を考えればいい。

もしこの手紙がきつかけにならなくても次がある。

そんな意味を込めた。

なら俺が先輩に言った言葉は何だったのか・・・それは例え稟がこの手紙を読んで俺達に過去を話したとしても俺は手は出さない、だけどアドバイスはする。

そんな意味を込めた言葉だった。

簡単な問題でも難しい問題でも自分でしなきゃ意味が無いだろ？それに結局は自分で決めて進むしかない。だからさ、俺や桜が手を貸して創った道に意味なんてない。俺はそう思うんだ。

まあこれは俺の考えだから俺の性格を理解している人にしかわからないだろう。それに亜沙先輩に言った言葉なんかは他人が聞けば、自分勝手な人の発言にしか聞こえない、だからだろう。亜沙先輩を怒らせてしまったし、桜にも怒られた。

けど流石は幼なじみ達、桜も稟も理解してくれたようだ。それに先程の亜沙先輩からの手紙を読むと稟が俺の言葉の意味を説明してくれたんだろう。

「・・・何でタクトは俺に関わろうとするんだ？亜沙先輩から聞いたんだろ？俺は楓の親衛隊から狙われてるって・・・」

「そんなのどうでもいいだろ？稟に関わってストーカー集団に狙われるなら返り討ちにしてやればいい。それだけだ」

それに正当防衛だろ？笑ってそう答える

「桜は何でだ？俺は桜に酷いことも言った、それなのに何で・・・」
「うん、ホントに傷ついたんだよ？稟君から関わるなって言われて・・・でもね？やっぱり私は稟君がほっとけないんだ」

照れたように笑みを浮かべながら桜はそう答えた。

「　　っ！ありがとう、タクト、桜・・・」

いままで誰にも決して解こうとはしなかった心。
それが解けた瞬間、稟の目からは涙が溢れた。

.....

「甘い空気はほどほどにして欲しいなあ稟」

「悪かったな／＼／＼」

「うゝ／＼／＼」

あれから溢れた涙はなかなか止まらず稟が落ち着くまで桜が抱きしめて背中を撫でていた。

なんとも甘い空気が漂っていて一瞬で居心地が悪くなった位だ。

「それじゃ早速話してくれないか？」

「・・・ああ」

始まるのは遠い過去の物語、ゆっくりと・・・だが確実に未来への
歯車は動き始める。

第五話 過去と心の在り方 「前編」

HRも終わった放課後、家へ帰ろうと身支度を整えていると沢山の人々が私に挨拶をしてくれます。

クラスの担任、仲の良い友達、でも一番多いのは男の子からの挨拶。

私にはKKKという親衛隊がいるそうで、挨拶してくれる大半の男の子がその親衛隊にいる人なんだとお友達が教えてくれました。

でも何故・・・何故私なんでしょう？

私はクラスの女の子の方が私なんかよりもずっと魅力的で可愛いと思います。

それに・・・

私には人から好かれる資格なんてありません。
だって・・・

私は汚れてるんですから・・・
憎しみという泥を被り、作り笑いを浮かべながら人と話す・・・そんな人間です。

何時からでしょう？何をしても笑えなくなったのは……

何時からでしょう？心配してくれる桜ちゃんの顔を見れなくなったのは……

そして何より　　の姿を見ると胸が痛くなるのは……

何故胸が苦しくなるの？何故　　の痣だらけの顔を見ると悲しくなるの……？

何故……何故何故何故ナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼナゼ？
いくら自問しても、いくら考えても決して答えは出ません。

でも答えなんて出なくてもいいんです。
こんな想いは馬鹿げてると解っているから。

悲しむ必要なんてありません……だって　　が傷つくのは当たり前……
前……自業自得なんですから。

だってあいつは

「ヤッホー楓　　どうしたのそんな顔して？何か悩み事？」

トントと軽い衝撃を背中に感じ振り返る。

そこにはエプロン姿の亜沙先輩が顔を覗き込む様にジツとこちらを

見ていた。

「あつ・・・亜沙先輩こんにちは・・・私そんな顔してましたか？」
おもわずぺたぺたと顔を触ってしまっ、だがどこも違和感など無いように思える。

「うん、今はなんとも無いけどね・・・それよりどうしたのこんな時間に？もしかして迷子？」

ニコニコしながら冗談っぽく言う亜沙先輩。

「いえ・・・さすがに学校では迷子にはならないですよ、ちょっと考え事をしてたんですけど気づいたらここに来てたみたいで・・・」

迷子・・・その言葉で昔の事を思い出す。

蘇る懐かしい思い出に知らず知らずの内に笑顔が溢れる。

「ん？どうしたの？」

「フフツ・・・いえ、迷子で思い出したんですけど、タクト君方向音痴なんですよね」

「タクちゃんか？」

「はい、小さい頃・・・」

続きを話そうと口を開ける・・・でも声が、言葉が出て来ない。

「あ」

笑っている顔、怒っている顔、心配そうな顔、そして鮮明に残っている時折見せる大人びた顔。

記憶を思い返せば思い返すほど　の姿がちらつく。

胸が痛い。

思い出の中で　は私に笑いかけてくれる。

胸が苦しい。

とある病室、　は何かを私に言っている。

受け入れられる筈もない現実、胸に広がっていく悲しみ、絶望、そして憎しみ。

体から力が抜けていく。

時折見る夢、私と話しているタクト君と心配そうにこっちを覗き込む　の姿。

「楓!？」

イヤだ・・・見たくない。

崩れていく体と消えゆく意識の中で駆け寄る亜沙先輩の姿が映る。

亜沙先輩、桜ちゃん、タクト君・・・私は・・・この感情は間違ってるなんか無いですよね?だって・・・

あいつは・・・稟は私のお母さんを殺したのだから。

.....

「旅行？」

「うん、これから旅行に行くんだ」

ある日、学校から帰ると突然そう告げられた。

そして母さんの横には大きな荷物が二つほど置いてある。

「実はね？お母さん福引きで温泉旅行を当ててね、皆で行くことにしたの」

嬉しそうに話す母さん。

ただどどうしてだろう？母さんの荷物を見ると俺には嫌な予感しかないんだけど？

「え〜と、皆って誰が行くの？」

「私とお父さんと紅葉ちゃん」

「即答！？」

まあ・・・母さんの荷物に俺の服とか無い時点である程度は予想し

てたけどさ、まさか俺をおいて父さん達と行くとは思ってもみなかった。

「でも母さん達が旅行に行ってる間俺はどうするの？」

「稟君はお留守番」

・・・俺はこの突拍子の無い言葉にどれだけツッコんだのだろうか。ここまではつきり言われると逆に清々しくも感じる。

「それに稟君は幹夫さんが預かってくれるって」

ちなみに紅葉さんと幹夫さんは楓の両親だ。

母さんと紅葉さんは昔、幼なじみだったらしく結婚しても家が近かった為、今でも仲が良いようだ。

「ホントは幹夫さんも行く筈だったけど仕事が休めないから行かないって」

残念そうに話すけど幹夫さんが預かってくれなかったら一体どうするつもりなのだろう？

他の人から見ればツッコミ所満載のやり取りだが母さんの突拍子のない行動の前ではまだまだ序の口の方なので俺は気にしない。

「ゴメンね、稟君も連れて行きたかったけど・・・」

まあ・・・本音を言えば俺も行きたかったさ。

でも今まで母さんがこんな事を言うのは初めてだった、それに母さんの申し訳なさそうな顔を見て文句なんて言える筈も無かった。

だから・・・俺は寂しさを押し込めながらこう答えたんだ。

「ううん、たまには母さん達で楽しんできてよ」

これが母さんとの最後のやり取りだとは知らずに。

.....

「楓・・・大丈夫か？」

「うん・・・大丈夫。少し咳が出るだけだから」

母さん達が旅行に行って二日目の夕方、楓が風邪を拗らせた。本当に突然だった。

体が弱い楓は寝込んでしまい、俺は冷やしたタオルを楓の額に乗せて様子を見るが一向に良くなる気配がない。

ピンポーン

「ケホツ・・・誰か来たの？」

「ああ、俺が出るから楓は横になってるよ」

体を起こそうとしている楓に釘を刺し、玄関へと向かう。

ドアを開けると大きな袋を片手に幼なじみが立っていた。

「タクト・・・どうしたんだ？」

「楓の見舞いだよ。桜も行きたがってたけど用事があるから行けな
いって」

「そっか、ありがとな」

そう言い楓の所へ案内する。

部屋のドアを開けると真っ先に苦しそうな楓の姿が目映る。

「あっ・・・タクト君こんにちは」

「よく大丈夫か？」

「はい・・・稟君が看病してくれたので少し楽になりました」

さっきよりも苦しそうに息をする楓の姿を見るとそれが嘘だということはずぐに解った。

だけどタクトは気にした様子もなく続ける。

「そっか、まあ楓ならそう言うと思ったよ。リンゴ持ってきたから
後で稟にでも剥いてもらえよ？血の味がするかもしれないけどな」

「ちよっ、そこまで不器用じゃ」「はい、ありがとございます」・・・

「」

「俺はそろそろ帰るよ。稟、そんな所での字描いてないでちゃんと
看病しろよ」

「誰のせいだよ!？」

「うるせえ、ツッコむなら外でしろ・・・楓、稟借りてくぞ?」

「ケホッ・・・ハアハア・・・はい」

部屋を出る時に見えた楓の苦しそうな表情を見ても何も出来ない、
それがとても悔しかった。

.....

「稟、おじさんに連絡した方がいいと思うぞ？」

楓の部屋を出た後、何の脈絡もなくそう告げられた。

「おじさんに？でも楓は大丈夫だって……」

「……俺も楓がどのくらい悪いかわからない……でも楓の体が弱いのは稟も分かっているだろ？」

「それは……」

「それに俺達じゃ何も出来ない……」

俺の言葉を遮る様に突き付けられた言葉、それはさっきから俺が感じていた紛れも無い事実。

でも

「魔法は？タクトの魔法なら……」

冷たく言い放つ様にも感じたタクトの言葉に納得出来る筈も無かった。

「無理だ……俺の魔法はケガを治すことは出来ても病気は治せない」

「で、でも」

「……悪いな、とにかく連絡するかはお前に任せる、楓の具合が悪くなったらすぐに連絡しろよ？」

靴を履きながら話すタクト、だけどその横顔は俺なんかよりもずっと悔しそうだった。

「っ！」

馬鹿か俺は！

気付いた時には自分自身に腹が立っていた。

少し考えれば解ることだった、タクトは魔法が使える分、俺なんかよりも悔しい想いをしてる事なんて・・・

そんな俺の心境に気付いたのかタクトは気にした様子もなく話し始める。

「あゝそんな顔すんなよ、お前が悪い訳じゃないんだから。」

「・・・でも」

「はぁ・・・なら言うが、魔法の事を知らない稟が魔法が万能だと思ってる、そんなの当たり前だろ？それに楓の病気を治せないのも俺が力不足だっただけの事だ。だからお前が気にする事なんてないんだよ」

笑いながら話すタクトに何も言えなくなる。

「じゃあ帰るよ・・・ああ、そういや」

ドアを開けて帰ろうとしてたタクトが何か思い出した様に振り向く。

「本で読んだんだけど、冷やすなら額よりも腋の下の方が良いらしいぞ？」

「分かったありが・・・ちょっと待て、腋の下って誰が冷やすんだ？」

反射的に返事をするが、新たな疑問が浮かぶ。

もしそれが本当ならすぐにも試したい・・・だけど楓は熱がある

から動けない、それに親も居ない・・・となると俺かタクト、どちらかが楓の服を脱がさないとならなくなる。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「後は頼んだぞ稟！家の医学書にそう書いてあったから信憑性はバツチリだ！」

「投げやりかよ！？つてお前、医学書つて言つたよな！？それなら知識のあるお前がやつた方が・・・」

「バカ言つな俺にそんな趣味は無い・・・そんな訳だから後は頼んだぞ稟！楓もお前なら」

「ちよつ、待て！趣味つて何だ！？あと最後なんて・・・マジかよ・・・」

あいつ逃げやがった！

ツッコミが言い終わらない内にタクトはムカついてく程のいい笑顔を見せた後、去って行った。

よし！リンゴでも剥くか！

きつとこの場にタクトが居るなら辛口のツッコミ(デコピン等)と共にヘタレ！とか意気地無し！等といった明らかに理不尽な言葉が俺を襲うことだろう。

いいじゃないか現実逃避したつて！九歳でも理性はあるんだよ

!!

「……ん？」

リンゴを取るうと袋を覗くと底の方に小さく折り置まれたメモ用紙が二枚あった。

一枚目、桜から楓に宛てられた手紙。

俺が読むのもあれなので後で楓に渡しておくことにする。

二枚目、今度はタクトから俺と楓に宛てられた手紙。

何故直接渡さないのか、そんな疑問はあったものの、特に気にせず読み始める。

楓には謝るような文章。

何も出来なくて悪い等といった言葉が書いてあった。

面と向かって優しい言葉が言えない不器用な親友。

知らず知らずの内に笑顔が浮かぶ。

そして俺には……

「嘘だろ」

浮かべていた笑顔はすぐに消える程の内容。

そこにはタクトの親が死んだという事実。
そしてもうすぐ訪れる別れを知らせる言葉が書かれていた。

第五話 過去と心の在り方 「後編」

「ッ！」

苦しい……

向き合う事も思い出す事も辛い過去、自分の心をさらけ出す恐怖が俺を締め付けていく。

……ここでやめておけ……もう十分だ……桜達も解ってくれる……

自分自身を護るように心が弱音を吐く。

「どーした稟？……辛そうだがそろそろ止めとくか？」

「ハハッ……冗談だろ……止めれる訳無いだろ」

カマをかけてくるタクトに俺は笑みを浮かべながら答える。

せつかく向き合える事が出来るのに……今までの自分とケリをつける為にここまで来たのに今更逃げる訳にはいかない。

弱音を吹き飛ばす様に言葉を発し、自分を奮い立たせる。

弱いな・・・俺はあの時から何一つ変わって無い。

「稟君・・・」

「大丈夫・・・大丈夫だからさ・・・そんな顔するなよ」

今にも泣き出しそうな桜を安心させたいが為に笑みを作るが上手くいかない。

「・・・あれはタクトから手紙を買った後だった・・・」

わざと一拍置き自分を落ち着かせ続きを話す。

続く事が当たり前だと思っていた日常が壊れ始めた日の事を

.....

「稟君・・・本当にすまない・・・」

「おじ・・・さん？」

何で・・・おじさんは謝ってるんだ？

楓の看病をして・・・タクトが見舞いに来て手紙を読んで・・・それから・・・なにをしてたんだっけ？

臆げにしか思い出せない記憶を無理矢理引っ張り出そうとするがなかなか思い出せない。

辺りを見渡すと長い廊下、今俺が座っている長椅子、そして呼吸をするたびに消毒液の様な匂いが漂う。

「ああ」

そっか・・・あれから楓を看病していたけど熱が下がらなくて・・・帰って来たおじさんが病院に連れて来たんだっけ。

でも・・・でも何でおじさんが謝ってるんだっけ？

嗚呼そうだった、ナニかを言われたんだ・・・ナニを言ったんだっけ・・・オジサンは？

「おじさん・・・よく聞こえなかったからもう一度言って貰えませんか？

今・・・なんて言いました？」

思い出せない言葉をもう一度聞こうとおじさんに質問する。

だけど俺の口から出たのは感情の籠ってない・・・自分でも驚くほ

ど無機質で冷たく感じる言葉だった。

「・・・楓の容体を電話で紅葉に伝えたんだ・・・紅葉達が泊まっていた旅館の人達が言うには電話が終わった後、紅葉達はすぐに旅館を出たそうだ・・・きつと楓の事が心配だったんだろっな・・・」

おじさんはそう続けたが一旦言葉を切る。

何故・・・おじさんはそんな事知ってるんだ？それに紅葉“達”って・・・

「・・・警察の方はこの雨の中、スピードを出し過ぎた事が事故の原因と考えてるらしい」

「

スピード・・・事故・・・原因？

「あ・・・ああ」

途切れ途切れだった記憶がまるでパズルの様に嵌まって行く。

そして嵌まる度に朧げだった記憶が蘇り、それと同時に体が震える。

おじさんは続ける。

「私が・・・私が三人を殺したも同然だ・・・」

事故を引き起こしたのは自分自身だということを・・・

「紅葉も・・・稟君の両親も・・・皆死んでしまったッ・・・」
母さんも父さんも紅葉さんも死んだと・・・おじさんは拳を握りしめ涙を流し、そう告白した。

「稟君・・・本当に・・・本当にすまない・・・私があの時」

電話さえしなかったら。

きつとおじさんはそう続けようとしたんだと思う。けどおじさんの口から出たのは息を呑む様な微かな声。

何事かと振り返るとそこには

「おとう・・・さん？」

そこには風邪で弱り切った身体を支えながら立つ楓がいた。

「楓・・・何をしてるんだ・・・ちゃんと寝てないとダメだろ？」

楓の姿を見たおじさんは一瞬驚いた様子を見せたが、直ぐさま優しく口調で楓を部屋へ戻そうと手を伸ばす。

「お父さん・・・お母さんは？」

だけど楓は伸ばされた手を取ろうとはしなかった。

「もう旅行から帰ってきてるよね？・・・ケホッ・・・早くお母さんに会いたいです」

「・・・楓」

身体を震わせ必死に現実から逃げ自分を守る様に身を縮め話す楓をおじさんは優しく抱き寄せゆつくりと撫でる。

「ケホッゴホッ！・・・お母さんが帰ってきたら・・・いっぱい・・・」

「楓っ・・・今は受け入れられなくてもいい・・・だから・・・」

「ケホッ・・・私・・・行く前にお母さんと約束したんです・・・今度は・・・家族で行こうって・・・嘘ですよ・・・お母さんが・・・うっ、ケホッ・・・ゴホッゴホッ！」

「？」

「ッハア、ゴホッゴホッ！！」

「楓？」

楓は数回咳をしたかと思うとおじさんに寄り掛かる様に身体をぐったりとさせる。

「おい・・・しっかりしろ楓！・・・楓！！」

「・・・」

おじさんは幾度も楓に呼び掛けるだけど楓は答える事も身体を微動だにすることもなかった。

「・・・楓」

光も何も映らない瞳。

俺は声を掛けるがぐったりとおじさんに寄り掛かった楓は微動だにしない。

その姿はまるで心も、感情もすべて無くしてしまった人形の様だった。

.....

「よゝ稟、久しぶりだな」「・・・ああ」

あの事故から一週間が経った。

あれから帰る場所も行く宛も無くなった俺は幹夫おじさんに引き取られ、今は芙蓉家に居候している。

そしてあの事故から一週間経った今日、タクトは引っ越してしまう。

「この公園も懐かしいだろ？この頃来てなかったからな・・・」

「ああ」

待ち合わせた場所は近所の公園。

小さい頃、皆で遊んだ公園、そして俺達はここで初めて出会った。

そんな大切な思い出が詰まった場所だ。

「まあ最後に顔見れてよかったよ、あれから話しなんて出来なかったからな」

「ッ！ああ・・・そうだな」

胸がズキズキと痛む。

今だけじゃない、父さん達と別れた後、一度もこの痛みが取れる事は無かった。

「楓の風邪は治ったか？・・・まっ、まさか本当に腋の下を冷やさんじゃ・・・!?」

「・・・そんな訳無いだろ」

俺はこの一週間で沢山の痛み、今まで知らなかった感情を知った。

人と別れる痛み、大切な人と二度と会えなくなる辛さ、そして俺は今

「どうした稟？ツッコミにキレが無いぞ」

「何で・・・さ」

嫉妬と云うものを知った。

「何でお前は平気なんだよ……」

声が震える。

それが悲しさから来ている物なのか、それともタクトに対する悔しさから来ているのか……俺には解らない。

「俺なんて……この一週間父さん達が死んだなんて受け入れる事なんて出来なかった！なのに……なのに何でお前は平気な顔してるんだよ！……何でそんな風に冗談が言えるんだよ……」

一週間前、タクトの親父さんも死んだというのにタクトは悲しそうな顔一つ見せない。

それどころか今も冗談を言い、俺を元気づけようとしてくれる。現実を未だに受け入れられない俺とは違い、家族の死を受け入れ、強い心を持ったタクトが羨ましかった。

「なあタクト……何でお前はそんなに強いんだよ……弱
い俺は……どうすればいいんだよ……」

情けない、悔しい。

そんな感情が頭の中をぐちゃぐちゃに掻き交わす。

心が俺を責め立てる、“受け入れる”と……だが心とは裏腹に俺はそれを拒絶する。

解ってるんだ……このままじゃ何も変わらない事も。

だけど俺がその事実を認めれば自分の心が壊れてしまいそうで恐か

った。

「・・・稟、お前は俺の事を見て冷たい奴とか思わなかったのか？」

「えっ？」

タクトからの思いがけない質問に思わず素っ頓狂な声を上げてしま
う。

「・・・お前は、俺が泣いたり悲しんだりしないから父親の死を受
け入れた、そう思ったから俺の事を強いつて言ってくれたんだろ？」

「・・・ああ」

暗い話しとは裏腹に笑いながら話すタクトに不信感を募らせる。

だつてそうだろ？

一人しか居ない父親が死んだのに笑うなんて・・・

そんな俺の考えを一蹴するかの様にタクトは続ける。

「それは違うんだよ、俺はあいつが・・・父親が大嫌いだから、
死んだ事に悲しいとか寂しいそんな感情が湧かないから泣けない・・・
ただそれだけだ」

「」

一瞬間き間違いかと思っただが、先程と変わらない笑みを浮かべたま
ま、それがさも当たり前前の様に淡々と話すタクトに俺は言葉を返す
事も理解する事も出来なかった。

「・・・軽蔑したか？」

「えっ？」

「お前が親の事が好きなのを知っててこんな話するなんてどうか
と思っただけどさ・・・まあなんだ！とにかく俺が何を言いたいかと
いうとだな・・・あゝえっと・・・」

突然話しを切ったかと思えば今度は下を向き唸り始めたタクト。

顔を覗き込むと顔を赤らめながら口をばくばくと動かし何かを言お
うとしている。

やがて意を決したのか勢いよく顔を上げこう言った。

「お前は弱くなんか無い！！」

「！！！」

「親が死んで悲しむ事がおかしいか！？死を受け入れる事が出来な
くておかしいか！？大切か人が居なくなつて悲しむなんて・・・そ
んなの当たり前だろ！」

俺だつてお前や楓達と別れるのは悲しい・・・俺は・・・皆と別れ
るなんて嫌なんだよ！」

「タクト……」

顔を真っ赤に染め一生懸命言葉を伝えようとする姿に涙が溢れる。

「だからさ……お前は！！」「もういい……もう大丈夫だからさ……ありがとうタクト」

涙が止まらない。

間違つて無いと認めてくれた事、どんなモノよりもずっと価値のある言葉をくれた事

そして何よりタクトが本音を話してくれた事。

それが一番嬉しかった。

……

「……泣き虫」

「……うるさい」

あつれー？さっきまで居た優しいタクトは何処に行ったのかな？

未だ顔を赤く染めそっぽを向いてるタクトに反論したいが本当の事

なので何も言えない。

・・・そういえばこの前テレビでタクトみたいな人見たんだけどな。
・・・なんて言うんだっけ？

「・・・デレツン？」

「・・・はっ？」

・・・イヤ、俺が悪かったからさ、とりあえずその冷たい表情と何言ってるんだコイツ？っていいいたげな顔はやめてください。

「・・・そういやお前はこれから何処に行くんだ？」

ふと、まだ引越し先を聞いてない事に気づき聞いてみる。

「あれ？・・・ああそういやまだ言ってなかったな、これから魔界に行くんだよ」

「・・・なんだ？、青いプルプルした奴でも倒しに行くのか？」

「イヤ、そんな雑魚よりも魔王あたりを倒しに行こうと・・・」お前が言つと冗談に聞こえないからな！？」

まあ、実際に魔界には王様が居るそうで、人々はその人の事を魔王と呼んでいるそうだ。

「ベタなRPG系のゲームだと今頃地球はその人の手により滅ぼされてるだろうな」

「厨二びよ・・・」

「・・・」

「ゴメンナサイ・・・謝るから是非その手を降ろしてくださいお願いします・・・」

無言のまま今にも俺の額にデコピンを放とうと力を溜めているタクトにすぐさま頭を下げる。

端から見れば子供同士の軽いバツゲーム的なものに見えるだろう・・・が、タクトのデコピンはバツゲームの様に慈悲に満ちている訳では無い。

昔の事だがイジメっ子だった男の子を気に入らないとの理由でニメートル程ぶっ飛ばした事がある、もちろんデコピンでだ。

更に楓や桜がその男の子にイジメられていた時はアイアンクロー魔法で回復 デコピン 魔法で回復 アイアン・・・と、エンドレスで続けていた事もある。(楓達が頼むと止めたが)

本人曰く、“これはイジメじゃない・・・肅清だ”・・・と素晴らしい笑顔で言い切ったのはまだ記憶に新しい。

つまりだ、コイツのデコピンはシャレにならない。

それ程の威力を持ったデコピンを笑顔で言うコイツはえ・・・イヤ、ドSだと思っ。

「でも何で魔界に行くんだよ？」

「・・・あいつは魔界で働いてたらしくてさ、死んだのも魔界だったからな・・・だから行くんだよ」

「・・・そっか、タクトの親父さんってどんな仕事してたんだ？」

「さあな、医者でもやってるんじゃないか？家にも医学書やら気色悪い挿絵が載った本が沢山あったからな」

ああ、そういえば楓が風邪引いた時医学書がどうとか言ってたな・・・

そんなことを考えながらと同時に、コイツの話す態度を見ると本当に父親の事が嫌いなんだと解る。

「・・・向こうに行ったらまずは勉強だな！」

「・・・えっ？」

「いや・・・魔族は魔法が使えるだろ？だからさ、向こうで魔法の勉強をして、今度こそ・・・今度こそ病気も治せるようになる」

「タクト・・・お前」

「・・・まあ俺の話はここまでだ！稟お前はこれからどうするんだ？」

パンツ、っと大きく柏手を打ち話しを変えるように尋ねられる。

「・・・秘密だ」

言ってしまうおつか・・・

一瞬そんな考えが頭の中を過ぎるがすぐさまその考えを消す。

俺が何をするか、それを聞けばタクトは反対するに決まっている。そう思ったからそう答えた。

「・・・まあ何をするか知らないけど無理だけはするなよ？楓や桜が悲しむからな。」

「なんでそこで二人の名前が出てくるんだよ？」

「・・・いやなんでもない・・・とにかく！二人を泣かせるなよ？泣かせたらデコピンだからな。」

「ハイッ！泣かせない様、精一杯努力したいと思います！！！」

それを聞き、タクトは満足げな笑みを浮かべる。

「よし・・・じゃあ俺はそろそろ行くよ。」

「・・・もう行くのか？」「ああ、実はもう時間が無いんだよ・・・それにここには別れを言いに来ただけだからな。」

そう言い終わるとタクトは空を仰ぐように顔を上げる。

「また・・・帰ってくるよな？」

「当たり前だろ？絶対に帰ってくる、何年掛かろうが必ずこの街に・・・ここが俺の居場所だからな。」

今にも消えそうな程儂い笑みを浮かべ、そう答える。

「・・・“またな”稟、楓達にもそう伝えてくれ。」

そう言いタクトは歩き出す、一度も振り返らず、一度も歩みを止めずに

.....

「またな」か・・・それは面と向かって皆にも言ってもやれよ・・・この恥ずかしがり屋め」

タクトの姿が見えなくなると同時に呟く。

別れ際に言ったとしてもあいつの事だ、俺が言った所ではぐらかすのが関の山だろう。

実はあの日俺は気づかなかったが、タクトから貰った手紙の裏には続きが書いてあった。

手紙には“もし見送りに来てくれるなら楓達は呼ぶな、もし呼んだら・・・フフフツ”と書かれていた。

(手紙に本気でツツコんだ人は俺が初めてだと思う)

これから先、沢山の人と知り合うだろうがあんなに不器用な人間はタクト一人だけだろうな・・・不器用でぶっきらぼうのクセに誰よりも優しいあいつの事だ、今日楓達を呼ばなかったのも別れの挨拶を言いたくないが為なんだろう。

「ありがとな・・・タクト」

誰もいない公園で一人、小さな声で呟く。

そしてとある決心を胸に抱き俺は楓がいる病院へとゆっくりと歩き出す。

・・・昔を振り返ると何時も思う。

“あれ”は楓にとって・・・いや俺達にとって良い選択だったのだろうか？

でも・・・例えそれが間違いだったとしても俺は後悔なんてしてない。

あの時決心したんだ・・・何に変えてでも、例えどんなモノを失ったとしても俺は

.....

「楓を助けるって・・・そう決心したんだ」

・・・どのくらい話しただろうか、屋上から見える夕日はゆっくり地平線の彼方へと消えていく。ゆっくりと視線を前に向けると思案

顔の桜が目映る。

「……どういうこと？倒れたのは分かったけど……でもそれは風邪のせいでしょ？助けなくても自然に治るんじゃない……」

「要は倒れた原因は風邪じゃなかったんだろ？」

悩む桜に対してタクトは分かっているかのようにじつと俺を見る。

「……ああ、あの時医者には心に問題があるって言ってた」

紅葉さんが死んだ……その事実は風邪で弱り切った楓の身体と心をいとも簡単に壊した。

その結果、楓は倒れ、容態も悪化した。

「……楓はその事実を受け止める事が出来ずに寝込んだ……それから何日か経った時、医者に言われたよ“このままだと身体が持たない”って」

無情にも放たれた言葉。

それは俺やおじさんにとって死刑宣告に近い発言だった。

「……稟君が楓ちゃんを助けたいって決心したのは解ったよ……でもどうやって楓ちゃんを……」

「……それは」

「……嘘でもついたんだろ？」

「ッ！なんで」

言い淀んでいるとタクトに凶星を付かれ、思わず声を上げる。

「判るかって？……判るに決まってるだろ、この五年間医学をか

じつて来たんだ・・・そんなの嫌でも判る」
「・・・・・・・・」

苦々しく話すタクトに反論も言葉を返すことも出来ない。

それこそが五年前に俺が行った真実だから。

「・・・・・・・・ああ、タクトの言う通り俺は楓に嘘を付いた」

医者には心に問題があると言った後こうも言っていた、“せめて何かきっかけがあれば”と。

紅葉さんが死んだ、その事実を受け止められないショックで楓は倒れた・・・ならもっと大きなショックを与えて楓の心を揺さぶる事が出来たなら楓は元気になるかもしれない、俺は医者の言葉を聞きそう考えた。

「・・・・・・・・だから俺は楓に“俺が父さん達に電話したせいで皆死んだ”って・・・・・・・・」
パンッ

全てを言い切る前に小気味よい音と共に頬に痛みを感じ言葉が途切れる。

痛む頬を撫でゆっくりと前を向くと見たくはなかった大切な幼なじみの泣き顔が映る。

「・・・桜」

.....

まずイラッと来た。

前から感じてはいた事だが稟は何もかも背負い込む癖が有るらしい。まあ、それは稟の長所でもあり短所でもあるが。

今回の事も誰にも相談せず背負い込んだ結果がこれだ。

とりあえずパーでするかグーパンにするかで悩んでいる時小気味よい音が聞こえたので顔を上げると、まず泣いている桜が目映る。

「・・・桜」

「・・・稟君のバカ！なんで相談してくれなかったの！？」

・・・あれ？もしかして先越された？

痛むのか頬を撫でている稟を見てそう思った。

「俺だつて何度も悩んださ・・・でも他に方法がなかった、だから・

・・・」

「それでも・・・言ってよ・・・」

とめどなく溢れる涙を拭いながら桜は呟く。

「ずっと・・・ずっと心配してたんだよ？楓ちゃんが退院したと思

つたら稟君の事恨む様な目をして見てた・・・それに中学に上がった時あんな事言うから私・・・稟君に嫌われたかと思った」

「・・・ごめん、でも桜も知ってるだろ・・・中学に上がると同時に楓に親衛隊が出来って事は・・・もし楓が俺を憎んでると判ったら・・・」

「それを口実に・・・か」

実際、亜沙先輩は稟は奴らから虐められていたと言ってた。

もし桜が稟と親しいと分かったら矛先を桜に変えるかもしれない、そんな思いがあっただからこそ稟は桜を突き放したんだろう。

「俺は楓を助ける為に皆に嘘をついた・・・これが今まで隠してきた過去・・・楓が俺を恨む理由だ・・・」

これで判っただろ？俺と楓は二度と・・・」

バンツ！！

・・・タイミングが良いのか悪いのか解らないが稟の言葉を遮るように勢いよく屋上の扉が開く。

「・・・亜沙先輩？」

ポツリと呟く桜の言葉で扉の方を向くと、急いでたのか肩で息をしているが確かに亜沙先輩がいた。

「?どうしたんですか亜沙先ぱ「・・・楓が倒れた」・・・えっ？」

「だから楓が倒れたんだってば!!保健室に誰も居ないしボクどうしたらいいか解らないし・・・あゝもう!とにかく早く来て!!」

ガシッ！

「・・・はっ？」

「ほら早く!!！」

「ちょ、亜沙先輩！今稟と話してたなら俺じゃなくて稟を引きずって行けば・・・」

「いいから文句言わないの！ほら、タクちゃん早く!!！」

一瞬でシリアスの空気を破った亜沙先輩は俺を引きずり保健室へと向かう。

ちなみにまったくの余談だが保健室に着くまで引きずられた俺の身体は埃で真っ白になったのは言うまでもない。

第六話 親衛隊と昼休み

「あゝいい天気だな・・・」

秋晴れの陽射しが眩しい週明けのとある一日。
空を仰ぎおもむろにそう呟くとこの一週間を振り返ってみる。

転入してもう一週間か・・・毎日がドタバタだったな・・・学校では亜沙先輩に引きずられたり、登校中に亜沙先輩に会えば張り手されたり、亜沙先輩に稟の事を話せばツンデレと弄られたり・・・

あれ？どうしてだる涙が・・・

「い」

まあ楽しいからいいけどさ、そういえば楓が倒れた時は焦ったな・・・結局保健室に着いた時にはピンピンしてたけど。

「い、のか！」

ああ、あとクラスの奴らと仲良くなれたのは良かったな・・・

楓達と話していると普通に接してくれたけど、やっぱり魔族と神族と関わる時間が増えるにつれてこの眼も受け入れられるようになる。

・

「おい！聞いているのか！？」

「ちっ！」

「タクト、気持ちはわかるけど舌打ちするなら小さくしろよ？」

人が思い出に耽っている時に大声で邪魔されたので舌打ちをすると隣にいる稟にツッコまれる。

「てめえら生意気なんだよ！」

「毎日女はべらせやがって！！なんて羨ま・・・イヤイヤこのたらし野郎があー！！」

「ベツリイイシイイットオオ！！」

先程から訳の解らない罵声を浴びせてくる男共。

声の出所を見ると目の前にはお世辞にもカッコイイとは言えない男子が十人ほど道に広がるように並んでいる。

「・・・なあ稟、今日の学食の日替わりってなんだっけ？」

「・・・それが今重要か？」

「ん〜そうでもないかな？」

「そっか・・・なら現実逃避を辞めて目の前の現実を受け止めるよ？」

「・・・はい」

何かを悟ったような口調で言ってくる稟に何も言えなくなる。

・・・別にいいじゃないか逃避しても。

だってあれだよ？朝から楓のストーカー集団（親衛隊）相手にしなきゃいけないんだよ？逃避もしたくなるだろ・・・

「死ねえ！！この女たらし共があ！！」

『たーらし！！たーらし！！』

嫉妬の塊と化した男共の大合唱が早朝にも関わらず辺りに響き渡る。

お前等は何処の小学生だよ？

「・・・稟、お前が蒔いた種だ、俺は先に行くからお前が処理しろよ？」

「ちよつ、待て待て！・・・なんで俺なんだ！？」

「イヤ・・・お前しか考えられないからな？」

第一、俺は女の子をたらしした覚えは一つもない。

・・・となると鈍感+ギャル主スベツクの持ち主のお前しか居ないだろ？

「それに平和主義者（自称）の俺は無駄な争いはしたく無いんだよ・・・そんな訳で潔く生贄になってくれ」

「平和主義を語るならまずは穏便に済ませる方法を考えるよ!？」

・・・まあ、稟の言うことにも一理あるけどさ、

やるだけ無駄と感じるのは俺だけですか？

「まあいつか・・・とりあえず俺達に身に覚えが無いのでそこを通してくれませんか？」

稟に言われた通り穏便に済ませようと、出来るだけ相手を刺激しないように敬語を使い丁寧に話す。

「くっ・・・ハハハ!!そんなこと知るかよ!」

だが俺のなけなしの努力も、ものの三秒で砕け散った。

親衛隊のリーダーであろう男は意地の悪いニタニタとした笑みを浮かべながらそう言った。

「ハハハ!土見が珍しくダチと居ると思ったらこんな臆病者だったとはなあ!!--」

どうやら穏便に済ませようと敬語を使ったのがまずかったようだ。リーダー格の男が笑うと周りのバカ共も一斉に笑い出す。

「お前らぁ!! やつちまえ!」

『キーーーーー!!』

「ちよつ、待つてくれ!! やるまえに理由を教えてくださいませんか?」

おお・・・なんてノリのいい戦闘員なんだろう。

男共のノリに感動している最中、稟がリーダー格の男に問い掛ける。

「フン! いいだろう・・・冥土の土産に教えてやる!」

「・・・ちつ」

ノリのいい戦闘員とは裏腹に一々見下すような態度を取るリーダー?にだんだんと苛立ちが募る。

「いいか? てめえは楓ちゃん、桜ちゃんに近づいた!!」

「はあ・・・」

何を言つかと思えばこれかよ・・・

聞くにも堪えない無茶苦茶な持論を適当にあしらう。

「土見は土見でいくら殴っても楓ちゃんの家から離れようともしない!!」

「所謂どーせいですね」 「お前は何を言ってるんだ!? 親衛隊を焚きつけるような事を言うなよ!？」

とりあえずいい加減コイツの目茶苦茶な発言に飽きてきたので稟を弄る事にした。

「え〜? コイツの馬鹿げた持論聞かされるくらいなら稟弄った方が

面白いじゃん？」

「俺は面白くもなんとも無いけどな!？」

「おい……」

稟を弄っている最中怒りを孕んだ声がしたので会話を止める。

声のした方を向くと額に青筋を浮かべた親衛隊のリーダー？がこつちを睨んでいた。

「お前ら……いい度胸してるな？今の状況が分かっているのか!？」

「もう少しで遅刻する時間帯だね」

「そこじゃないだろ!？」「お前等ああ!!！」

俺達の態度に痺れを切らしたのかリーダー？が殴り掛かって来る。

パン！！

「アウチ!？」

ダン！（地面にバウンド）

ダダン！（二回目）

ズザーー！！ガッツ！（電信柱に激突）

殴り掛かろうと向かってきた男に咄嗟に繰り出したのはデコピン。

力の半分も出していないがデコピンとは思えぬ程の快音と共に吹き飛んで行った。

.....

「あつ・・・やべつ」

「・・・なんでデコピンで人が五メートルも吹っ飛ぶんだ？」

「気にするな」

俺もそんなに吹っ飛ぶとは予想外だった為、もはやそれしか言えない。

『たつ・・・たいちよー!?』

「!! 隊長の頭から血が!! おい、早く病院へ!」

「病院つて110だっけ?」

「バカ! 警察呼んでどうする! 117だ!!」

呆気にとられていた親衛隊の男共は隊長の元へと集まって行く。

それと隊員よ、それは時報だ。

「あつ、リーダーじゃなくて隊長だったんだな・・・それと110でも間違いでも無い気がするけど・・・」

「反応するところ間違ってるからな? あと心配してやれよ」

・・・心配するのは二の次ですか?

心配するよりもツツコミを優先した稟も十分酷いと思う。

「まあ特に気にするほどでもないだろ? 早く行こうぜ」

「・・・平和主義は何処にいったんだよ・・・」

「バカ言つな、俺は手を出してない。それに攻撃してきたのはあつちなんだから正当防衛だろ？」

「・・・」

頭を痛そうに抑えている稟と一緒にさつさと学校へと向かう。

ちなみに親衛隊の隊長はその日、救急車で運ばれて行きその日の内に退院したそうだ。

.....

「ど、どうですか？」

「ん・・・普通に美味いぞ？」

「あむ・・・ホントだ、いいなー楓ちゃん料理が上手くて」

午前中の授業も終わり今は昼時。

楓と桜は弁当を、俺は購買で買ったパンと楓達の弁当をちよくちよく貰い食べている。

「タクト君どうしました？」

「ん？いや視線が痛いと思ってな・・・（やっぱり稟は居ないか・・・）」

稟を探してキヨロキヨロと教室を見渡していると楓に声を掛けられたので咄嗟に嘘をつく。

この一週間、昼時に稟の姿を教室で見かける事は無かった。桜の話によると、あいつは授業の時間帯以外、絶対と言っていいほど教室から居なくなるそうだ。

「アハハ・・・確かに視線を感じるね・・・」

「だろ？こつちにしたらいい迷惑だ・・・楓、そんな顔するな、お前に責任は無いんだから」

「タクト君・・・ありがとうございます」

つい昔の癖で落ち込み気味だった楓の頭をポンポンと撫でる。

・・・あつ、殺気が増しやがった。

「アハハ・・・それにしてもタクト君って変わったよね？」

殺気に気づいたのか濁いた笑いを零した桜は唐突にそう言った。

「ん？そうか？」

「はい、昔のタクト君は恥ずかしがり屋でしたから・・・あつ！そういうえば昔・・・」認めるからそれ以上言わないで下さい・・・お願いします・・・」

心当たりがあまりにも多過ぎるので頭を下げ楓にお願いする。

これ以上ネタが出来るのはもうゴメンだ・・・それに昔の事を稟が話したらツンデレだとかシャイだとか・・・散々亜沙先輩に弄られたのだから若干トラウマ気味なんだよ。

「タクト君も大変だね〜」「桜、お前は理由を知ってるだろうが」「稟が亜沙先輩に過去を話し、そしてなぜか俺が弄られている時、側には当事者の稟と桜が揃って俺達のやり取りを傍観していた事があった。」

理不尽だと思っるのは俺だけですか？

「理由？・・・タクト君何かあったんですか？」

「・・・いろいろあったんだよ・・・」

そして楓さん、そこは掘り返さないでください。

第六話 親衛隊と昼休み（後書き）

ども！クロです！

車校に通ったり資格やらを取ってたら全く書けませんでした。

もう少し書こうと思ったりもしましたがそれだと一ヶ月更新出来な
いと思い、今回はかなり短めです。

あとプロと一話、二話を修正しました。

・・・文才が欲しい。。。

第七話 悪戯と告白？

「タクちゃんいい？女の子は繊細なんだから簡単に嘘なんかついちゃダメなんだよ？」

「ハイ反省してます・・・反省してますから足崩しても良いですか？」

「ダメ！反省してるなら正座してなさい！」

「あはは・・・」

なんともいたたまれない空気の中、真つ赤な顔をしたまま俺を叱る亜沙先輩の横で渴いた笑みを浮かべる楓。

何故こんな事になったのか、事の始まりは一時間前まで遡る。

.....

「・・・なあタク」

「なんだ？」

「俺さ・・・」

お前になにかやらかしたか？」

「いや〜なにも」

躊躇いがちな口調で稟は俺に質問するが特に心当たりは無いので適当に答える。

その答えを聞いた瞬間、

稟はハアと小さな溜め息をつくと続きを話し始める。

「そっか、なあタクト」

「なんだ？」

「なら何故俺は引きずられてるんだ？」

「……………」

「……………」

……………

「それくらい察しろよ」

「なんだその答えは！？無理に決まってるだろ！？」

放課後、稟が帰りの仕度をしている最中、ふと稟に用事を思いだしたがと説明するのが面倒なので手っ取り早く手を……もとい襟首を掴み拉致ってみた。

「…………で、何処に連れてくつもりなんだ？」

「それくらい察し…………もうそれはいいからさっさと話しを進めろよ！？」

「ちっ、わかったよ…………今日の昼時にさ、放課後話しがあるから稟を屋上に連れてきてって桜に頼まれたんだよ」

「…………？」

理解出来ないのか、首を傾げる稟。

こいつの事だ、この思春期の男子が羨むシチュエーションで告白のこの字も出てこないんだろう。

何故だろう、首を傾げるその姿を見てるとこいつに想いを寄せる桜がだんだんと不敏に思えてきた。

.....

茜色に染まっていく空を見上げ待ち人を待ち続ける少女。

その顔は夕焼けのせいなのか朱く染まり緊張感が伝わって来るようだ。

ギイ・・・

軋むような音と共に屋上の扉が開かれる。

目の前に広がる茜色に眩しさをを感じるがそれもすぐにおさまる。

「 あ、稟君・・・ 」

「 桜・・・待ったか? 」

「 ううん、私も今来たばかりだから・・・ 」

「 そっか・・・ 」

会話が續かない二人。

その姿はまるでカップルの様に初々しく、微笑ましさに溢れていた。

「・・・なあ桜、話ってなんだ？」

僅かな静寂の後、男は意を決した様に尋ねる。
口調に大きな変化は無いがその顔には僅かな期待、不安が見え隠れしている・・・ような気がする。

「う、うん、あのね私稟君に話したい事があるんだ・・・」
「話したい事？」

「うん・・・私・・・私ね！」

何かを決意したように勢いよく顔を上げる桜。

だがその前に・・・

「・・・良い雰囲気のところ悪いけどさ・・・」

お前達、俺の事完璧に忘れてるだろ？」

俺という存在を思い出していただくか？

いよいよ話の核心に迫る時、モノローグのネタも切れ、これ以上二人のラブコメを傍観するのもいたたまれないので意を決し二人に話し掛ける。

「ラブラブするなら後でしてくれよな」

「タタタタ、タクトきゅん！？ななななにを言ってるのかな！？」
とりあえずからかいの意味を込めて二人にそう言う。

あんな光景を見せ付けてくれたんだ・・・きっと稟も桜の好意に気がつ・・・

「そつだぞタクト？桜も嫌がってどもってるじゃないか」

前言撤回

どうやら先程のラブコメじみたシチュエーションでもこいつは桜の好意にすら気付かないらしい。

こいつは素であるラブコメ地味たやり取りをしていたのか？

「お前は黙ってる、この朴念仁」

「さて！何故お前が怒ってるのか解らないがそれはヤバ・・・」

ミシミシミシイッ！！

「アタマガアアア！！！？」

頭蓋からヤバイ音が響くが止める気はさらさら無い。

鈍感な稟にお仕置きの意を込めてアイアンクローを喰らわす。

「さて稟、何故今お前はアイアンクローを喰らっているのか簡潔に、

そして三秒以内に答える、さもないと・・・」

「！？タクト、それ以上力を込めようとするな！俺の頭がありえない形にイイイイ！！？」

「やっぱり昔と変わらないなあ・・・」

痛みへのたうちまわる稟、そんな俺達のやり取りを笑顔のまま傍観する桜。

放課後の屋上ではそんなシュールな光景が広がっていた。

.....

「ハアハア・・・つく、まだ頭が痛む」

「日頃から鍛えてないからこんな事になるんだよ」

「頭をどうやって鍛えろと！？・・・いや待て、お前遠回しにバカって言ってるだろ？」

「ソナナワケナイダロ？」「カタコトで言われても説得力無いからな？」

アイアンクローから解放されても痛みが退かないのか、頭を摩りながらツッコミを入れる稟。

・・・三割程度しか力入れてないのにそんなに痛いのか？

「・・・待て、何故俺の頭に手を置く？」

「気にするな・・・意識が飛びそうになったり、花畑が見えたらタツプしろよ？」

「お前は笑顔で何を言ってるんだ！？」

「いや、変に不安を与えると悪いと思つてな」

「不安を与えるような事をしなければ良いだろ!？」 「稟を弄る」とが生きがいの俺にとってそれは無理な話だ」

「真面目な顔でお前はなんてこと言つてくれてんだよ!？」

「・・・ねえタクト君」

稟とじゃれ合つてると不意に今まで黙り込んでた桜が話し掛けてきた。

「私稟君と話したい事があるから・・・席外して貰つても良いかな?」

「・・・わかった」

先程までの和やかな空気が消え去っていくのを感じた。

普段の桜には似つかわしくない真剣な表情をうかべそう言うと桜は稟と向き合う。稟は桜の雰囲気を感じたのか、すぐさま顔を引き締め桜の言葉を待つ。

(さっきの続きを言つつもりなのか?)

だが桜の表情を見る限り明らかにそんな雰囲気ではない。

僅かな疑問を残しながらも、二人の邪魔にならないよう俺は一人屋上を後にした。

.....

「・・・暇だ」

ただ待つてるのも暇なのでこれを機に俺は校内を歩き回る事にした。だが放課後だった事もあり生徒はおるか教師にも会わない。亜沙先輩が居る料理部に顔を出すという手もあったが、そこには楓も居る可能性もある・・・っというより亜沙先輩に捕まったら絶対に質問攻めにあうので却下。

・・・あれ？そう考えると楓に会う事もヤバくないか？

「まあ行かなければ会うことも無　　「あれ？タクちゃんこんな時間は何してるの？」・・・」

・・・なあ神様あんた俺の事嫌いだろ？

後ろを振り向くと、そこには声の主であろう亜沙先輩と大きなダンボール箱を抱えた楓が首を傾げていた。

「タクト君？まだ学校に居たんですね、どうしたんですか？」

「あゝ・・・えっと」

「あつ！もしかしてタクちゃん迷ったとか？」

何故真つ先にそこを疑うんだ？

第一学校で迷子になる奴は居ないと思う。

「違いますから・・・ってなんで亜沙先輩が方向音痴のこと知ってるんですか？」

「へゝタクちゃん方向音痴なんだゝ」

しまったああ!?

おもわず心の中でそう叫んでしまったがもう遅い。

目の前の小悪魔は傍から見ればものすごく綺麗な笑みを、俺にとつては悪魔の笑みを浮かべそう言った。

「・・・なんてね」

「へっ?」

「タクちゃんの方角音痴は楓から聞いてるからボクは知ってるんだ」

そう言うと亜沙先輩は笑みを、悪戯が成功した子供が浮かべる様な無邪気な笑みを浮かべた。

「・・・で、タクちゃんはこんな時間に何してるの?」

「え〜と、それは・・・(ちよつとまで、このまま悪戯されたまま黙っているのか?)」

どうはぐらかそうかと考えていると心の中の悪魔がそう囁く。

「・・・まあ確かにからかわれたままというのは俺としても面白くない。

・
だが亜沙先輩に仕返すにしても肝心の内容が思い浮かばない・・・

さて、どうしようか?

「あ〜えつと・・・あつ」「んっ？どしたの？」
「いえ何でもないです・・・聞いても笑わないって約束してくれま
すか？」

どう悪戯するか考えてると頭の中に一つの妙案が浮かんできた。
浮かんで来るやいなや俺は顔を引き締め真剣な表情を作り亜沙先輩
と向き合う。

「うん・・・絶対に笑わない」

対する亜沙先輩と楓も俺の表情に触発されたのか表情が真剣なもの
となる。

二人の表情を確認すると俺は出来るだけ真剣に聴こえるような声色
を作り俺は言った。

「・・・会いたくなつたんです・・・」

「・・・へっ？」

「だから・・・急に亜沙先輩に会いたくなって・・・」

顔を僅かに朱く染め、俺はわざと言葉を途中で切ると亜沙先輩に言
い放つ。

「夕、タクちゃん!？」

「はう!？」

っし！完璧な演技だったな。

二人のリアクションを見て自分自身の渾身の演技に心の中で自画自
賛をすると二人にばれないように小さくガッツポーズをする。

成功したという事実は俺の心の中を満足感で満たしていった。

だがその直後、俺は決して逃げることも避けることも出来ない事実に気づいてしまった。

そう、それは・・・

(・・・あれ？でもどうやって冗談だって伝えれば良いんだ？)

逃げ道が無いことだ。

.....

まあ、その後どうにか伝えようと試行錯誤した結果、俺の下手な言い訳のせいで亜沙先輩の怒りを買って、冒頭に戻るわけだが・・・

「タクちゃんはもうちょっと女心を学びなさい！真剣な顔と声である事言われたら誰でも落とすしちゃうでしょ！」

「大丈夫ですよ、今まで落とされた事なんて無いですから」

「はあ、そういう問題じゃ・・・タクちゃん？その言い方だとまるで他の人にも言った事あるような口ぶりだね」

ボク以外にあんな事言った事あるの？」

瞬間、先程のまでの空気がより、明確に昼ドラ化・・・もとい泥沼化してきた。

「いや、言ったこと何て」「じゃあ楓に聞こうかな」・・・
ないと言いたい所ですが冗談で何人かに言いましたね、ホントにすみません」

「え〜？タクちゃん何で謝るの？ボクは何も言っていないし怒ってないよ」

なら何故口は笑ってるのに目が笑ってないんですか？

まさか子供の頃楓達をからかうために使った冗談がここにきて自分の首を絞めるとは思ってたなかった。

反省しつつ早く怒りがおさまってくれるのを祈っていると楓がおずおずと手を挙げ亜沙先輩に言った。

「あの・・・亜沙先輩、私そろそろ・・・」

「あっ！そうだったね、ならそのダンボールをタクちゃんに渡して楓は帰って良いよ？」

「えっ？で、でもそれじゃタクト君に悪いですよ・・・」

「楓・・・」

この荒れた空気の中、楓の気遣いに思わず涙が溢れそうになる。だが流石は亜沙先輩、この返しが帰ってくるのを予想してか楓に面と向かって言い放つ。

「うっん、気を使わなくても良いんだよ楓？これは私の乙女心をもてあそんだタクちゃんに対してのバツなんだから」

くっ、この理不尽な物言いに激しくツッコミたい。
いくつかツッコミ所はあるがこの空気の中言える人は正しく勇者だ
ろう。
ぐっと堪えその代わりと言ってはなんだが一番聞きたい事を想いき
つて亜沙先輩に聞いてみた。

「亜沙先輩って乙女心あるんですか？」

・・・さて、何故俺がこんな事を言ったのか、それにはいろいろと
理由はあるがどうやら説明する事は出来ないらしい。 だってさ、
目の前に般若が立ってるんだ・・・

この発言の約二秒後、放課後の校舎には断末魔の悲鳴が響き渡った。

.....

「もう・・・ほらキビキビ働く！これはバツなんだからね！」

「さっきの張り手も十分な罰だと思いますよ？」

楓の持ってたダンボールを家庭科室に運び込み、さっさと屋上に向
かおうとしたが亜沙先輩が俺にからかった罰として家庭科室に置い
てある塩だとか砂糖だとかの調味料や棚に置いている食器等の整理
を手伝えと命じてきた。

まあ、確かに今考えると女の子に言っではいけない事を言った俺が悪いと思う・・・だがそれでも渾身の力を込めての張り手はやり過ぎだと思う。

実際背骨が折れて無いのが不思議な位だ。

「・・・そういえば楓は急に帰ったりしてどうしたんですか？」

腰を摩りながら作業をしていると、ふと楓の言葉が頭を過ぎる。

亜沙先輩は作業をしつつ話始めた。

「えっと、その・・・あんまり言いたくないんだけどさ、楓の家ってお母さんが居ないでしょ？だから家の家事とか楓が一人でしてるんだよ・・・だから楓だけ他の人よりも早く帰らせてなるべく負担が掛からない様にしてるんだ」

「へえ・・・」

五年前から家事をやってきたのか、どうりで料理が上手いわけだ。昼時にわけてもらった弁当の味を思い出しつつ残りの作業を終える。

ふと横をみると亜沙先輩も終わったのか背伸びをしていた。

「そ・れ・よ・り・も！何でタクちゃんはこんな時間まで学校に居るのかな？・・・まさかボクをからかうため、とか言わないよね？」

「滅相もございませぬ」

もしその言葉を肯定しようものなら今度こそ俺の背骨は砕けるだろう。

「ふーんならどうして?」

「桜に頼まれたんですよ。稟に話があるから屋上に連れてきて欲しいって」

「お、やっちゃんもとうとう稟ちゃんに告白するのかな? タクちゃんは何か聞いてないの?」

「……いや、何も聞いてないですよ」

放課後、屋上。

この二つを聞いた人は必ずと言っていいほど告白を連想するだろう
(稟は別格)

だが桜の慌てっぷりや最後に見せたあの表情を見るとどうも告白ではなさそうだ。

まあ、桜が何を話しているなんて知らない俺が憶測だけで話すのもあれなので亜沙先輩には話さないけど。

「……ってやっちゃん?」

「うん、八重桜ちゃんだからやっちゃん」

「……」

あっけらかんと言うのが亜沙先輩のつけるあだ名には圧倒的にひねりが足りないと思う。

しみじみとそう思った。

「さて、そうと分かれば……行こっか」

「へっ?」

そう言うと亜沙先輩は俺の手を掴み引つ張って行く。
この前のグリグリが効いたのか今日は襟首ではなく左手を握っていた。

まあ一旦それは置いといて。

「・・・行かつて何処にですか？」

「もちろん稟ちゃんがいる屋上に」

第八話 覚悟

「今・・・なん・・・て？」

夕陽が差し込む病室。

虚ろな眼を大きく見開き、震える身体を必死に押さえ込む楓は声を絞り出すように聞き返す。

無理もない。

もし俺が楓の立場だったら信じられない・・・いや、信じたくはない事を言っているのだから。

一呼吸置くと震える楓に向かって俺はもう一度、一字一句違えることなく楓に言葉を放った。

「・・・俺が父さん達に電話したせいで皆が死んだ。おじさんは伝えるなって言ってたけど伝えようと思ってな」

「・・・なんで・・・そんな事・・・なんでなんでなんでなんで・・・」

「楓には悪いと思ってる・・・けどさ、急に“寂しく”なったんだから仕方がないだろ？まあ俺もこんな事になるとは思ってなかった」

「そんな・・・なんで・・・なんで？」

“寂しい”その言葉を強調すると楓は僅かに動揺したように声を震わす。

その僅かな変化を見ると俺はトドメの一言を放った。

「ああ、でも我慢すれば良かったかもな？もし我慢出来てたら誰も
“死ななかつた”んだから」

「あ……ああ……」

「まあ今言っても仕方がないか、楓……」

俺を恨まないでくれよ？」

パタン……

「お母さんがあいつの……あいつせいで……？あ……あああ
ああああ！！」

楓の病室を出ると同時に中から楓の発狂した様な声と共に嗚咽が聴
こえてくる。

これで良いんだ。傷つけた痛みも、嘘をついた苦しみも胸の中
に押し込めば誰も気がつくこともない。

いまだ病室から聴こえてくる楓の声に俺は振り返る事もしないまま
その場を去った。

俺はあの日、楓を助けたい一心で嘘をついた。

熱があつたせいか、弱り切つた楓は俺の嘘を疑うこともせずすんなりと受け入れ俺を憎む、そんな気持ちを原動力と変え元気になつた。桜はそんな関係になつた俺達を見て驚き、時に悲しみ、そして俺達の間をどうにかしようとする行動してくれた。

不謹慎かもしれないがこの時の俺はただ嬉しかった。

心配してくれる桜の気持ちが・・・そしてなによりもどんな理由であれ元気になつてくれた楓の姿が。

楓に嘘の事実を教え、桜には嘘を悟られまいとまた嘘をつく。

心苦しさ、罪悪感をも覚える関係に心が押し潰されそうになる日もあつた、だがもし楓が何かの拍子に嘘に気づけばまたあの時の様に壊れるかもしれない。

だから俺は堪えた。

どんなに楓から嫌がらせを受けようとも蔑まれようとも、ただがむしやりに毎日を過ごしていた。

月日、季節が巡り変わって行くことも俺達の間は一切変わる事は無かつた。

そして気づくとあの事故から四年もの月日が経っていた。

月日が巡るにつれ楓、桜の容姿も少しずつ変わって行った。
多少幼さが残るが二人とも学年を代表する美少女と言っても過言ではなかった。

才色兼備。

言葉の通り二人とも勉強もでき更に容姿端麗。
非の打ち所がなかった。

中学に上がると同時に楓には親衛隊が出来るのは必然だったのかも
しれない。

だが親衛隊が出来たからと俺達の関係が変わることはなく、逆に悪
化していったと言える。

親衛隊は何処から聞いたのか俺が楓の家に居候している事実、更に
俺達の関係・・・楓が俺を憎んでいると云う事実を掴むと俺を連れ
出し殴る蹴る・・・所謂イジメ、リンチといった行動を起こした。

ある人は俺と楓の関係を断ち切ろうと嫌がらせ、罵倒を浴びせた。

ある人は楓を想い俺を殴った。

ある人は気に入らない、ストレスの解消、そんなくだらない理由で
俺を蹴った。

親衛隊の暴力に堪え、楓に蔑まれる、そんな普通では有り得ないよ
うな非日常が当たり前になり始めたそんな時俺は亜沙先輩に会った。

亜沙先輩は俺と時間を重ねるに連れは親衛隊に殴られる理由を理解

し、俺を心配してくれた。

そんな心配してくれる亜沙先輩の姿に俺はまた罪悪感に押し潰されそうになった。

小さな嘘から始まった亀裂、それは時間が経つに連れ大きな歪みへと変わっていった。

今にも壊れてしまいそうな関係、それは例えタクトが帰ってきたとしても・・・例え過去の出来事を話してもこのまま続いていく、そう思っていた。

だから・・・

「私臯君と話したい事があるから・・・だから席外して貰っても良
いかな？」

「・・・わかった」

桜の何かを決意したような瞳が、桜には似つかわしいほどの真剣な表情に俺は少しの不安感を覚えた。

バタンッ

タクトがドアを閉める音が響く。相変わらず真剣な表情を浮かべた

桜はこちらをジッと見ている。

「・・・桜、話ってなんだ？」

「うん、あのね稟君・・・私ね？稟君の話を聞いてからずっと考えてたんだ・・・稟君と楓ちゃんの事」

「・・・」

平静を装うが内心では心臓が早鐘をつき、不安感が膨らみ大きくなっていく。

ああ、そういう事が・・・

何故このタイミングで楓の名前を出したのか、何故こんなにも桜は真剣な表情を浮かべているのか。

それらを踏まえて考えると桜が放課後に俺を呼び出した理由それは簡単な事だった。

ゆっくりと桜は口を開き俺に提案する。

それは未来への選択肢、俺達の関係を大きく変える提案だった。

なあタクト・・・俺は・・・どうしたら良いんだろうな？

.....

「亜沙先輩、ホントに行く気ですか？」

「もー、ここまで来て渋らないの」

力無く反論するがそんな事はお構い無しと言わんばかりに俺を屋上に引っ張って行く亜沙先輩。

細く女性らしい身体つきをしているのに何処からこんな力が出るのだろうか？

全く以って不思議だ。

「大体今屋上に行っても亜沙先輩が期待してるような事は起こってないかもしれないですよ？それにもし告白とかじゃなかったら赤っ恥かきますよ？」

「それはタクちゃんの想像！それにやつちゃんが稟ちゃんを好きなのはタクちゃんも知ってるでしょ？そんなに心配しなくても大丈夫だって」

先程から似たような言葉で牽制しているが亜沙先輩も似たような言い訳を返すばかりで止まる気配が全くない。

大体、

「何処からそんな自信が出て来るんですか・・・」

「フッフッフ・・・それはね“乙女”の勘だよ!!」 「・・・そうですか」

ビシィッ!!と効果音が鳴りそうな程素晴らしいVサインを見せる亜沙先輩。

“乙女”の部分強調されたが俺はあえてそれをスルーした。

どうやら先程のたらし疑惑兼乙女心事件（亜沙先輩命名）での俺の発言が思ったより効いたらしい。

だからだろうが、今までは引つ張られる時は襟を掴んでいたが今は手を握っていて妙に優しい。

「ほら、早く行こうよ！」

俺の手を引つ張り先へ行こうとする亜沙先輩だが今の俺には亜沙先輩と先へ進む気は毛頭ない。

面倒だな・・・

ハア と大きなため息をつくと同時に亜沙先輩の手をゆっくりと離す。

「?どうしたの?ほら早く」

「亜沙先輩、もし桜が稟に告白をしたとしてフラれてたらどうしますか?」

「・・・タクちゃん?」

先程までの気持ちを切り替え真剣な表情で亜沙先輩に尋ねる。

「第一今から屋上に行くと言っても告白してる確証自体全く無い。それなのに亜沙先輩は屋上へ行こうとしてる」

「っ」

淡々と言葉を突き付ける。すると動揺したのか亜沙先輩の身体が動

く。

「答えて下さい。」

二人が告白したとして。もしそれが失敗に終わってたら亜沙先輩はどうするつもりですか？」

我ながら冷たい言い方だと思う。

だけどこれは大切な事だから。そう思い先程までの軽い口調のままの牽制は止め亜沙先輩に現実を突き付けた。

「・・・もしタクちゃんが言うもしもの事が有ったとしたらボクは何も出来ないと思う・・・確かにボクには二人が屋上で何をしているのかなんて解らないよ」

「・・・」

「でもさ、ボクは楓の時みたいに何も知らなくて、友達とか、大事な人が苦しんでるのに何も出来ないのはもう嫌なんだ・・・今は何も出来ないボクでも二人の事情を解つてれば何か出来るかもしれない、二人を支える事が出来るかもしれない・・・そう思ったからボクは行くんだ」

「・・・そうですか」

俺の質問に対してはつきりとした意志をぶつけられ俺は何も言えなくなる。

「それにね？もしやつちゃんが告白して成功したら一番に二人を祝福する事が出来るでしょ？はい！これで真面目な質問はこれでおしまい！タクちゃん、早く行かないと二人とも帰っちゃうよ？」

無邪気な笑みを浮かべそう答えると先へ進む亜沙先輩。
変わり身の早さに一瞬呆気を取られるが直ぐさま後に続くように歩
き始めた。

.....

「さあタクちゃん、準備は良い？この先からはもう引き返せないよ
！」

・・・この人は何を言ってるんだらうか？

屋上の扉一枚を開けるだけなのに何故か構えている先輩にそんな疑
問が頭を過ぎる。

そんな疑問に頭を抱える俺を尻目に亜沙先輩は俺の答えを待ってい
るかの様にジツとしている。

「・・・扉開けるだけなのに何の準備をするんですか？」

とりあえず普通に接してみた。

だがこの受け答えは不正解だったらしい。俺の答えを聞くと同時に
振り返り呆れた様に言った。

「も〜何その返しは？ちゃんとツッコまなきゃだめでしょ？稟ちや
んなら“ラスボスにでも挑むつもりですか！？”とか“もう亜沙先
輩はそんな冗談を言っちゃって〜 ホントお茶目な女の子ですね
”とか絶対に言ってくれるよ？」

「確かに前者は言うと思いますけど後者は明らかに妄想ですよね？」

第一そんなジゴロ地味た恥ずかしい台詞、流石の稟でも出来る訳が無い。

「妄想なんて酷いなあ、実際稟ちゃんはおくに“可愛いですね”とか言ってくれたよ？それにボクの手料理を食べた時は“亜沙先輩は家庭的な女の子ですね”って言ってくれたよ？だから稟ちゃんならきつといつか言ってくれるよ！」

・・・悲しいことだがこの数年の内にあいつの頭には羞恥心と云うものが無くなってしまうらしい。

「まあそれは一旦置いて、行こっか？」

亜沙先輩はそう言うと屋上の扉を開ける。

扉を開けると同時に夕陽の眩しさに思わず顔をしかめるがそれもすぐ慣れ辺りを見渡すとフェンスに寄り掛かる様に立っている稟を見つめる。

「おっ、まだ居たのか？」「ああ・・・ってなんで亜沙先輩が居るんだ？」

「気にしない気にしない」

「・・・そうですか」

「・・・?」

何かおかしいな・・・いつもの稟だったら何かしらの反応を見せるのにそれが全くない。

それに注意して見ないと解らないが稟の右頬辺りが赤くはれていた。

また何かあったのか？

「まあそこらへんは察してくれ。それよりその類はどうした？それに桜が居ないが・・・まさか誰も居ない事を良いことに桜を襲って返り討ちにでもあったか？」

「えっ？まさか稟ちゃん学校で狼に為っちゃったの！？」

「おまけに野外では・・・お前って奴は見掛けによらず鬼ち

「タクト、亜沙先輩・・・」

こりゃあ重症だな・・・

何があつたか解らないが冗談にも反応しない稟を見てそう思った。

「・・・」

「稟ちゃん・・・言にくい事なら無理しなくても良いんだよ？」

ぐっと歯を食いしばる稟の態度を見て亜沙先輩は優しい言葉を掛ける。

だが稟は力無く首を振るとゆっくりと言葉を紡ぎ言った。

「・・・亜沙先輩、タクト・・・」

もう俺に関わらないで欲しいんだ」

第九話 独善、走る亀裂

「稟・・・ちゃん？そんな冗談笑えないよ？」

「・・・」

・・・まただ。

いつもそうだ、俺が行動を起こす度に誰かが悲しむ。

驚いた表情を浮かべ困惑する亜沙先輩の姿を見ると心に罪悪感が募っていくのがわかる。

「冗談なんかじゃないです」

だけど俺はそんな亜沙先輩の姿を見ても、罪悪感を幾ら感じようが口を動かす事を止めなかった。

ここで言葉を切ってしまうば二度と言えない。

そう感じたから。

「亜沙先輩はタクト達に聞きましたよね？俺が楓に恨まれてる理由」

「・・・うん」

「・・・嬉しかったです、二人共俺の事心配してくれて・・・」

でも俺はあの後後悔しました」

「・・・えっ？な、なんでそんな事言うの？二人とも・・・ううん、ボクも稟ちゃんの事心配してから稟ちゃんがやっとな本音を話してくれたって解った時ホントに嬉しかったんだよ？」

「・・・」

思いがけない言葉に驚いたのか俯いていた顔を勢いよく上げ戸惑う様な口調で言う亜沙先輩。

またその表情に罪悪感が募っていく。

「稟ちゃんは知ってる？やっちゃん・・・桜ちゃんは稟ちゃんと楓の仲をどうにかしようとして動いてくれてるんだよ？なのに・・・なんでそんな事言うの？」

「っ」

心がズキズキと痛む。

・・・解ってるんだ、桜がどうにかしようとして行動している事も、皆が本気で俺の事を心配してくれてるなんて事、自分が一番理解している・・・痛いほど理解している・・・だから、

だからこそ俺は関係を絶ち切る事を選んだんだ。

まるで自分に言い聞かせる様に心の中で復唱する。

俺は決意を固め亜沙先輩、タクトを見ると話し始める。

「稟……ちゃん？」

「……亜沙先輩やっぱり楓の事、説得するのは無理です」

「……どうしたの？そんな弱音言つなんて稟ちゃんらしくないよ？」

「……そうかもしれないですね」

怪訝そうな声を漏らし心配するような仕種を見せる先輩にその言葉を返す。

らしくない……か。

我慢することが唯一の特技、そう自負してる自分でもそう思わずにはいられなかった。

「ちょ、稟ちゃんどうしちゃったの！？何があったか知らないけどとりあえず落ち着こうよ」

肯定したことが予想外だったのかおろおろし始める先輩。

「タタタクちゃん！！こういう時はどうすれば良い？」

「背中に張り手するか鳩尾に一発入れるとともに戻りますよー」

「テレビ！？稟ちゃんテレビじゃないんだからちゃんと答えようよ！？」

冗談を言い合い笑いあう二人の姿は今の俺には眩しく暖かく、決意を鈍らせるには十分だった。

このまま突き放す事を止めて、皆と笑っていたい。

でも・・・今の俺にはそんな希望さえ持てない・・・いや、持つには相応しくないよな・・・

「五月蠅い！」俺は息を大きく吸い込み二人に向け怒鳴る。
途端にピタリと会話が止み先輩は驚いた表情を、タクトは表情一つ変えず俺をジツと見ていた

「迷惑なんですよ！！桜も！亜沙先輩もタクトも何で俺なんかに構うんですか！これは俺と楓の問題です、もうこれ以上関わる様な真似はしないで下さい！！」

「・・・稟ちゃん」
「・・・」

俺が何の脈絡も無く怒鳴ったのは皆の気持ちを踏みにじる様な最低の言葉。

顔を上げまず眼に映ったのは長い緑髪を揺らし目に見えるほど動揺している亜沙先輩の姿。

その姿は驚きの余りか言葉を失い呆然としている。

またその姿に罪悪感が募っていく・・・がそれと同時に心には安堵感が満ちていくのが感じ取れた。

これで誰も傷つかずにすむ。

そんな希望から来る安堵感を噛み締め俺は動揺する亜沙先輩の姿を正面から見る事が出来ず逃げる様に顔を背けた。

自分が犯した矛盾の事実から逃げる様に。

「・・・桜にも」

ぽつりと呟く様な声。

だが小さな声とは不釣り合いなほどハッキリと耳に残った声におもわず顔を上げる。

顔を向けた先、そこにはフェンスに寄り掛かって佇むタクトの姿があった。

「桜にも同じ事を言ったのか？」

「・・・ああ」

僅かな沈黙の後、俺はズキズキと痛む心を無視しながらゆっくりと肯定した。

「そうか・・・」

タクトはため息を一つ付くとおもむろに切り出した。

「じゃあ暗くなって来たからそろそろ帰りましょうか亜沙先輩？」

「・・・ふえ？」

「・・・は？」

突然の発言に亜沙先輩は場の空気には似合わない可愛い反応を示し俺もおもわず素っ頓狂な声を出してしまう。そんな状況の中、当の本人は困ったように苦笑いを浮かべ立ち尽くしていた。

.....

先程までの緊迫した空気は何処へやら。稟は俺の言葉で呆気に取られポカンとしてるし、亜沙先輩は可愛い声を出したかと思うとそのまま固まっている。

そんな二人の反応を見ると我ながらシリアスぶち壊しの発言だったかなー、などと呑気に反省。

「タクチャーん・・・今の流れと状況でどうしてそんな言葉が出て来るのか教えてくれないかな？」

名前を呼ばれ振り向くとそこにはにこやかな笑顔を振り撒いているがどこか迫力のある先輩の姿。

瞬時に俺は先輩の逆鱗に触れてしまったと察した。それと同時に背中には嫌な汗が伝う。

「えっと・・・そろそろ暗くなって来たし夜道は危ないから送りますよってという意味だったんだけど・・・迷惑だったかな？」

俺は笑顔を見た瞬間、これ以上逆鱗に触れない為にも頭をフル回転させ、なるべく刺激しない様な言葉を選びゆつくりと話す。

それが好を成したのか刹那、先輩の顔がボンツ！と朱く染まった。

「う……そ、それは嬉しいというか何というか……」
もう！なんでさっきまで素っ気ない態度だったのに急にしおらしくなるの！？……！も、もしかしてこれがツンデ 「亜沙先輩、俺は今猛烈に誰かにデコピンを喰らわせたいんですがどうしたら良いんでしょうかね？」

「……」
「ツンデ……何ですか？」

……

「と、とにかくボクが言ってるのはなんでこの気まずい状況の中帰ろうと思ったのか聞きたいんだけど！」

「……逃げた？」

「に、逃げてなんかないもん……」

顔を朱く染めそう言つと明後日の方向を向き拗ねた様子を見せる亜沙先輩。

こんな状況だがその仕種は普段の先輩からは想像出来ないほどとても可愛らしかった。

……亜沙先輩の方がツンデっぽくないか？ツンは無いが。

「ほ、ほら、タクちゃんもぱっぱと答える！暗くなってきたんだから！」

声を張り上げ威厳を持って言つたつもりなんだろうが顔が朱い時点

で威厳の欠片もない。

「こないじらしい仕種を見せられたら弄りたくなるのは俺だけだろうか？」

だがこの状況の中そんな愚かしい行動を起こした瞬間俺の背中は何となく消し飛ばす程の衝撃を受けることになるだろう。

俺は欲求を気力の限り全身全霊で押し込め俺は口を開いた。

「……稟の頬を見ると桜の行動は大体解ったし稟は俺達に関わって欲しくないって言うから稟を放……稟の意見をそんちよーしたまでデスヨー？」

「今明らかに放置って言おうとしてたよね？……大体そんなおちやらかした口調でしかも棒読みで言われても誰も信じないよ？タクちゃん、ちゃんと答えてくれないと稟ちゃんが怒っちゃうよ？」

「んー？……ああなるほど」

先輩に言われ稟の方に視線を向けると確かに俯いて表情は見えないが明らかに怒っている稟の姿があった。

「まあ……前も言ったでしょ？俺はアドバイスはしても手は出さないって。だから稟が関わって欲しく無いって言うなら俺は何もしないし今ここに居る意味も無い、だから帰ろうって言ったんです」

「うっ、た、確かに言ってたけど……」

「思い出しましたか？……ああ、あともうひとつ理由がありました」

忘れてたのか僅かに口ごもる先輩を横目に俺は稟に向かってハッキリと言った。

「いい加減めんどくさくて付き合ってたらない」
「っ！」

刹那、ビクリと稟の身体が動くが俺は気にかける事なく淡々と続ける。

「何驚いてんだよ、関係を断ち切りたい、そう望んだのはお前だろ？」

「ちよ、タクちゃん！」

突然の言葉に稟は言葉を失い亜沙先輩は俺を止めようと腕を掴むが俺は気にかける事もせず先程まで浮かべてた笑顔とは一変した軽い冷笑を浮かべる

稟を嘲笑うかの様に。

「大体全部一人で何もかも背負うことが正しい事だと思ってるのか？桜や先輩を傷つけて、突き放してそれが今自分に出来る最善の事だと胸を張って言えるのか？」
「・・・それは」

言い淀む。

その仕様だけで今回の事は深く考えずに行動を起こした事は一目瞭然だった。

「・・・お前、何様のつもりだ？自惚れてんじゃねえよ！！」

誰も頼らず・・・あれだけ心配していた桜をも裏切り起こした行動は独善に満ちた、馬鹿馬鹿しく、呆れたモノ。

そう理解した瞬間、俺は稟に向かい怒鳴っていた。

「

「タクちゃん！」

稟の鋭く息を呑む音、すると流石に言い過ぎだと感じたのか素早く先輩が止めに入る。

稟を護ろうとしての行動なんだろうが、先輩のその姿に苛立ちが募っていく。

・・・やっぱりこの人は甘すぎる。

「ちっ・・・もう一度よく考える・・・馬鹿野郎」

吐き捨てるかのように俺は稟にそう言つと屋上から出るため歩みを進める。

扉を開け最後に見たのは稟の苦しみに満ちた表情と何かを言いたげにジッと俺を見ている先輩の姿だった。

これでもう・・・元の関係には戻れない。

そんな現実が目の前には突き付けられているのを感じ、俺はゆっくりと扉を閉めた。

第十話 明かされる本心

「温泉旅行？」

夕飯の途中、突然の言葉に私は箸を持つ手を止める。

その日のお母さんの態度は可笑しかった。

可笑しいと言っても拳動不審だとか情緒不安定気味だとかではない。

妙に機嫌が良いのだ。

買い物から帰ってくるなり鼻歌混じりに夕飯を作る傍らケーキを焼く姿。

別に鼻歌混じりに夕飯を作るとかケーキを焼く姿だけでは特に変とも思ふ事無く隣で手伝いをしていた・・・でも夜になり仕事から帰ってきたお父さんにお母さんは突然抱き着きちゅーをした。私が目の前に居たにも関わらず。

・・・可笑的い。

普段のお母さんなら私の前ではちゅーをしないはずなのに・・・この前だって私から隠れるようにキッチンの中でちゅーしてたのに・・・。

そんな事を考えながら思い切って夕飯の席で聞いてみるとそんな答えが帰ってきた。

「うん、稟君のお母さんがねくじ引きで当てたらしいの！それでよかったです一緒に行きませんか？って言われてつい……」

「つい娘の前でキスをしてしまったと……」

夕飯を突つつくお父さんがポツリと呟くとお母さんの顔がポツと朱くなった。

「うっ……でもしょうがないじゃない……その温泉のってあの旅館なんだよ？」

「あのって……山の上のか？」

拗ねたように言うお母さんを尻目にお父さんは驚いた様子を見せる。

「？お母さんとお父さんはそこに行ったことがあるの？」

二人の様子に首を傾げながらも気になる事を聞く。

「うん、昔お父さんと二人で……ちょうど今ぐらいの時期だったかな、色とりどりの紅葉がすっごく綺麗だったなー」

「ああ、そうだったな……」

すると二人は答えると同時に昔を懐かしむ様な仕種を見せ互いに笑い合つとついには昔の話しに華を咲かせ始めた。

完全に蚊帳の外の私は箸を動かし始めようとするが“それにね”というお母さんの声に再び箸を止めた。

「あなたの名前はそこで決めたの」

「えっ！そうだったの？」

思いも寄らぬ告白に今度は箸を落としそうになるがなんとか持ちこたえる。

「うん・・・あ！ちょうどいい機会だから話そうか？」

「そうだな、長くなるが大丈夫か？」

驚いてる私にお父さんはそう尋ねるが私の答えは決まっていた。

コクコクと何度も首を縦に振る私にお父さんは嬉しそうな表情を見せると話し始めた。

「ちょっと難しくなるけどな、芙蓉って苗字は花だと初秋に咲く秋牡丹と言う花の別名になるんだ・・・そういえばそこにも咲いてたな秋牡丹」

お母さんと顔を見合わせ確認を取るような仕種にお母さんは小さく頷き続きを話し始める。

「私の名前の紅葉、これも秋に咲く葉でね？それにも別名があるの。貴女が生まれたのも、私の名前もお父さんの苗字も、そして二人で初めて旅行に行ったのも秋に関係するから二人で悩んだ結果、生まれて来る子供の名前も秋に因んだものにしようかって二人で話したんだ」

「お父さんからは芙蓉の苗字を」

「お母さんからは紅葉の別名“楓”を・・・

二人合わせて“芙蓉 楓”、秋らしくていい名前でしょう？」

「・・・うん、すっごく」

お母さんはニコニコと微笑み尋ねるが私は胸が熱くて、暖かくてそれしか言えなかった。

たかが名前一つ。

そう笑う人も居るのかもしれない。

でも私は見えないがそこには大切な思い入れと家族の絆が有るんだと子供ながら感じた。

不意に涙が出そうになるが私はそれを隠す様にお母さんに抱き着いた。

鼻孔に抜けるお母さんの優しい香り、頭を撫でる温かな感触。

そんな感触を感じ私は目を細め笑った。

頬に涙が伝って行くのを感じる。

これは・・・夢なんだ。

目の前には今も尚、小さな私を優しく抱きしめ微笑みを浮かべているお母さんの姿がある。

だがそんな温かな光景とは裏腹に頭の片隅では冷酷な現実を理解した。

夢とは残酷だ。

それが夢だとわかっていながらもその光景から眼を背けることは疎か、指先から伝わる温かな感触を消すことも、自分の意思では夢を終わらすことさえ出来ない。

「でもごめんね、連れて行けなくて・・・」

「ううん、私は大丈夫だよ！お父さんが居るしそれに・・・」

っ！

嬉しそうな表情のまま言い淀む姿、私の心はえもいわれぬ焦燥感に襲われた。

「凜君も居るからね」

「な、なんでそこで凜君が出てくるの？／＼／」

「えゝ？なんでかな？」

お母さんのからかうような口調。

子供の私は顔を真っ赤に染めもじもじとした仕種を見せお母さん、お父さんはその様子を微笑ましく見ていた。

胸の動悸が激しくなる。

何故私は笑ってるんだろう？

昔の私は何んで・・・こんなに嬉しそうなんだろう？

動悸が激しくなるに連れ夢の中の情景が薄れ、ゆっくりと壊れ行く。本能的に夢の終わりだと感じるが次第に情景が変わりつつも断片的に夢は続いていった。

「もし あった 父さん・・・」

それはさっさととは違う情景。

お母さんは玄関で靴を履きその傍らには大きなポストンバッグを抱えていた。

そして私の横には

「じゃ をよろしくね 稟君」

あいつが笑っていた。

.....

唐突だが学生とは大変疲れるものだ。

最後に学校へ通ったのが小学三年生の俺にとって最初は新鮮で楽しんで受けてたものの転入から早くも二週間目が終わる今では新鮮さも抜け気の緩みも出てきた。

これではいけない。

そう思い気を引き締め学校へと向かう週末のある日。

「隊員、あいつが相沢タクト本人で間違いないな？」

「はい！黒髪の長身、更に朱と蒼に黒が混じるオツドアイ。奴で間違ありません！」

「よし！全隊員に継ぐ！フォーメーションBだ！！」

その決意は早朝、俺を囲むように立つ馬鹿共（親衛隊）により儂くも崩れ去った。

「……めんどくさっ」

今週二度目となる襲撃にそう呟いてしまう。

俺を取り囲むのはザッと十人くらいだろうか？この前の襲撃よりは少ない……が、忘れてはいけないのは今は登校中だと云うこと。

このままいくと完全に遅刻になる。

「隊長！あやつの処け……いえ制裁は是非俺に！！」

「いえ隊長！私にお任せを！！」

「まあ待て……相沢タクトオ！言い残す事があれば聞いてやっても構わんぞ？」

とにかく遅刻云々は一旦置いて何故こうなった？

いや、楓の親衛隊が出て来た時点で楓絡みだと云うのはわかったが理由が全くわからない。

「おや？・・・フツ、恐怖の余り声も出ら　「死ねえー！」

とりあえず先手必勝、理由が分からず暴力を奮われようとしているのだからこの蹴りは正当防衛に含まれるはずだ。

さっきからうだうだと喋り続ける隊長格の顔面に蹴りを叩き込む。

「た、隊長危なあああ！！！！？」

だが突然飛び込んだ隊員Aにより防がれそれも不発に終わった。

流石の俺でも蹴りでは何メートルも吹き飛ばす事は出来ず隊員Aは崩れ落ちるようにその場に横たわる。

「なっ！きつ、貴様よくもやってくれたなあ！？」

「何言ってるんだよ？何の理由もなく襲い掛かるうとする輩が居るんだ、正当防衛に決まってるだろ？」

「くっ！屁理屈を・・・」

「屁理屈ではなく正論だ。まあ・・・もう理由もなく襲うのは止めるよ」

激昂する隊長を無視するように俺は歩き出す。

「ふ、ふざけるなあ！俺達KKKを舐めるなよ！？」

襲われたが許す（無視する）作戦で綺麗に纏めようとしたが無理だったらしい。

俺の舐めきった態度に腹を立てたのか明らかに死亡フラグな台詞を吐くと隊長は俺に殴り掛かる。

因みに亜沙先輩が言っていたがKKKとは“きつときつと楓ちゃん”を略したものらしい。

「　　グハア！！!?」

『た、たいちよー！!?』

ついでに解説している間に隊長はグーで殴っておいた。

そのまま数メートル吹っ飛びドオン！と轟音と共に扉にぶつかり、どこぞのバトル漫画の様に扉にヒビが入るのが見えたがあえて見無かったことにしよう。

「ぐっ！あ、悪魔め・・・」

「　　っ！た、隊長血が・・・」

隊員言葉の通り、頭からは血を流し呼吸も少し荒くなっていた。

「フッ・・・どうやら俺はここまでのようだ・・・お前達は早く逃げろ」

何かを悟る様な眼。

隊長はそう言い残すと眼前にいる俺を睨む。

「・・・嫌です」

「……！！バ、馬鹿野郎！さつさと逃げろ！奴は悪魔だ！お前達が敵う相手じゃない！！」

だが隊員の言葉に息を呑むと怒鳴る様にそう言った。

それにしても扱いが酷くないか？

「それでも……奴は俺達の夢を！いや、逸れただけならまだしも転入初日から年上美人をたぶらかすなどの暴挙に出た憎つき宿敵！」

「お前達……」

「皆、俺達も行くぞ！KKKの意地を奴に見せつけてやれ！！」

『うおおおおー！！』

結果？五秒で返り討ちにしてあげましたよ。

……

「……何だこの地獄絵図は？」

親衛隊を血ま……肅清も終わり一息ついてると背後から眩く様な声が聞こえる。

首だけを動かし振り向くと顔なじみの男が茫然と立っていた。

「気にするな、ハゲるぞ？」

「堀にヒビが入ってたりひれ伏す様に倒れる親衛隊を気にするなって言う方が無理だろ！？……それより何でこうなったんだ？」

「さあな、急に襲ってきたから返り討ちにしただけだ」

「ピクリと反応を示したが俺はあえてそれを無視した。」

「お前のせいじゃ無いから気にするな、ほら早く行こうぜ旗男」

「・・・なあ、日に日に俺の扱いが酷くなってる気がするんだが・・・」

「そうか？普通に接してるつもりなだけ・・・」

「どこがだよ！？お前今週俺の事バカとか朴念仁とか今だって旗男とか呼んでるじゃねえか！」

「ああ、それは日替わりで付けたお前のあだ名だよ。因みに今日のあだ名は絶稟（誤字ではない）に決定したから」

「全く嬉しくねえええ！！？」

「嫌ならさっさと今の関係を何とかしろよ、絶稟」「うっ・・・」

そこまで言つと稟はさっきの勢いを無くし、ぐっと言い淀む。

その姿を見るとちよつと言い過ぎたかな、と思っただがあの屋上的一件から亜沙先輩やら桜から受けるストレス（主に愚痴）が半端ないので気にせず進む事にした。

「そんなの・・・無理に決まってるだろ・・・」

「・・・」

数歩しか歩かない内にそんな声が後方から聞こえて来る。

振り返ると自嘲するような笑みを浮かべ拳を握り締める稟の姿があった。

「・・・俺は二人を突き放して傷つけたんだ、今更謝って無しにし

ようなんて虫が良すぎるだろ」

「・・・お前馬鹿か？」

「・・・何がだよ」

何処か悔やむ様な仕種を馬鹿の一言で一蹴され複雑な表情をするが
気にせず続けた。

「あのなあ・・・あんな無茶苦茶な説得であの二人がお前を怒って
るって本気で思ってるのか？」

「・・・当たり前だろ心配してくれた二人にあんな事言っただか
ら」

（・・・下手くそ）

さっさと一人学校へと向かう後ろ姿に相変わらず嘘が下手だとし
じみと思う。

感情を押し殺す様な声、すれ違いざまの悲しげな表情を見せても尚
嘘をつこうとしている。

「なら・・・屋上で桜を突き放した時あいつは泣いてたか？」

「」

肯定するかの様に歩みを止める稟に対して俺は続ける。

「確かに桜はお前の言葉で傷つけた、亜沙先輩はお前の言葉に驚い
ていた・・・でも二人とも泣いてなかっただろ？」

「」

「桜からビンタを喰らったり先輩の驚いた表情を見て傷つけた、だ
からもう関わらないだろう、そう決め付けるのは当たり前なのかも
知れない、」

「だけどあの二人の性格にそんな“当たり前”は当て嵌まらない事付き合いの長いお前なら解るだろ？」

桜はともかく俺と亜沙先輩は転入してからの僅か二週間程度の付き合い、だがそれ程短い付き合いの中でもあの人の優しいという本質は理解できた。

そう・・・俺でさえ気づくことの出来た本質をこのお人よしが理解できない訳無いんだ。

「・・・なあ、お前が俺達に被害が及ばない様突き放す事を選んだにしてもだ、もうちょい信用してくれても良いんじゃないか？」

あの支離滅裂な説得は亜沙先輩と桜の上辺だけでは無い感情を案じての行動、そう考えるとつじつまが合う。でなければわざと悪役になるような真似はしないだろう。

「・・・信用してるからこそ、頼れないんだよ」

嘘を見破られたと解るやいなや苦虫を噛み締めた様な表情で切望する願いを語り始める。

「俺だつて何度も考えたさ・・・でもな、何度考えても問題が丸く収まる方法も、俺達が何事も無く元の関係に戻る様な方法なんて無いんだ・・・それが解ってるのにみんなに頼るなんて出来るはずないだろ」

稟の性格を表した様な純粹な想いから出た理想、それは誰も傷つかずに終わる事。

でも・・・

「稟、誰も傷つかずに元の関係に戻りたいって言ったよな・・・でもな、そんな都合の良い関係、現実にはただの理想論でしかないんだよ」

「っ!」

それは現実ではただの綺麗事にしか過ぎなかった。

自分の考えの甘さ、突き付けられる辛い現実には稟は僅かに顔をしかめる。

その姿に心苦しさが重圧の様にのしかかるが、構わず俺は言葉を紡いだ。

「桜や亜沙先輩はともかく楓との関係はそんな簡単な物じゃないだろ?・・・考えても見ろ、もしお前が関係を修復したいと思うならそれこそ荒療治になる」

「っ、それは」

「違うと言えるか?今更事実を告げたところで楓の誤解が簡単に解けると思ってるのか?」

「!?!」

楓に事実を告げたところで拒絶するかも知れない、下手すれば新たな誤解を生む事にもなる。

更に上手く楓との関係を修復できなくても五年間で出来た溝は深く、必ず二人の間にはしこりが残る。誰も傷つかず円満に終わるなんて不可能だ。

「なあ稟、いい加減腹くくれよ・・・」

お前が楓に嘘をついて俺達にありのままの過去を話した時点で俺達の関係は元には戻らないんだよ」

まるでこの前の屋上の光景を見るように稟の顔が驚愕の色に染まっ
って行く。

だがそれは近い未来、良い意味でも悪い意味にでもなり現実となる
ことだろう。

・・・きつと亜沙先輩なら、桜ならこんな時優しく言うんだろうが
やっぱり俺には無理のようだ。

でも言わずにはいられなかった、いくら悪役になろうがこいつにだ
けは現実から逃げて欲しく無かったから。

「は・・・ははっ・・・そっか、そんな事考えもしなかった・・・
でも、その通りなのかもな・・・」

渴いた笑い声と共に途切れながらも言葉を紡いでいく。

「俺は・・・あの時から何一つ変わってない・・・弱いままだ・・・」
「・・・」

あの時とは五年前の事なんだろう。

悔しさからか、弱々しい雰囲気は今にも泣き出してしまいたい程顔をしかめていた。

「・・・いい加減自分を過小評価するのは止めるよ・・・前も言っただろ、お前は弱くなんて無い」

だからだろう、普段は見せないそんな雰囲気に触発されてか、気がつけば俺は口を開いていた。

「例えそれが綺麗事だと解ってても誰だって願うだろ？願う事は罪じゃない、当たり前前の事なんだよ」

「でも」

「ただその綺麗事と向き合い辛い現実と必死に戦うか、目を背けて理想に逃げるか、いずれその二択を迫られる・・・お前は今も悔やんで自分の弱さと向き合おうとしているだろ？お前は誰よりも強いよ」

言いたい事を全て吐き出すと稟の反応を見ずにさっさと歩を進めた。

「
」

平静を装うとするが普段は言わない様な台詞を吐いたからか、顔が次第に熱くなっていくのが解った。

「……………」
「……………」

気まずい空気が流れる。

後ろでついて来る様な足音が聞こえるが稟は俺の変化に気づいていないのか黙り込んだまま俺は熱を逃がすために躍起になっていた。

「あ……………えつと……………」

すると稟なりにこの空気をどうにかしようとしたのか口を開く。

「亜沙先輩の言う通りでツンデレっばいなっ!!!??」

「死ね!死んでしまえこの絶稟野郎おお!!」

居心地の悪い空気を破ったのは稟の空気の読めない一言だった。

恥ずかしさの余り稟には渾身のグーパンを腹に喰らわせる。(またの名は内臓殺し)
衝撃で体が面白い程吹っ飛んだが後で魔法かけてやれば何とかなるだろう……………多分。

……………

「……………で、結局遅刻か」「……………悪かったよ」

その後魔法で稟の身体をなんとか治したが10分程時間をロスしてしまった。

完全に遅刻だ。

「ったくちゃんと身体鍛えとけよな」

「お前の拳で倒れない奴が居たらそいつは世界を狙えるだろうな」

そこまで凶悪な拳なのだろうか？

「まあそれは一旦置いて・・・学校着いたら二人に謝れよ？」

「ああ、解ってるよ」

そう言う稟の表情は先程とは打って変わって晴れやかだった。

「それにしても・・・」

「ん～なんだ？」

「いや・・・いつからみんな俺の嘘見破ってたんだろうなって」

「ああ、俺と桜は聞いた瞬間に解ったぞ？ 亜沙先輩も薄々感じてたらしいぞ」

付き合いの長い俺達に比べると僅かに気づくのが遅れたがあの人の観察眼は凄いと思う。

まあそもそもあの説得で疑わない方が可笑しいと思うが。

「マジかよ・・・でもそれなら何で桜はビンタをしたんだ？・・・」

なんだその“こいつ馬鹿か？”っていいいたげな表情は」

「ああ、お前馬鹿だろ？」

「ぐはっ！？」

嫌みでも皮肉でもなく、さらりと言っ。

「そのくらい自分で考えろ、鈍感」

「何がだよ!」

・・・鈍感、稟の態度に小さくもう一度呟く。

桜の気持ちを考えれば手を出すのは仕方がないだろうな。

あの日あいつは言ってただろ?“ほっとけない”って。

誰でも嫌に決まってるだろ?

辛い想いをしてると解りながらも好きな奴が頼ってくれないなんてな。

第十話 明かされる本心（後書き）

え〜どうもクロです！

まずはすみません！

九話はかなり読みにくかったと思います・・・がこの章を書くためには必要だったので書きました！

意見や感想待ってます〜！

第十一話 決意

「・・・さみい」

光陽町の郊外、歩く最中に襲ってきたつむじ風の冷たさにそんな言葉が漏れる。

時が経つに連れ季節も初秋から晩秋へと変わると、当然の様に肌を刺す冷気も厳しくなっていく。

先程から吹く冷たい風に軽く身震いをすると足早に目的地へと向かう。

紅葉の落ち葉がヒラヒラと舞う並木道を通り過ぎ先へ進むと見えてくる山門。

山門をくぐりまず目についたのは優雅に舞う紅葉の葉と今だ緑色の葉をつけ佇む榊の木々に挟まれた石畳の道が見えてきた。

榊の木々を横目に石畳をしばらく進んで行くとやがて目的の場所へと着いた。

そこに有るのは去年と変わらない光景。

目の前に鎮座する“それ”の前には綺麗な華が沢山供えられており外見は去年と変わらず綺麗な姿のままその場に佇んでいた。

普通なら綺麗なままと云うのはありえない事だが、思い当たる節が無い訳ではない。

出した結論に俺は小さく苦笑を漏らした。

先、越されたか・・・

確か去年は俺が先に来た時は一週間くらい無視されたっけ？

一人の少女との記憶を思い返しながらも俺はその場にしゃがみ込むとゆっくりと手を合わせる。

どのくらい時間が経っただろうか、しばらくの間辺りには風の音と葉が擦れ合音が響き渡る。

俺は再びゆっくりとした動作で手を合わせるのを止めると目の前に有る“それ”・・・二つのお墓に語りかけた。

「・・・久しぶり・・・父さん、母さん、紅葉さん・・・」

小さく、顔を俯かせたまま切なげに呟いた言葉は誰にも受け取られない事は無く、辺りに響き渡る木の葉と風の音に掻き消されていった。

俺はおもむろに背負っていた鞆から手ぬぐいを取り出すと墓石を拭き始める。

楓が自前に綺麗してた為、目立った汚れは見当たらなかったが無かったがそれでも“土見家”と“芙蓉家”と描かれた二つのお墓を拭きつづけた。

「・・・ふう」

拭き続ける事数分、軽く息をはくと手ぬぐいをしまい、より綺麗なつた両家のお墓を見る。

秋の木漏れ日の中、静かに佇むそれは俺に見せ付けるかのように仲むつまじく、互いに寄り添い隣接していた。

おもむろに鞆に手を突っ込むと取り出したのは来る前に買っておいれた和菓子とチョコレート、そして蓋を閉めたままの小さなウイスキーボトル。

“芙蓉家”と描かれた墓石の前に和菓子を置きその隣のお墓には生前、母さんの好物だったチョコレート、そしてその隣に父さんが好きだった洋酒のボトルを供えると俺は再び手を合わせた。

(・・・そういえば、いつか三人で来たことがあったよな)

墓石を眺め不意に頭に過ぎったのはおじさんや楓との思い出。まだ楓との溝も深くは無かった昔の記憶だった。

・・・きつとあの日から、俺達は変わってしまったんだろう。

.....

あの事故から数週間経った。

嘘をついたあの日以来、俺と楓は言葉を交わすことは無くなり俺を無視するようになった。

最初は楓の挙動に心を痛めていたものの、数週間経てばそれも慣れ始め当たり前と感ずるようになった。

そんなある日の事。

「なあ楓、稟君・・・皆で墓参りにでも行こうか？」

突然、おじさんがそんな事を言い出した。

（ つ、なんで・・・ ）

この時の俺は何故わざわざ過去を掘り返すのか、落ち着き始めた楓の心を揺さ振るような真似をするのか理解できなかった。

そんな疑問を抱く俺を尻目におじさんの話は着々と進んでいく。

おじさん曰く仕事の都合上で葬儀も満足に出れなかったから、曰くみんなです最近あった事を報告しに行こう・・・等など様々な理由をつけ、俺達を連れて行こうとした。

“みんなで”と云う言葉を聞いた途端楓は表情を曇らせそれを拒んだ。

当然だ、“みんなで”と云うことは必然的に俺も同行する事になる。拒んだのは憎い俺と一緒に行動したくない、そんな想いが有ったんだろう。

だがおじさんの根気強い説得に楓は根負けしたのか、楓は渋々とそれに従った。

道中、時折おじさんから振られる話題に俺と楓は淡々と答える以外、互いに言葉を交わすこともない。

気まずさを感じながらも俺にはどうする事も出来ず、黙々と歩を進めた。

ギスギスとした空気の中、しばらく歩くと見えてきた山門を抜け、やがて二つの墓石が視界に入ってきた。

お墓の正面に立ち、しばらくの間三人で手を合わせていたが、やがておじさんは何処から借りたのか桶と手拭きを手に持ち、おもむろに両家のお墓を拭き始めた。

黙々と作業に没頭する姿。

時折楓が見せる愁いの表情。

“芙蓉家” “土見家” と描かれた二つの墓石。

途端、葬儀に出席しても実感できなかった現実が俺を襲う。

言い表す事の出来ない感情が胸を締め付け、思考を鈍くさせる。

「・・・お父さん・・・お母さん」

そして俺は無意識の内にそんな言葉を発していた。

数週間ぶりに発したそれはとても懐かしく感じ、同時にとても綺麗でとても優しく。

・・・とても儂く感じた。

「　　つ・・・」

気がつけば俺の両頬に温かいモノが伝う。

幾度となくそれを隠そうと必死に拭うが止まる気配は一向に無く、ただただ、その場で流し続けた。

ああ、そっか・・・

何故涙が出るのか、何故こんな気持ちになるのか、頬を伝い地面に吸い込まれるように落ちて行くそれを見て俺は理解した。

どこかで俺は逃げてたんだ・・・

楓を助ける事を盾に。

言葉一つで簡単に揺れてしまうような薄っぺらい覚悟を正しいことだと謡い、ひたすら現実から背を向けて逃げてたんだ。

「　っ・・・!!」

口から漏れる嗚咽。

それを情けないとは思わなかった。

おじさんや楓から見られて恥ずかしいとも思わず感情の赴くまま涙を流しつづけた。

そう・・・

それが引き金となる事も知らずに。

ビュッ！

突然耳に入って来た風を切るような音。

俺は咄嗟に頭を護るように腕を交差させ防御の姿勢を取る。

ガツツと云う鈍い音と共に腕には激痛が走り、同時に顔に冷たい何かが掛かった。

カラン。

聞こえてきたのは何かが地面に落ちる音、そしておじさんが楓を怒鳴っている声。

おそろおそろの瞳を開けてみると、地面には空になった桶と身体から滴る水滴・・・そして正面には今まで一言も喋らず、終始無言を貫いていた楓が敵を見るような、憎悪、嫌悪、様々な感情を燈した瞳で俺を睨んでいる姿があった。

突然の事に頭が混乱し、呆然とする俺に向かって楓は吐き捨てるように言った。

お母さんを・・・私達からお母さんを奪ったあなたがそんな顔しないで！！

寺に響き渡る罵声。

胸にズキズキと波紋のように広がる痛み。

まるで時が止まったかのように俺は動けなくなった。

「 つ．．．すまない．．．すまない稟君．．．私が 」

楓に気を取られ、俺にはおじさんが何を言ってるのかよく聞き取れなかった。

だけとおじさんの表情、そして今まで不可解に感じた行動からこれだけは理解できた。

あの提案は俺と楓の仲を取り持とうと、もしくはそのきっかけを作ろうと配慮しての提案だったんだと、そして．．．

俺達は元の関係には二度と戻れないんだ．．．と。

足早に去って行く楓の後ろ姿を見て俺はそう悟った。

その日から俺の日常は変わった。

それまで“無視”という行動で抑えていた楓の感情．．．“憎い”
という感情が爆発したのだ。

大事にしていたプラモデルはバラバラに壊された、学校では靴を隠

された、借りた文庫本には落書きをされた事もあった。

だがそれで終わるはずも無く、時が経つに連れ事態は更にエスカレートして行った。

学校で使用したノートを破かれ、家では無視、食事抜き、私服等の私物もカッター等で切り刻まれた事もあった（おじさんが気がついた為、数着で終わったが）

精神的にも肉体的にも辛い日々が続いた・・・だけど俺は堪えつづけた。

これは独りよがり、誰にも頼らず、相談もせず行動した俺への“当然”の酬いなんだ・・・そう思ったから。

そう思ったからこそ、俺はおじさんや楓に何一つ言わなかった。弁解も、懺悔も、本音も、後悔も何も言わず、すべてを心の奥深くに押し込め俺は辛い日々過ごして行く。

幾日、幾年過ぎてもこの関係は変わらずに続く・・・いや、もういくら望んでも変わらないんだ。

何時からだろう、俺の頭にはそんな情けない言葉がこびりつき、離れなくなったのは。

そして何時からだろう・・・

そんな考え、所詮は自身の杞憂でしかないと気づけたのは・・・

.....

「 ははっ 」

蘇る記憶、だがそれはあまりにもふがいなく、濁いた笑みしか出なかった。

あの時、俺は後先考えずに高い理想を掲げ行動した結果、追い込まれ楓にはより深い恨みを刻み込んでしまった。

「 父さん、俺はさ・・・誰にも頼らずこの関係を続ける事が俺と楓、そしてみんなにとって一番良い方法だと思ってるんだ・・・ 」

自身が起こした不甲斐無い結末、情けなく、顔を俯かせたまま俺は墓石に語りかける。

「 楓に嘘がばれないように翻弄してみんなに何も話さず普通に接すれば誰も傷つかずに済む、あの日からずっとそう思ってた・・・ 」

でもさ、最近やっと気づけたよ、それは間違いなんだった」

みんなを大切に思うが故に俺はそう願い、行動を起こした。

だが現実はどうだった？

嘘をつく延長線上では幼なじみ、先輩を傷つけた。

俺の浅はかな考えでみんな傷ついたじゃ無いか。

「この前、ちょっと問題があつてさ……と言っても俺が一方的に悪いんだけど、それで桜と学校の先輩に謝ったら案の定叱られたよ」

嘘を見破られたあの日の放課後、俺は家庭科室に二人を呼び出して謝った。

タクトの言う通り二人はある程度嘘だと見破っていたらしい……がやはり不安感が有ったのか、桜は感極まって俺に抱き着き、亜沙先輩は相談しなかった事への罰として俺の背中に渾身の張り手を喰らわせた。

「……でさ、最後に亜沙先輩から言われたよ……」

“もっと私達を頼りなさい” って……」

俺に抱き着く桜に温かい眼差しを向けていた先輩からそう言われた時は不覚にも泣きそうになった。

“お前は助けたいって想いが先行しすぎて目の前にある問題しか見てないんだよ・・・だからもつと俺達を頼れ、桜や亜沙先輩は支えてやるって言つてんだ、頼れる人が側に居るのに何もかもお前独りで抱え込んでんじゃねえよ”

タクトから言われた言葉、それは魔法の様に暖かく不思議と自身の心に溶け込んでいく。

その後亜沙先輩から“あつ！タクちゃんがデレた〜”と、囃し立てられ真っ赤になる姿があったと云うのは全くの余談である。

「ハハツ、ホントに今更だよな・・・けどさ、みんなが居てくれないきゃ俺はこうして振り返る事も向き合う事もしなかったと思う」
思い出した記憶に思わず笑みが零れる。

こうして思い返せば脳裏には明るいやり取り、笑顔の絶えない光景・・・独りで覚悟を背負い込んだあの頃には考えられなかった光景が広がっていた。

「父さん、母さん、紅葉さん、

俺、楓に本当の事を話そうと思う」

俺は決意を固めると俯いていた顔を上げ、一気に言い切る。

悩み抜いて出した答え、それは苦渋の決断だった。

もしかしたら楓は信じないかもしれない、もし信じてくれたとしても受け入れられるとは限らない。

この決断には様々な不安が纏わりついていた。

「楓が受け入れられるのにどのくらい時間が掛かるか解らない、不安も沢山ある、けどさ・・・」

今はみんなが居る」

間違いを指摘してくれる先輩、我が身の様に心配してくれる幼なじみ、そして影で支えてくれる親友。

「俺はもう独りじゃない、もう独りでうじうじ悩まない・・・」

今度はみんなで楓を助けるよ」

思い返せばこの五年間、辛いこと、苦しいことばかりだった。

恨まれ、疎まれ、嫌われ、傷付けられ何度も・・・何度もくじけそうにもなった。

でも・・・

それでもこの五年間に有った出来事は何一つ無駄なモノでは無

い……そう断言できる程、価値の有るものだったと俺は心から思う。

俺はおもむろに供えてあつた洋酒の瓶を手に取ると蓋を開け一気に煽る。

口に含むと広がる洋酒特有の甘つたるい味、慣れてないモノを飲んだせいか喉が焼けた。

「っ、ケホツ！……ツ、ハア……よく酒なんて飲めるよな……」

小さかつた頃、父さんが美味しそうに飲んでいたモノだったが、俺にその美味しさが解る筈も無く、軽く咳き込むとそんな言葉を呟いてしまう。

瓶を見るとまだ半分以上の洋酒が残っており、それを墓石に掛けると、空になった瓶を鞆の中に放り込み、身支度を整える。

「じゃあ……俺はそろそろ帰るよ、また来年……」

今度は二人で来るから、楽しみにしてるよ“親父”」

迷い無く、はつきりとそう告げると俺は帰路へつく。

何故今、この場面で呼称を変えたのか、俺自身にもよく解らない。

ただこれだけは言える。

俺はやっと前に進めたんだ、と。

秋風舞う木漏れ日の中、俺はあの日から止まっていた時間が動き出すのを感じた。

.....

「・・・はあー」

学校の屋上、冬の寒さほど辛くは無いが、晩秋に吹く風はやや冷たく肌寒さを覚えるが、頬を撫でるように吹く風は気持ち良く、気の抜けたため息をはいてしまう。

・・・そういえば晩秋とは秋の終わりを告げる語句だが陰暦で表すと九月をさすんだっただな・・・。

何処かの本に載っていた、大して役に立たない雑学を思い出すとフエンスに寄り掛かり再び物思いにふける。

(しかし・・・暇だな)

グラウンドで体育をするクラス(背格好から見ても一年生だろう)を見ながらしみじみとそう思った。

一般的に今は授業の真つ最中。だが教師の教科書を棒読みにしたような授業にも飽き飽きしてきたので思い切つてサボることにした・
・がサボったところで一人ですることもなく結局屋上で暇を持て余す事になってしまった。

(こんな時稟が居ればな・・・)

稟さえ居ればある程度の暇は潰せた(弄つたり、弄つたり、弄つたりして)はずだが肝心の稟は欠席。

桜に理由を尋ねたところ、今日はあの事故から五年目に当たると寂しそくに話していた。

(しかしまあ・・・あそこまで落ち込まなくてもいいだろ・・・)
げんなりとした様子で身体をフェンスに預けると、大きくため息をつく。

実のところサボった理由の大半は桜によって締められてたりする。

根本的にかなりの寂しがりやの桜は親しい人への依存がかなり高い。

その為か他の人よりも人一倍独占欲が強く、特に稟の事に関する事なら躊躇いも無く感情を表に出す程の依存っぷりを発揮することもある。

・・・それが悪いとは言わない、昔から何時も隣に居るのが当たり前の存在だったしあいつの事が好きだからそれも仕方がないと言える。

言える・・・が、淋しいとはいえ授業中にチラチラと稟の席を見るのはいただけないと思うぞ？

別に俺に被害が及ばなければ特に気にすることでもないが残念な事に俺の席は稟の真横、嫌でも眼が合う。

更に何を思ったのか眼が合う度に手を振る桜。

更に更に何を勘違いしたのか女子からは好機の視線、そして嫉妬と殺気を含んだ視線を授業中にも関わらず飛ばして来る馬鹿野郎ども
(親衛隊)

桜の天然ぶりは昔から身を持って知っていた。

だがそれはもう少し違う場で発揮してもらいたい。

胃に穴が開きそうな程、視線を浴びた俺は切にそう願った。

・・・まあなんだ、少し脱線もしたが結果として楓も欠席したので稟も墓参りに行っているのは間違いは無いだろう。

「・・・よし」

そろそろ授業も終わる頃だ。

またあの視線の中、授業を受けるのかと思うとやる気を削がれるが

出ないわけにも行かない。

フェンスから身を離し身体を大きく伸ばし、のろのろと歩き出す。

「さてと・・・」

楓はどう動くかな？」

屋上から去る間際、ポツリと呟いたのは自身の胸に宿る一つの懸念。

俺はそれを振り払う様に大きく頭を振ると、その場を後にした。

第十一話 決意（後書き）

更新遅くなつてすみません・・・生まれて初めて夏風邪をこじらせました。

更に保存していたテキストデータを間違つて消してしまつた・・・まあ最悪な一ヶ月でした。

次はなるべく早く更新するので応援よろしくお願いします。（。（。）

第十二話 変化と異変（前書き）

祝PV100000突破！！

ども！お久しぶりです。

先日ようやく十万を突破しました！（。・。・）ノ

亀更新にも関わらず読んで下さりありがとうございます！

とりあえず達成と同時に更新してみました。

それではごっご〜

第十二話 変化と異変

あの命日から数日経った秋晴れの空の下、俺は稟と一緒に通学路を歩いていた。

久しぶりに変態共（親衛隊）にも襲われず暖かい日差しを浴びながらゆったりとした歩調で何時もの通学路を歩く。

のんびりしている光景、何時もどおりの平日、何も変わらない風景と言えるだろう。

・・・一点の変化を除いてだが。

チラリと横で歩いている稟を盗み見るように見る。

俺の視線に気がついて無いのか、稟は欠伸を噛み殺しながらいつものように黙々と歩を進めていた。

こうして見ると何時もどおり、全く変化など無いように見える。

だが今、土見稟と云う存在を知る人なら口を揃えてこう言うだろう。

変わった、と。

「……(ポツ)／／」

「?えっと……おはよう(ニコッ)」

「っ!あつ、はい、おはようございます／／」

「あつ、突然だったからびっくりしたか……ごめんな?」

「い、いえ!び、びっくりはしましたけど……う、嬉しかったです／／」

「?そつか……その髪型、君によく似合ってるね」

「ふえっ!?……あ、ありがとうございます／／」

「?」

「えっと……じゃ、じゃあ私は先に行きますね、さ、さよなら!

」!

「あ、ああ、またな」

「……今の下級生知り合いか?」

「ん?いや、全く知らないけど?」

「……」

熱の籠った視線を向けてた女の子は稟の女殺しの笑みと挨拶、そしてこれまたべたな殺し文句を言われると顔を赤らめ、小走りで学校へと走り去っていった。

まあ……確かにこうして見ると変わったよな。
節操無しに磨きが掛かっている。

「・・・なんでお前は初対面の奴にあんな言葉がサラっとなるんだ？つていうかお前絶対に嬉しいの意味解ってないだろ」

「？なにがだよ？あの子と目が合ったから普通に挨拶したただけだろ？まあ確かに意味は解らなかつたけどさ」

「・・・ハア」

堂々と言い切る稟にもはやため息しかでない。

・・・まあなんだ、とにかく稟は変わった。

無意識のフラグ乱立はいただけじゃないが、今までの稟とは外見的にも内面的にも格段に変わったと言える。

どうしてこうなったかと言うと、あれは命日の翌日まで遡る。

普通どおり学校へ登校してきた稟だが、普通の行動にも関わらず、すれ違う人やクラスの同級生達の視線は稟へと釘付けとなった。

今までの稟とは明らかに雰囲気違ったからだ。

時折見せる大人びた表情、毅然とした立ち振る舞い、そして無差別に投げ掛けられる女殺しの笑み。

親衛隊から狙われている、学校一美少女と名高い楓と同居して

いる、少し地味だがカツコイイ、桜や亜沙先輩といった美少女と仲が良い、等等。

前々からそんな風評が漂っていた中で、稟の変貌とも言える代わり様はたちまち学年中に・・・いや、学校中に広まって行った。

そのおかげもあってか今や学校内で稟を知らない人は居ない程稟の知名度は上がり、更に嫉妬に駆られた親衛隊に追いかけられるなど、今では傍から見てもある意味充実した毎日を送っている。

「もういいや、被害受けるのはお前だし・・・あと褒めるのはいいがもうちょっと言葉を選べ」

「? 思った事を喋っただけなんだから別におかしいところなんてないだろ?」

「・・・・・・・・」

えっ? 何当たり前の事聞いてんだよ? とでも言いたげな表情をする稟に俺は呆れて何も言えなくなる。

なんだ? こいつは日々親衛隊との(リアル)鬼ごっこを繰り広げているのに自分の立ち位置を今だにわかってないのか?

「おはよう(ニッコリ)」

「は、はい! おはようございまして!」

「・・・・・・・・」

そろそろこの馬鹿沈めようかな?

.....

「ハッ!？」

「おっ、やつと起きたか」「・・・タクトか？」

朝から机に突っ伏すように寝ていた稟が勢いよく起き上がる。

だが現状がいまいち解っていないのか辺りをきよろきよろと見渡していた。

「・・・今授業中か？」

「んー?見れば解るだろ」「そうなんだが・・・あれ?でもなんか記憶が曖昧でよく思い出せない・・・それに身体が妙に痛むのはなんでだ?」

端的に、尚且つ適切に教え再び黒板へと目をやるが、稟は何か疑問が有るのか頭を抱えていた。

その様子に俺は呆れたようにため息をつくとは方無しに稟に説明してやる。

「覚えてないのか?お前俺と一緒に登校してる最中に倒れたんだよ、でだ、そんな時に身体を大きく打ち付けてな・・・」

「えっ?マジ?・・・あ、そういえば突然意識が途切れたような・・・」

「ああ、だから教室まで俺が背負ってきて、意識の無いお前を桜が介抱してくれたんだから感謝しろよ?」

(うわっ、あいつ笑顔で嘘つくと同時にサラッと捏造しやがった、えげつねえ)

(俺登校中あいつら見たけど、あいつ土見にボディ二、三発喰らわせてるの見たぜ?)

(あゝそれ俺も見た、ついでに土見を引きずりながら登校するとこ

るも)

「・・・・・・・・」

人がせつかく捏ぞ・・・いや、ありのままの事実を話しているのにさつきからひそひそとツッコむ男子達。

まったく、失礼な奴らだ、俺は嘘は言っていないぞ？

実際に稟は倒れたし(俺がやったけど)背負って(俺の中では引きずるでも同等の意味合い)やったぞ？

軽く舌打ちを打つと今だに思案顔の稟を横目に俺は満面の笑顔を作り前を向くと軽く人差し指を弾くような仕種を男子達に見せる。

すると先程までひそひそと談笑していた男子達はものすごい速さで身体を黒板へと向けていた。

ふっ、チキンやるーめ。

「そっか、よく思い出せないけどありがとな」

「お、おう、桜にも礼言つとけよ？」

笑顔のまま礼を言う稟にほんのちよつとっただけ、罪悪感を感じたが、それを無視するように稟に軽く手を振ると再び黒板へと目を向ける。

自身に向けられた視線にも気がつかないまま。

.....

「ねえねえ、二年の土見君って子知ってる？彼変わったよね〜」

「うんうん！前からちよつとカツコイイな〜と思ってたけどさ、最近になって急に大人っぽくなったよね！」

「アハハハ！すごい現金！今までそんな事一言も言ったこと無いくせに〜」

午前中の授業も終わった昼食時。

ボクは授業で使った教科書やノートをしまいながら、お弁当を突っつき、稟ちゃんの話題に花を咲かせる同級生達の会話に耳を傾けていた。

「けど狙っても無駄だろうな〜、だって土見君ってあの芙蓉さんと同棲してるって噂だよ？」

「あ！私もそれ聞いたことある！」

「あとあの子！八重ちゃんだっけ？あの子ともただならぬ関係って噂だよね」

「やだ〜なにそれ？三角関係？」

「.....」

気に入らない・・・稟ちゃんの事、何も知らないくせに。

モヤモヤと胸の内に湧き出る感情。

同級生達にそんな想いを抱き、胸には強い憤りと怒りが貯まって行くのが解る。

「フウ」

軽くため息を吐き、感情を胸の内に無理矢理押し込めるとボクはお昼ご飯を食べる為に、みんなが待つ屋上へと向かった。

(ハア・・・それにしても)

上履きを鳴らし、廊下を歩く度に聞こえて来る稟ちゃんの噂、噂、噂。

この数日間は何時こんな感じだ。

女の子達は相変わらず稟ちゃんについての雑談をしてるし、男の子は男の子で・・・

「次はどこでたたく？やっぱり通学路か？」

「いや、奴には悪魔がついている、もう少し慎重に」

「.....」

モテモテの稟ちゃんにある意味健全な反応を示していた。

このやり取りもこの数日の間に何度も見たが、タクちゃんのおかげで今だに成功した試しが無い。

彼等の横を足速に通り過ぎひたすら屋上へと歩を進めた。

土見稟が変わった。

あの命日から同級生や下級生、男女構わず口々に言われるその言葉。

実際ボクも稟ちゃんは変わったと思う。

どのくらい変わったと言葉で表すのは難しいけど、例えるなら昨日まで普通に接していた人が突然、すーぱーサ○ヤ人に変身してしまつたくらいかな？

金髪には為らなかつたけどね。

(・・・でもな)

変わった事は良い事だ。

そう言える、素直に喜べる事なのに、何故だかボクの胸にはモヤモヤとしたなんとも言い難い感情が燈り、一向に消えない。

これは一体何なんだだろう？

いくら頭を捻ったところで一向に答えは出て来ない問題に頭を悩ませつつ、ひたすら歩を進めた。

「
　　」と

突然視界に入ってきた鉄の扉。

どうやら悶々と考えている内に屋上の扉の前に着いてたらしい。

「
　　」と

胸に手を置くが、心に雲が掛かったようなモヤモヤ感は今だ晴れない。

それを消し去るようにボクは深呼吸をすると、ドアノブに手を掛け、扉を開けた

「
　　稟君、女の子の外見を簡単に褒めるって事はダメな事なんだよ？」

「
　　……あの、桜さん？その前になんで俺コンクリートの上に正座させ
　　「わかったの！稟君？」……」

「
　　……」

「
　　……イエッサー」

「
　　……相変わらず桜に弱いんだな、お前」

「うるせえ、そう言うお前は女の子全般に弱いじゃねえかよ」

「さくらー、これ稟のパンだけど遠慮無く握り潰して良いぞ？」

「えっ？で、でもそれ稟君が買ってきたモノだよ？そんな事しちゃダメだよ」

「・・・そっか、桜はいい子だな、どれ、頭を撫でてやろう」

「も、もー！タクト君ってば！子供扱いしないでよ」

「・・・なあ、放置するのは止めてくれないか？それにいい加減足痺れてきたからさ、そろそろ足崩してもいいか？」

「えっ？ダメ」

「・・・鬼畜」

「自業自得だ、いい機会だからもうちょい反省しとけ」

「・・・反省って言っても、何を反省すればいいか・・・なあ桜、謝るからさ、本気でパンを握り潰そうとするのは止めてくれないか？お願いします」

「
」

が、僅かに開けたドアから見えた光景に思わず手を止めてしま
う。

ドアを開け、目の前に広がったのはなんの変哲も無い光景。

タクちゃんが冗談を言って稟ちゃんがツッコミを入れて桜ちゃんが
稟ちゃんに笑いかけたり、時に怒ったり、時に怒ったり・・・こう
して見ても特に変わった様子も見えない普通のやり取り・・・なの
に。

(・・・またモヤモヤする)

胸の奥に湧き出るのはさつきとはびみよくに違ったモヤモヤ感。

胸を押さえながら考えてみるがこれもまた答えは一向に出て来ない。

「桜、そろそろ許してやれよ」

「タクト君・・・でも」

「まあとにかく落ち着け、確かに桜の気持ちも解る、でもさ、考えてみるよ・・・」

裏からギヤルゲースペックと鈍感を取ったら何が残る？」

「！！！」

「桜、なんでそんなに驚いてんだ？」

「・・・解っただろ？それを除いてしまえばこいつには最早・・・
くっ！！！」

「何故そこで言い淀む！？続きを言えよ！続きを！！」

「・・・」

胸のモヤモヤ解明のため、あらためてじっくりと見ていても一向にモヤモヤの原因がわからない。

(・・・それにしても)

こうして傍観しているとタクちゃんが稟ちゃんをからかう時に見せる笑みとか、三人で笑いあう表情とか、桜ちゃんに向ける笑みが普段以上に柔らかく、優しく感じるのはボクの気のせいなのか？

・・・もしかしてタクちゃん、桜ちゃんにデレデレしてる？

(・・・)

モヤモヤ・・・

いや、気のせいだよな？桜ちゃんは稟ちゃんが好きだしタクちゃんもそれを知ってる・・・でも、もしかしたらそれを知ってるからあえて身をひいたって事も・・・

(・・・)

モヤモヤモヤモヤモヤ・・・

いやいやいや、それこそ絶対に有り得ないよ！だってあのタクちゃんだよ？ツンデレでSなタクちゃんだよ？もしそうだとしても奪い取るくらいするよね・・・そ、それに自慢じゃないけどボクはこの一ヶ月間タクちゃんと一番接してきたんだ、気づけない筈は無い・・・

相手からすれば果しなく理不尽な結論をたたき出したボクは勢いよく扉を開けると、こちらに背を向けるタクちゃんの背中を目掛けて走る。

突然のドアの音に驚いたのか、一瞬ビクリと肩を揺らしたタクちゃんも固まっていてまだ振り向かない。

その好機を逃すまいと、タクちゃんが振り返る前に走る勢いを殺さず、尚且つ、ピンポイントに背骨を狙う。

「はろー、タクちゃん」

バァチィー！！

不意打ちの後味が悪いと思い、張り手を打つ直前に挨拶をし、しっかりと牽制した後、タクちゃんの背中へと右手を振り下ろした。
(直前すぎて牽制の意味は為さなかったけどね)

「・・・ふう」

息を吐くと、胸の中に巡る久方ぶりの爽快感。

なんて清々しいのだろうか。

「この日、一人の男子生徒の尊い犠牲により、一人の女子生徒

は救われたという・・・めでたしめでたし」
「意味・・・解らないですから・・・」

ぼつりとモノローグっぽく呟いた言葉に、膝を着き痛みにも悶えるタクちゃんがツツコミを入れる。

とりあえずタクちゃんの横に座ると、ボクは苦笑いを浮かべる稟ちゃん達と少し遅い昼食を取るのであった。

その後、痛みから解放されたタクちゃんがボクにお仕置きをしたのは最早言うまでもない事だろう。

第十三話 予兆

トントントン・・・

とある休日の昼時。

時計の短針が二時を回ったその日、芙蓉家の台所では楓は遅めの昼食を作っていた。

楓の几帳面な性格上、遅めの昼食とは特異な用事が無い限りほぼ有り得ない事。

だが、この日だけは特別だった。

「~~~~」

材料を切る、材料を調味をして煮込む等という調理の合間にも時折鼻歌を歌うなど、他人が見ても、一目でかなりご機嫌な様子が伺える。

「ん・・・出来た」

鍋で十数分間煮込み、それを味見をした楓は満足そうな顔を見せるとそれを皿に盛りつける。

出来たのはシチュー。

それにサラダ、パンを軽く焼いたモノを皿に盛りつけトレイに乗せると、パタパタパタ・・・とスリッパを軽く鳴らし、小走りでテーブルに近づく。

向かったテーブルには新聞を広げ、微動だにしない男の人の後ろ姿。新聞を読んでいるかと思えば近づいてみると、その人は今にもテーブルに顔をぶつけそうな勢いで船を漕いでいた。

(やっぱり、お仕事で疲れてるんですね・・・)

家では一切仕事の事を話さないが、出張を繰り返して、滅多に家に帰らないその姿からも日々、多忙な毎日を送っているのが容易に想像出来た。

その姿に日頃出来ない感謝の念が込み上げて来る。

一旦テーブルにトレイを置き、いまだ船を漕ぎ続ける男の肩を優しく揺らす。

「ん・・・んあ？」

揺らした瞬間、男の人はピクツと僅かに身動きみじろをすると、ゆっくりと瞼を開ける。

「ん・・・おはよ、楓・・・」

「はい、おはようございますお父さん」

そして私は男の人・・・お父さんにとびきりの笑顔を向けるのであった。

.....

「あ~~~~・・・暇だ」

昼時も回った休日の事、俺は暇つぶしをかねて散歩がてら、近所の公園に訪れていた。

だがいい年した男が公園に行ったところでもなく、ただベンチにダラリと座り暇を持て余すだけだった。

公園では昼食を終えた年端もいかぬ子供が友達と、あるいは母親らしき人物と遊具や砂場で遊んでる。

その様子をベンチにダラリと両手を広げ座り見遣る姿は、傍から見るとただの柄の悪い男にしか見えないのだろう。

母親達はチラチラと盗み見るように俺の方を見ると、俺に聞こえよがしに、近頃の若い子は・・・等と井戸端会議を開いていた。

(ま、どーでもいいや)

だが聞こえたからといって俺のだらけきった態度は一切変わらない。
この様に囁かれる事には昔から慣れてた。

寧ろ陰でこそそとと囁かれる生温い言動や態度に対し、やるなら徹底的にやれよ・・・などと考える程、俺には余裕があった。

・・・や、別にドMとかじゃないですよ？

フウと息を吐くと、空を仰ぎ秋風を感じる。

頬を撫でる秋風は少し肌寒さも覚えたが、暖かい日光がそれを緩和し、とても気持ちの良いものだった。

「お前はそんなところで何やってんだ？」

目をつむり、風を感じていると、突然声を掛けられた。

ダラリとベンチにもたれ掛かった身体を大きく体を伸ばし、顔を正面に向けるとそこには予想どおり、私服姿の稟が呆れたようにこっちを見ていた。

「秋風に身を任せ、独り、黄昏れてたんだよ」

「・・・へー」

何となく厨二的に（実際俺は中二だが）言っが稟は興味なさ気に返事を返すと俺の隣に空いていたスペースに腰掛ける。

「
」
「
」

それからというものの俺達は言葉を交わすこともなく辺りからは葉の擦れる音や子供達の笑い声が聞こえてくる。

会話を交わさずとも不思議と居心地の悪さなどは感じなかった。

だが、何故楓の家から遠いこの公園に居るのか、稟の意図が解らない以上こうして黙っていても埒があかないので、とりあえず稟に話しかけることにした。

「で、お前こそこんなとこで何してんだよ」

「・・・散歩してたら近くを通ったから・・・なんとなく寄ったらお前が居たんだよ」

「・・・へ」

返ってきた稟の答え。

今度は俺が呆れたように返事を返す番だった。

そんな不安げな表情を浮かべ、爪を食い込ませるほど拳を握りしめ、楓ん家から遠い公園まで来ておいて散歩と言い張るのか。

相変わらず嘘の下手な事だ。

だが今のやり取りでもおおよその事は理解出来た。

ある程度時間を置き一息つくくと、俺は話しを切り出した。

「何かあったのか？」
「っ」

俺が発した唐突な言葉。

稟は僅かだが、動揺したように身体を揺らす。

「やっぱりか・・・で、何があったんだ？」

「・・・お前超能力者か？なんで解るんだよ」
「当たり前だろ、なんせ・・・」

いつも、お前を見てたからな・・・」

「・・・」

・・・や、別にこの言葉に他意はないですよ？

ただこの一ヶ月間、楓やその他諸々の事を含め、稟を見ることが多かったから言ったまでの話だ。

だがコイツはどう勘違いしたのか、刹那、目にも留まらぬ速さで俺から遠ざかった。

・・・ああ、貞操の危機でも感じたのか？

「お、俺はノーマルだあああ！！！！」

「・・・はっ？」

そんな事を考えていると突如、公園に轟く訳の解らない主張。

何事かと、稟が遠ざかって行った方角を見遣ると、僅か数メートル離れた地点で、稟が俺にむかって必死な形相を浮かべていた。

(・・・ノーマルならそこまで必死になるなよ・・・)

稟の過敏な反応に呆れながらも、いまだ俺に対し警戒を解かない稟に笑いながら言う。

「・・・ま、冗談だから気にするな、あと他意はないぞ?」

「当たり前だろ!? 寧ろ有ったら怖ええよ!」

腐がつく女子が喜びそうな展開だが生憎俺もノーマル。

勘違いされないため、最後にそう付け加えると、稟は叫ぶようにツッコミを入れた。

ま、これでいくらか気が楽になっただろう。

「ほれ、ツッコミはもういいからさっさと話せ、さっきから親御さん達の視線が痛いんだよ」

「へっ?・・・あ」

じろじろと見遣る視線にやっと気がついたのか稟は再びベンチに座った。

「はぁ・・・一気に疲れた」

「ごめんさなーい」

「・・・もついいや」

なんの悪びれもなく謝る俺に、稟は何かを悟ったよう言った。

それから僅かな沈黙が続き、ぐでーとベンチにもたれ掛かった俺は再び視線を空へと向ける。

そこには秋晴れの雲一つ無い澄み切った蒼い空、吸い込まれそうな程綺麗な青空が広がっていた。

「 今日さ……」

しばしの静寂の後、稟は意を決したように口を開く。

その表情はどこか心苦しそうに、だが確かな覚悟を宿していた。

「 おじさんが出張から帰ってくる……」

「 ……」

「 今日……楓に全部話すよ」

「 ……そっか」

ああ、やっと……か。

おもえばあの命日から約一週間。

きつと稟はこの日を待ってたんだろ。自分の言葉だけでは楓を納得させる事は出来ない。

寧ろ、稟“だけ”の言葉なら、楓は納得どころか信じることもすらないだろう。

なら第三者を介入させるしかない。

事故の真実を知り、尚且つ仲介出来る第三者を。

そして白羽の矢を立てた人物はおじさんだったという訳か……。

「……やっぱり苦しいか？」

「」

一瞬、躊躇する様子を見せたが隠し通せないと思ったんだろう。

「ああ……どんな理由を並べても、結果的に俺は楓を傷つける……それはどう足掻いても変わらないんだ」

静かに首を縦に振り、稟ははっきりとそう答えた。

助けたい、救いたい、そんな想いを並べ、結果を望もうが、行き着くまで待っているのは残酷、尚且つ矛盾した過程。

現状維持は嘘で塗り固めた偽りの日々を送る地獄。

時を進めるなら痛みを伴う茨の道を通らなければならない。

現状を保つにしろ、先へ進むにしろ、どちらを選んでも痛みは必然。

そんな二択を迫られ苦しまないほうが可ましい。

だけど、

「苦しんでも、お前はちゃんと答えを出したんだろ？ だったらちゃんと前向いて・・・胸はれよ」

当事者だからこそ、稟は胸をはらないとダメなんじゃないか？

「タクト・・・」

「苦しいのも解る、傷つけたくないのも解る・・・だけど、ホントに覚悟を決めてんならはっきりとそれを主張しろよ、自分は後悔なんてしてないって、胸はって言ってみるよ」

「・・・」

そこまで言うと言の無言のままベンチから立ち上がり、おもむろにスポンを叩く。

「・・・」

・・・解ってるんだ。

いくら言葉を並べようが、当事者ではない俺には稟の苦しみや想いなんてモノは想像でしか感じることにしか出来ない。

今の言葉だつて稟にとっては必要ないのかもしれない、軽く蔑ろに
・
・

「　　っ！」

まただ・・・稟に限ってそんな事・・・ありえない事なのに。

頭を振り、ネガティブに為りかけた思考を無理矢理シャットダウンする。

「？どうした？」

「いや、なんでもない」

その様子を不審に思ったのか、稟が声を掛けて来たが、俺はすぐさま首を振ると必死に平静を装った。

だが無理があつたんだろう。

稟は僅かに怪訝な表情を見せると、口を開いた。

「・・・なあタクト、お前もしかして・・・「あゝ！」　　へっ？」

稟が何かを言いかけた瞬間、公園に和やかな声が響き渡り、変わりに出鼻をくじかれた稟の素っ頓狂な声が聞こえてきた。

声が出た方を見ると遠見で外見は解らないが、そこには明かに俺や稟よりも小さな女の子が買ひ物袋を片手に手を振り、小走りでこっちへ向かって来ていた。

「・・・で、あの子は知り合いか？」

「待て、何故真っ先に俺を見る？」

自分の胸に聞いてみる。

「自慢じゃないが知り合いが少ないんでね・・・で節操無し、あんな小さな子に何した？正直に答えれば豚箱にぶち込むだけで許してやるから正直に答えな」

「聞く前から性犯罪者扱い！？っていうかお前許す気無いだろ！」

「そんなの当たり前だろ？」

「悪びれもなく言い切ったああー！？」

稟とのコントじみたやり取りを繰り返していると隣でジャリ・・・と砂を踏む音が聞こえてきた。

とりあえず外見でも拝むか・・・そう思い振り返ると、そこには俺や稟よりも頭一つ分程身長の高い、白い猫み・・・み？

「やっぱり！たつくんだ！」

「・・・」

「・・・たつくん？」

・・・白い猫耳帳の帽子を被った亜麻さんの姿があった。

「アハハ、久しぶりですね亜麻さん」

「うん、一ヶ月ぶりだね・・・あっ！そっちの子はたっくんのお友達？」

「ええ、まあ・・・」

「そっかあ、はじめまして　ボクの名前は時雨亜麻っていいいます」

「えっ？あ、どうも俺は土見稟です・・・時雨？」

「？どうしたのりっちゃん？」

「い、いや、なんでもないです・・・りっちゃんか・・・」

やはり稟も苗字の部分で違和感を覚えたのか、亜麻さんに尋ねようとしたが、早くも天然の餌食となり、意気消沈していた。

初対面で微妙なあだ名をつけるとは・・・流石天然、恐るべし。

笑ってごまかそうと会話を続けようとしたが、そうは問屋が下ろさない。

稟はガシリと俺の肩を掴むとニツコリと笑みを浮かべた。

「さて・・・なあ、たっくん」

「・・・なんだい、りっちゃん」

「・・・俺の知り合いじゃなかったよな・・・」

「・・・そーですね」

「なのに俺性犯罪者扱いされたんだけど？」

少し怒気を含んだ表情で不満を語る稟。

・・・まあ、確かに今回は俺が悪かったと思う。

そう思った俺は稟と向き合つと、静かに言い放った。

「 自業自得ってことで 」

「 今度は開き直った！？お前もうちよい反省し 」 「 うっさいぞ、この節操無し 」 「 ……最近俺の扱い酷くないか？ 」

あ、やり過ぎた…。

ガクリと肩を落とし、哀愁漂う稟の落ち込みように、ほんのちよつと！罪悪感が湧く…が、自分が犯した一週間の所業（無意識のフラグ乱立等など）を解ってないようなので、そのまま放置しておいた。

「 二人とも仲良いんだね 」

すると突然、こちらにニコニコと笑顔を向けている亜麻さんがそんな事を言い出した。

「 ははっ、そう見えますか？ 」

「 うん ボクも見てて羨ましくなったよー あーあ、ボクも学校に行きたいな〜 」

「 ……亜麻さんっていくつなんですか？ 」

「 あ〜！りっちゃん、こんなおばさんに歳を聞いちゃめっ！だよ？ 」

稟の質問に亜麻さんは子供を叱るように人差し指を立て、稟に言った。

そして同時に亜麻さんの天然発言により公園内のおばさん・・・ゴホン、年配女性からの鋭い視線が俺達に突き刺さるのであった。

「と、ところで亜麻さんは買い物の帰りですか？」

いち早く視線に気づいた稟はとりあえず話題を変えようと、手元にある買い物を見ると唐突に質問した。

「うん、今日あーちゃん学校お休みだからね、久しぶりに二人で買い物してきたんだ」

だが稟の心配りも虚しく、亜麻さんは親子さんの視線に気づいてないのかニコニコとした表情を崩さず、のんびりとした口調でそう答え、買物袋を見せるように僅かに持ち上げるのであった。

亜麻さんの言動に苦笑を浮かべながらも、稟は胸を撫で下ろす。

だが胸を撫で下ろしたのもつかの間、突然、稟は何かに気づいたように「あれ？」と声を上げた。

「ところで亜麻さん、その・・・あーちゃんはどこに居るんですか？」

「ふえ？・・・あー！」

稟の質問に一瞬キョトンとするが、亜麻さんは突然あわてふためき始め、「そうだった！」と、何かを思い出したかのように声を上げた。

「あーちゃん迷子に為ってたんだ！」

「えっ？それって大変じゃないですか！」

「うん・・・でもあーちゃんしつかり者だから大丈夫　「そういう問題じゃないでしょ！」・・・！」

突然声を荒げる稟に、亜麻さんはその小さな体軀をビクリと震わす。とりあえず興奮気味な稟の頭を軽くはたくと、落ち着かせるため、ゆったりとした口調で話し始めた。

「いい加減落ち着け、亜麻さんびっくりしてるだろ」

「　っ、でも！　「お前が慌てても現状は何一つ変わらないだろうが、いいから落ち着け」・・・っ！」

言い返せないからか、稟はぐっと拳を握りしめる。

それにしても何故コイツはこんなにも慌ててるんだ？

一瞬そんな疑問も浮かんできたが、いまだ興奮冷めぬ稟の発言によりそれはすぐさま解決した。

「でもっ！・・・あーちゃんってまだ小さいんだろ？なら早く探してあげないと・・・あーちゃんもきつと亜麻さんの事待ってますよ！」

・・・ああ、そういうことか。

以前、亜麻さんが中学校に来たことから、姿形を見たことない俺だが少なくとも中等部に通ってる事を知ってる。

だが今日初対面、プラスあーちゃんというあだ名だけしか知らない稟は、あーちゃんと呼ばれる人が中学生という事も知らないんだっ
た。

まあ、普通ならあーちゃんなんてあだ名は中学生・・・いや、下手
したら小学生にもつけないからな・・・きつと稟の中ではあーちゃ
ん⇨幼稚園生、もしくは保育園生の方程式が出来上がってるんだろ
う。

なんとも不敏だね、あーちゃん。
恨むならはやくちりした稟を恨んでくれ。

心の中で外見も知らぬあーちゃんに静かに手を合わせると、いまだ
慌てる様子を見せない亜麻さんに提案してみた。

「じゃ、みんなと一緒に探しましょうか」

「えっ？いいの？たつくんありがとう」

「・・・この前助けて貰いましたし、それに・・・」

視線を稟に向ける。

会話に加わらない様子を見ると、どうやらどうあーちゃんを探そう
かと一人模索しているようだ。

「お礼ならあのお人よしに言ってください・・・あいつが居な
ければ亜麻さん困ったままだと思いますから」

「・・・うん」

笑顔を見せ、小走りで稟に近づきお礼を言う亜麻さん。

「この・・・節操無し」

ポツリと稟に聞こえないように呟く。

節操無し・・・か、他人が聞けばどう思うのだろう。

だけど・・・見境無く人を助け一生懸命出来るあの馬鹿にはこれが一番似合ってる。

稟のはにかみ、照れる姿を見ながら俺はそう思っただけであつた。

第十三話 予兆（後書き）

盆休み。

休みがつくのに。

休めない。

上手く出来たと思ったら五・七・五じゃなかった・・・orz

第十四話 親子

「ふう食った食った・・・」

「もうお父さん、おじさん臭いですよ？」

食事を食べ終え、背もたれに寄り掛かりお腹を撫でるお父さんに苦笑いを浮かべながらも食後にいつもの濃い目のコーヒートを差し出す。

「はいどうぞ」

「んっ、ありがとう、それにしても楓も料理上手くなったもんだ・

・昔は野菜炒めでさえ焦がしてたのにな」

「うっ・・・あ、あれは火加減が解らなくて・・・」

今でも鮮明に覚えてる小学生の記憶。

仕事で忙しい想いをしていたお父さんに初めて料理を作ってあげた時の事だ。

思いつきで行動を起こしたのはいいものの、火を扱い料理をしたのはそれが初めてだった為火加減を間違ひ真っ黒とまでは行かないが限りなく炭に近い野菜炒めが出来た事があった。

「それに昔は味付けもめっちゃくちゃなモノが多かったが今じゃちゃんとしてる。この濃い目のコーヒーといいさっきのシチューといい紅葉の味付けそっくりだ」

「っ・・・／／」

ゆっくりとコーヒーを啜り、どこか懐かしむようそう語るとお父さんは嬉しそう笑みを浮かべた。

こうして正面から褒められる事が久しぶりだった為か、僅かに頬が紅潮するのを感じた私は、それを隠すため食器を片付けつつキッチンへと逃げるように入ってしまった。

鼻歌を交え、食器を洗っている最中、自然と頬が緩む。

食事が美味しいと褒められた。

お母さんの味に近づいたと褒められた。

それは私にとってこれ以上の無い褒め言葉だった。

だけど・・・そんな幸せな時間は長続きしなかった。

「　　ところで楓・・・最近変わったことは無かったか？」

「　　」

唐突にお父さんから放たれた言葉。

意思とは関係なく腕が止まる。

たった一言だけ、それこそ当たり障りの無い会話の筈なのに先程まで胸に燈っていた暖かな光が瞬時に消え去って行くのが解った。

「・・・特に何も無かったですよ？突然どうしたんですか」

お父さんに心情の変化を見せまいと笑顔を作りそう返す。

「いや、最近はお出張で家に居なかったからな、何か無かったか心配になって・・・な」

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ・・・もう子供じゃないんですから」

「・・・そうか」

最後にそう付け加え無理矢理会話を切ると再び作業へと戻る。

お母さんがいなくなつてからお父さんは出張から帰って来るといつもそれを口にする。

最初は心配してくれてるんだと思っていた。

だけど身体が、心が成長して行くに連れその言葉の裏にはもう一つの意味が含まれることに気づいた。

お父さんは・・・“あいつ”を気にかけてるんだ。

それに気づいたのは中学に上がったから。

それ以来、私は聞かれる度に口調を強め、会話を切ることを覚えた。

そうすればお父さんは何も言わない、見えない境界を踏み込んで来ないとわかっていたから。

今日もそうだろう、これで終わる・・・そう安堵し、息を吐く。

だが、そんな思いとは裏腹に躊躇いがちにお父さんは口を開いた。

「・・・稟君はどうだい？」

「・・・っ、知りません」

不意打ちだった。

踏み込んで来ないと高を括っていたせいで一瞬、反応が遅れるが、簡潔に返すと視線を落とす。

カシャカシャと、シンク内では洗う音が響くが一向に汚れは落ちない。

嫌な予感が波紋のように胸いっぱいに拡がり、ふっふつと憤りが募っていくのがわかった。

そしてお父さんは、僅かな沈黙の後、意を決したように口を開いた。

「 楓・・・そろそろ稟君を許してもいいんじゃないか？」

「 っ！ふざけないでください！」

ガシャン！！

シンクに食器が落ち、食器が砕ける音がする。

だけど、今の私に気にする余裕なんて無かった。

「お父さん・・・何を言ってるんですか？」

怒りの余り心臓は早鐘を打ち、声が震える。

お父さんの言ってる意味が解らなかった。

自分の耳を疑った。

何故、そんな事が言えるのだろうか？

「楓・・・お前が稟君を恨んでるのは知ってる」

昔から宥める時に使う、お父さん特有の優しく論するような口調。

まるで小さな子供を扱うようなその口調が、今はとても煩わしかった。

「だがいくら恨み言を重ねたところで何も変わらないだろう？」

「それは」

それは正しい事なんだろう。

恨み言を重ねてもお母さんは帰って来ない。

嫌がらせを続けたところで心はちっとも晴れない。

「それに稟君は大切な　「それ以上言わないでください！」」

だけど・・・正論だけで納得できるほど、それは単純なことじ

や無かった。

簡単に、納得できるモノじゃ無かった。

声を荒げ、言葉を遮るように叫ぶ。

「　　なんで」

「・・・・・・」

「なんでお父さんはあいつを許せるんですか？」

「・・・楓、あいつなんて言うもんじゃない」

「だったら！理由を教えてください！」

「・・・・・・」

何故あいつを許せるのか、何故あいつを庇うのか、何故あいつに優しくするのかを。

以前、似たようなことを聞いた事もあった。

だけど何時も結果は同じ。

聞いてもお父さんははぐらかすだけ。

今も顔を俯かせ沈黙を保ってる。

「　　っ！あいつは！あいつはお母さんを殺したんです！」

その姿に苛立ちを覚え、自らが正しいと正当化させる為に叫ぶように言葉を紡ぐ。

「なのに・・・なのにあいつは今も桜ちゃんやタクト君と仲良くし

てる……」
「……」

ポタリと床に水滴が落ちる。

憎かった。

今ものうのうと日常を送っているあいつが。

許せなかった。

桜ちゃんやタクト君、亜沙先輩と笑い合うあいつが。

「つ、あんな奴……」

あんな奴、死んじゃえばいいんだ!!」

とめどなく涙を流し、私は半ば発狂したように叫んだ。

当事者の居ない芙蓉家。

日常が……平穩が壊れ行く音がした。

……

「あの、亜麻さん」

「ん？なに？」

「その・・・今更なんですがあーちゃんって子はどんな外見なんですか？」

「ホントに今更だな、おい」

姿形も知らぬ、あーちゃんを探し始めてはや一時間。

あーちゃんが迷子になったという商店街まで赴き三人で探し回るが、休日ということもあり人通りが多くなかなか見つけれられない。

そんな時、馬鹿稟が唐突にそんな事を言い出した。

「てか、そこは行動する前に気づくべきところだろ」「うつ・・・し、仕方ないだろ？その・・・早く探してあげないといけない状況だったんだし・・・それに亜麻さんが居るからどうとでもなるだろ？」

言葉では正論地味な事を並べているが、だんだんと声が尻すぼみする時点でポツと出の発案だということが解り、俺は人任せな案に呆れたようにため息をついた。

「ハア・・・考えが甘いな稟」

「どういう事だよ？確かに安易な案だったかもしれないけど亜麻さんなら俺達と違ってそのあーちゃんを一目で探すことが出来
あれを見て・・・まだそんなことが言えるか？」・・・？

稟が言い終わる直前、俺はスツと、人差し指をある場所に向けた。

最初は疑問符を浮かべていたが、人差し指に釣られ視線を移した瞬

間、稟の表情は驚愕の色へと染まって行った。

「りっちゃんりっちゃん、ここのケーキ屋さんすっごくおいしんだよ」

「あっ！ねえたっくん、この服ボクに似合うかな？」

「あー！あのスーパー今日特売日だったんだ！早くあーちゃんに行かなきゃ！」

俺が指を指した先。

そこには当初の目的を完つ壁に忘れ、思うがままに翻弄する亜麻さんの姿があった。

「・・・タクト、あの人は現状を把握出来てないのか？」

「さあ？」

稟は頭を押さえていたが、俺にもあの人の思考を理解できるはずも無く、適当に肩を竦めそう返した。

「ま、でも天然さんなんてみんなあんなもんだろ？お前のお袋さんも似たようなもんだっし」

「・・・否定出来ないのが悔しい」

稟はいまだ翻弄する亜麻さんを見ると、遠い目をしながらそう答えた。

昔、何度か会ったことのある稟の母親。

あのお袋さんの天然ぶりもかなり目を見張るモノがあった。

稟の家を訪れた時は「牛乳切れちゃったから買ってきてくるね」と言い、出て行ったと思いきや買ってきたのは牛乳ではなく服だったという事もあった（理由を聞くと本人曰く、自分の中にはかわいい物は一目見たら買う！というポリシーがあるそうだ）

あるときは「どーぞ」と言われ受けとった茶飲みの中には茶ではなくコーヒーが入ってた事もあった（しかもかなり濃い目のやつ・・・っていうか、普通茶飲みで、しかも年端もいかぬ餓鬼にコーヒーを出すか？）

まさかの二重フェイントに精神をやらねながらも、必死に飲んでいた記憶は今でも鮮明に覚えている。

「天然さんに身を任せればいずれ身を滅ぼす」

昔の経験からの言葉。

今日の格言だな。

「確かに・・・あつ、んじゃ聞かなかつたお前はどうかんだ？あーちゃんつて子知ってるのか？」

一瞬納得した様子を見せた稟は、俺が亜麻さんにあーちゃんの事を聞かなかつた事に対し疑念を抱いたのか、唐突にそんな事を聞いてきた。

「・・・そんなの決まってるだろ？」

フツと笑みを浮かべわざと一拍おくと、自信満々に返す。

すると稟は合点がいったのか納得し安堵した表情を浮かべた。きつと知っていると解釈したんだろう。

その表情を見るなり、俺はニヤリと口元を歪めはつきりと言ってやった。

「んなの、俺が知る訳無い！」

「今までのやり取りは全部フェイント！？っていうか、知らないんだったら人の事言えた義理じゃねえだろお！！」

や、おっしやる通りで。

稟の渾身のツッコミに、大通りを歩いていた人は何事かと振り返るが、俺はそれを無視すると落ち着かせるように稟の頭をぼんぼんと撫でる。

突然の事に一瞬驚いた表情も見せたが、次第に稟は落ち着きを取り戻していった。

「・・・お前、その癖は治ってないんだな」

「んー？なんの事だ？」

「お前、昔から桜達をからかった後、宥めるようにいつも頭を撫でてただろ」

「・・・よく覚えてるな」

「ま、昔っから一緒だったからな」

確かに楓達をからかった後は宥めるように撫でていたがまさか覚えてるとは思わなかった。

まあ桜と楓は撫でられるのが好きだったから、こうしてからかった後撫でることは無意識のうちに癖になってたんだろう。

それに俺自身も結構好きだからな、撫でるの。

「嫌か？」

「このシチュエーションにそのセリフは結局危ない感じがするんだが？いや、別に嫌とかそういう問題じゃ無くてさ・・・な？」

「・・・ああ」

意味ありげな目配せをしたと思いきや稟はゆっくりと歩きだす。

ああ、なるほど。

人通りの多い商店街、ちらちらと見てくる女の人達。

こうして辺りを一目見渡せば稟の言わんとしたことがすぐさま理解出来た。

「本性を・・・ホモだということをみんなに悟られるのが怖かったんだな・・・」

「まったく違うからな！？っていつかお前納得した表情浮かべると思ったらそんな事考えてたのか！」

「・・・えっ？」

「そんな「違っただの？」って言いたげな表情でこっちを見んじゃね

ええー!!」

どうやら俺が出した結論はいろいろと根本的に違ってたらしい。

ツツコミに体力を使いすぎ、肩で息をする稟を見てそう感じた。

「じゃあなんで意味ありげな目配せしたんだ？」

「な、なんでってそりゃあ・・・こんな人目につくところで撫でられれば誰だって恥ずかしいだろ？」

「・・・・・・・・」

「・・・なんでここで信じられない物を見たような顔をするんだ？」

「・・・なんでもない」

恥ずかしい？この無意識フラグ乱立旗男が？・・・もういいや、同じ事ツツコむのもいい加減めんどくさくなってきた。

稟に羞恥心について説くのを諦めた俺は力無く首を横に振るといまだウィンドウショッピングを楽しみ、翻弄する亜麻さんの後を追う。

「・・・・・・・・」

訳が分からないと言わんばかりに首を傾げる稟とこうして「冗談を言い合ったり接していて解ったことがある。

一週間前、俺が感じた変化は変化なんて大それたものじゃ無かったんだと。

天然ジゴロ、真つ直ぐに本音を言う、素直に人を褒める、裏表無く
純粹に人を思いやる。

それは昔と何一つ変わらない行動。

稟はただ単に昔の、馬鹿で、正直で、人一倍お人よしで、誰よりも
優しい稟に戻っただけだったんだ。

「……やっぱお前はすごいよ、稟」

何度打たれても決して曲がらない芯を持った稟。
俺には無いその強さが羨ましかった。

「……桜は、始めから気づいてたのかな？」

この数日を振り返り、思わずそう呟く。

だんだんと稟が目立ち、回りに女子が増え始めた時も独占欲の強い
桜は動くことはなかった。

あの時はおかしいと首を傾げたりもしたが今なら断言出来る。

桜は俺が時間をかけやっとなんか気づけた事をあいつは一目見て気づいた
んだ。

ま、動かなかったかわりに今まで以上に、それこそ四六時中、学校
に居る時は稟にアプローチをするため使っているけどな（わざと腕
を組んだり自分の弁当をあーんさせたり）

今は姿無い幼なじみの健気な姿を思い、笑みを浮かべると歩を進め

た。

「あー！ー！ー！！！」

「はっ？」

「んあ？」

「あっ！」

が、それは背後から響き渡る声に数歩も進まない内に止まった。

突然轟いた声にそれぞれ三者択一の反応を示した後、一斉に振り返るとそこには買い物片手にこちらに駆け寄ってくる女性の姿があった。
「……ん？」

「あーちゃん！ やつと見つけたよ」

「もう！ それはボクのセリフだよ！ じっくりも勝手にふらふらどっかに行っちゃうんだから！ ボクの手離さないでって言うてるでしょっ

！お母さん！！！」

「……」

ぎゅっつと亜麻さんを抱きしると心の底から心配したように亜沙先輩は言った。

「……つかオカアサン？ 誰が？ 亜麻さんが？ 先輩の？ ……おかあさん……お母さんねえ……」

「……へっ？ お母さん？ ……亜麻さんが！？」

「うん、ボクはあーちゃんのお母さんだよ」

「……」

俺の代わりに質問をした稟は亜麻さんの答えに、魂を抜かれたよう

に呆然としていた。

母親だが容姿は妹のように幼い亜麻さん。

娘だが姉のようにしつかりした亜沙先輩。

なんか都市伝説にでもなりそうな組み合わせだった。

「？お母さんこの人達はだ・・・」

「あつ、あーちゃん、この人達はたつくとりっちゃん。あーちゃん探すの手伝ってくれたんだ」

「こつちがりっちゃんであつちがたつくん」と紹介する亜麻さんとは反対に先輩は何の反応も示さず、衝撃のあまりか笑顔のままその場で固まっていた。

「・・・はじめまして」時雨亜沙と申します」

そして数秒間の後、何を思ったのか先輩は明かに無理矢理な笑みを作ると、突然自己紹介を始めた。

とりあえず先輩、その笑顔はとてつもなく恐いです。

(・・・なあ、あれ亜沙先輩だよな)

(ああ、なんかごまかそうとしてるけどまごうことなく先輩だな)

とりあえず俺達も笑顔を作り会釈を返すと二人に背を向け小声で話す。

(つーかなんで亜沙初対面のふりしてんだ?)

(あーちゃんなんてあだ名がばれたから偏に恥ずかしがってるんじゃないか?)

(?なんで恥ずかしがるんだ?可愛くていいじゃ っておい!小

指そっちに曲げんじゃ・・・ぎゃああー!)

(あ、ごめ、つい)

(謝るならせめて離してからにしろよ!?)

未だ稟の小指からはミシミシと異音が聞こえてくる。

このまま無視しようとも思ったが、いい加減埒が明かないので指を離すと無理矢理話を進めた。

(とにかく、俺達と初対面のふりをしてるって事は先輩は恥ずかしがってるって事だ、わかったかい?りっちゃん)

(い、イエッサー・・・)

(理解出来たなら先輩の琴線に触れず、この場を紛らわせる事の出来るような案だせ)

その間、ちらりと先輩の顔を伺うように見る。

そこにはニコニコと口元は確かに笑っているのに眼がまったく笑っていない、今すぐ稟にすべてを押し付けて逃げたくなくなるような威圧感を放つ亜沙先輩の姿があった。

手っ取り早く「もー何言ってるんですか?亜沙先輩」なんて空気の読めないツツコミを返した暁には俺達への折檻はもはや逃れられな

いだろう。

「?たつくんどうしたの?」

「な、なんでも無いです」

いつまで経っても挨拶を返さない俺達に疑問を抱いたのか首を傾げ聞く亜麻さん。

どうやらそろそろ時間切れらしい。

（　　っ！そうだ）

背骨折られるのか・・・一瞬諦めかけた頭に一つの案が思い浮かぶ。

深く考えずとも簡単な事だった。

先輩があくまで俺達と初対面だと貫きたいのなら俺達も真似をすればいい。

・・・うん、それならば俺達に被害が及ぶこともない。

（おい稟・・・）

（・・・！）

我ながら完璧な案。

ちらりと視線を稟に合わせアイコンタクトを送ると稟は納得したように微妙に顎を下げて承の合図を返すと各々亜沙先輩へと言葉を発した。

「何言ってるんですか？ 亜沙先輩」

バシィィ！！

どうやらアイコンタクトは失敗に終わったようだ。

俺のアイコンタクトをどう勘違いしたのか次の瞬間、顔を真っ赤に染めた先輩の平手により稟は地に平伏した。

尊い犠牲になつた稟を横目に、俺は言った。

「はじめまして俺は相沢タクトと申します、よろしくあーちゃん」

バコオ！！

あくまでフレンドリーに、俺なりに気を効かせた一言は、十四年余りの人生で初めて女性からアッパーカットで返されるといふ想像だにできなかった結果に終わった。

.....

「.....うぐう」

「あ、アハハ.....ごめんねタクちゃんつい手が出ちゃって.....でもボケれるって事は大丈夫だよね」

いえ、今のはただのうめき声です。

そつ返そつと口を開くが途端、視界がぐらぐらと揺れ俺は口を噤んだ。

先輩から鋭いアッパーを喰らった俺は今、亜麻さん達を家まで送っていた。

夕暮れも近いせいか、住宅地には子供や親の姿が無いが今の俺にすればそれは好都合だった。

なんせ・・・

「あーちゃんもたつくん叩くなんてやり過ぎだよ・・・まだたつくんふらふらしてるし・・・」(ぎゅうつと力を込め亜麻さんはしっかりと俺の右手を握る)

「うう・・・タクちゃんホントにごめんね？」(今度は遠慮したように上目遣いで見られキュッと優しく左手を握られた)

なんせ俺達は今、ダメージが抜けきらない俺を支える為、三人仲良く手を繋ぎ歩いているからだ。

俺としては二人に迷惑が掛かるのを危惧し、稟に任せようとしたが夕暮れも近く、そろそろ幹夫さんが帰ってくる時間帯だと、そそくさと帰って行った。

「」

右隣ではご機嫌な亜麻さんが大手を振り、先輩は相変わらず遠慮気味に手を握っている。

こうして亜麻さんと亜沙先輩の手を握り歩く、というのは俺からすればドラマの構図のように微笑ましい光景だと思う。

だけど、いつまでもこうしてもいられない。

いくら夜で人通りが無いと言ってもいつ亜麻さん達の知り合い、学友に会うかも解らない状況。

もし知り合いにでも会ったらどうなるだろうか？

例を挙げればキリは無いが良い結果にはならない事は目に見えていた。

手っ取り早く眩暈とダメージを抜くため、治療魔法を掛けようと右手で頬を覆うように手を当てる・・・が、当てる間際、ものすごい速さで先輩に手を捕まれる。

「魔法、使っちゃダメだよ？いくらボクが悪いといってもタクちゃんにも責任があるんだからね？」

「・・・や、これには訳が」

「訳もへったくれもない！と・に・か・く！魔法は禁止！」

「・・・うぐう」

半ば強引に押し切られる。

大半が正論なので、ボケ返すのが精一杯だった。

「じゃあ手は離しましょうか？」

ならばと素早く手を離す。

離れてさえいれば特に問題は・・・

「ええ〜？」

「なんでそこで亜麻さんが嫌がるんですか!？」

「だって〜・・・たつくんはボク達と手を繋ぐのはいや？」

俺よりも身長の高いので必然的に上目遣いになり、ジッとこちらを見る亜麻さん。

先輩とは違う、全く狙ってない上目遣いに俺の意思はぐらぐらと揺れだす。

「あー・・・嫌では無いです、ただ夜男と手を繋ぐなんて感心しないですよ?」

俺は父親か。

自分にそうツツコミたかった。

やんわりと返すと亜麻さんは不服なのかプーっ頬を膨らませた。

「あつ、なら先輩はどうですか?俺なんかと手を繋ぐのは嫌ですよね?」

このまま亜麻さんペースに巻き込まれば言い負ける。

そう感じた俺は先輩に話を向ける。

さつきから遠慮気味に手を握り、羞恥の余り顔を朱く染めてる先輩のことだ、このまま話に乗ってくれるだろう。

「ボクは・・・別に構わないよ？」

「・・・はっ？」

「だ、だからお母さんが手を繋ぎたいって言うならボクも付き合いつてこと！」

「・・・」

そう言うと顔を逸らし手を伸ばす先輩。

「・・・八方塞がり、か。」

頭にそんな言葉が過ぎると同時に、隣で亜麻さんの表情が明るくなるのが見えた。

先輩の言い分は目茶苦茶だったが、顔を真っ赤に染め手を伸ばしモジモジする姿は不意に抱きしめたくなるほどの破壊力を持っていた。

「・・・行きましょうか」

「あっ」

完璧に壊れた意思を投げ捨て、二人の手をとる。

暖かいな・・・

手から伝わる二人の暖かい温もりが、心までも温めてくれる。

戸惑い顔を俯かせる先輩。

嬉しいのか「エへへ」と微笑み、微かに頬を染め歩く亜麻さん。

その正反対な反応に口元が緩み、自然と笑みがこぼれ落ちた。

第十四話 親子（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。 。 。 （ ）

第十五話 宵闇、明けない心

人生において何よりも難しいのは嘘をつかず生きることだ

昔、どこかで聞いた、ある偉人の言葉。

言葉の通り、人は嘘をつかずに生きるとは難しい。

嘘から出たまこと。

嘘も方便。

嘘つきは泥棒の始まり。

このように世の中には嘘に関することわざ、言葉が山のようにある。

これが意味すること、それはそれだけ人は嘘を重ね続けてきたという事実にも繋がる。

政治、歴史、人間関係。

すべてにおいて人は嘘を重ねてきた。

利益を得るため、汚点を隠すため、偽りの自身を形作るために。

何が真実で何が虚実なのか。

人はそれを探そうともせず、疑おうともせずただ日々を流れるまま

生きて行く。

嗚呼、くだらない。

黒い髪、透き通った朱と蒼い異眼。

年端もいかぬ、幼い容姿の男の子は子供には似つかわしい言葉を小さく呟いた。

顔を上げ、その瞳に写るのはニヤニヤと、汚い笑みを浮かべ自分に話し掛けて来る大人達の顔。

そして男達の後ろでは彼の母親が笑顔を向けていた。

二度と歪むことも、決して曇ることもない穏やかな笑顔を……。

この人達は僕が気づかないとでも思ってるのかな？

彼は心の中で呟く。

厭らしい、下劣な笑みを見せ話し掛けてくる人達が見てるのは僕ではないということに。

彼等が見ているのは僕について来る付録……母さんの遺産だと気づいていることに。

大人達が並べる言葉は全て嘘、偽りだということに。

そして……彼等は誰一人として、僕を必要ともしないということに……。

優しさなんて微塵も感じられない薄っぺらな言葉を並べる大人達。

私腹を肥やそうと目論み汚い笑みを向け話し掛けてくる大人達。

そして彼等が見せる意地汚く、格好の獲物を見るような視線と欲深く光る瞳。

そんな彼等の姿に、彼はある疑問を抱いた。

何故、彼等は自分を見てくれないのかな？

下心が有りながらも確かに向けられている瞳。

だがその視線に、瞳の中に自分の姿は写ってはいなかった。

ああ、そつかあ……。

しばらく考えた後、彼は納得したように頷いた。

この人達にとって大事なモノはお金で・・・所詮他人の事は・・・僕の事はどうでも良いんだ。

彼が立てたのは拙い持論。

そこには確実な証拠も無い、的確かつ完璧な理論を並べることもない。

だが、彼には揺るぎない、確かな確信があった。

ハハツ・・・そっか。

視界に写る彼等の姿、顔の輪郭は次第にぼやけ、虚ろになり、彼の口元は自然と大人達を嘲るように歪んでゆく。

人間なんて・・・みんな“からっぽ”なんだ。

正義、理論、情理。

いくら綺麗事を翳そうが、そこには一片の真意も善意もありはしない。あるのは嘘、偽り、虚構、偽善だけのがらん堂の生きモノ。

くだらない。

無意識に呟いた言葉。

それは波紋の如く拡がり、彼等の耳へと伝わって行く。

あるモノは度肝を抜かれたように言葉を失った。

あるモノは意味を理解した上で憤怒を隠そうと努めていた。

あるモノは子供の戯言だと気にも留めないモノもいた。

それらは様々な反応を見せたが次に起こした行動は皆一緒。

先の繰り返しだった。

彼は無言のまま立ち上がると部屋を後にする。

部屋の外、何人かの大人がいたが彼はそれらを一瞥すると、小さい
体軀を利用しその間を縫うように歩き出す。

めんどくさい。

彼は思う。

人とは嘘つきだと。

人は金の為なら、自分の為なら躊躇いなく人を騙す。

なら僕は・・・俺は何を信じればいいんだ？

彼は思う。

周りは嘘つきだらけ。

信じれば寝首を掻かれる。

信頼出来る人なんて一人もない。

ああそうか、なら誰も信じなければいい、頼らなければいいんだ。

行き着いた答えに彼は満足したように笑うと大きく一步を踏み出す。

足を踏み出す度に彼の瞳は刃物のように鋭利に、綺麗だった朱と蒼の瞳は自身の心を投影したように黒く濁ってゆく。

彼の周りで話す大人達の声、足音、喧騒は次第に聞こえなくなる。

答えは単純、実に簡単なことだった。

人は嘘の塊。

信じたところでいずれは裏切られる。

なら他人を信じなければいい。
知り合いを信じなければいい。
友達を信じなければいい。
そして母さんの葬儀に顔さえ見せなかったあいつも信じなければいい。

誰一人として信じなければ・・・俺は

.....

「　　っう・・・」

目覚めは最悪だった。

着ていたシャツは汗でベトベト、更に激しい頭痛、吐き気に襲われる始末。

不快感に顔をしかめ目を開けると見慣れた天井が飛び込んできた。

だが何故俺はベッドの上にいるのか。

寝起きのせいかな経緯を思い出そうとしても思考が全く働かない。
しばらくベッドの上でぼーっと時間をつぶしていると働かない思考がだんだんとクリアになって行く。

（・・・ああ、そうだ）

先輩達・・・亜沙先輩と亜麻さんを送った後、疲れたから一眠りしたんだった。

身体を起こし、壁に掛かっている時計を見ると短針は六を示し、窓の外を見遣ると辺りはすっかり闇に覆われていた。

「　　つ、ふう・・・」

ズキリと胸に痛みが走り、心音は落ち着き無く胸を鳴らす。

久方ぶりに見た昔の忌まわしい記憶。

ハア・・・と大きく深呼吸をすると心音が落ち着きはじめる。

だが心には当ても無い不満と苛立ちが募り、一向に消えない。

258

まあ、こればかりは仕方ないのでととと諦めることにしよう。

未だ胸で燻る感情を無視するようにすっぱり切り捨てると思考を切り替えるため頭を大きく振る。

さて、

「飯でも食つかあ・・・」

とりあえずさっさと腹を満たしてととと寝て、早く忘れることにしよう・・・。

目指すは昼に訪れた商店街。
目的が決まった俺は大きく背伸びをし、重い身体を伸ばすと上着を
羽織ると足早に外へと出た。

.....

突然ですが、只今俺はものすごくピンチに陥ってます。
どうピンチなのかは一旦隅にでも置いといて・・・だ、皆さんには
人に備わる三大欲求なるものを理解して貰いたいと思う。

ちなみに俺は決して（ここ重要）現実逃避している訳ではない、そ
う決してだ。

三大欲求、一つ目は空腹を満たすための食欲。

二つ目は疲れを取るために行う睡眠欲。

そして三大欲求三つ目にして一番厄介な欲・・・性欲だ。

食欲、睡眠欲は誰にでも簡単に解消できるが性欲ばかりはそうもい
かない。
何しろ異性、さらに互いに好き合ってるという条件付きの相手がい
るからだ。

人間の欲とは実に面倒なモノだ。

性欲を満たすため、一方的に相手に迫ることもある。

快樂を求めるあまり犯罪に走る事もある。

欲が行き過ぎれば相手にありもしない感情を無理矢理求める事もある。

欲とはそれだけ自我が強く、コントロールが難しい。

つもとところ、性欲とは互いの欲と、互いの感情の折り合いをつけなければ上手くは解消出来ないモノだと俺は思う。

まあ他にも解消方法はあるが、そこらへんはいろいろと引つ掛かりそうなのでバツサリと割愛させて貰うことにする。

・・・でだ、話しは戻るが俺は現在もの凄くピンチだったりする。

「ねえねえ、君今暇？俺達と遊ばない？」

「俺達いい店知ってるんだよね〜よかつたら奢るよ？」

「……………」

俺の目の前には金髪にチャラチャラとした装飾品、年上だと思わせる風貌。

現在、俺は下心丸だしな男達に付き纏われていたりする。

まあ・・・認めたくは無いが簡潔に言うならばこれはナンパというものだろう。

さらにこのナンパ男達、先程から冷たくあしらってるつもりなんだが、なかなか離れずつとつしい事この上ない。

(・・・いつそのこと挨拶伏せるか?)

拳を握り、力を込めるがすぐにやめた。

奴らは俺を女だと勘違いしてるだけだ。

手をあげた訳でも無いし殴るのはやりすぎだろう。

「だから、さつきから男だっって言ってるだろ」

「またまたくそんなに嫌？」

「当たり前だろ！」

俺にそんな趣味はさらさら無い。

「まあそんな訳だから。性欲満たしたいなら他の女あたれ」

「おっ、いいねくその素っ気ない態度、そそられるぜ」

「こ、これがツンデレか・・・！」

「・・・」

ぶっ飛ばしてやろうか？

再び拳を握りそうになったがどうにか踏み止まった自分を褒めてやりたいと思う。

そもそもなんで俺を女と見間違える？

確かに男としては髪は肩までと長い方だ（切るの面倒だし）顔は“タクちゃんのルックスってどっちかと聞かれたら中性的だねー”とも言われたことがある（亜沙先輩に）

・・・あれ？こうして考えると俺って童顔なのか？

「あのさ、お　「そうだ晩飯はまだ？奢るよ？奢るよ？奢るよ？」

お礼は一晩付き合っただけでいいぜ」・・・ハア、だか 「おっ！
それいいね、んじゃ決まりだな」・・・」

ここで一つ言わせて貰おうか。

俺にはこの世で許せない行動が三つある。

一つは今のように入話の話を聞かずに話しを進めること、二つ目は
ずかずかとこちらのテリトリーに踏み込んで来る奴。

三つ目・・・は、後々話すことにしてもだ、今、コイツラはその二
つを侵した。

・・・ああ成る程、お前等はそんなに俺を怒らせたいのか。

相手が知らなかったとは言え俺は過去の経験上、一度でも遠慮無く
テリトリーに踏み込んだ奴らは目的を果たすまで決して止まらない
と知っている。

(・・・ハア)

もはや、こうなっては致し方ない。

これ以上周りに被害が及ばぬよう、俺は汚れ役になろう。

意志を固めた俺は、拳に力を込める。

・・・別にコイツラで溜まった鬱憤やストレスを解消しようとして
いる訳では無いのでそこんところ悪しからず。

さて、とりあえず私刑シリンチにでも掛けようか。

あとついでに節操無しの奴らのブツやらナニやらいろいろと潰しておこう。

物騒な決意を固め、男達を見ると何やら他方を見て話していた。まあなんでもいいや、とりあえず先手必しよ

「あれって楓ちゃんじゃね？」

「おっ！ホントだ、やっぱり可愛いな……でも隣の男誰だ？土見……ではないよな」

耳に届いた男達の会話。

力を込め、振り上げた拳をピタリと止める。

男達の視線を追うと、確かに私服姿の楓が男数人に囲まれ何かを話していた。

幸いにも男達は俺の動作に気づいていなかったのかしばらく楓達を観察した後、再び会話を続けた。

「うっわっ！もしかしてもしかするとあれってナンパア？楓ちゃんに声掛けるなんて無謀な奴もいたもんだ……しかもあいつら立て続けに断られてるぜ？かわいそ」

「……でもなんか楓ちゃん様子おかしくね？つかあんな曖昧な断り方してたら奴ら……って、おい！ちよつと待てよ、まだ」

静止の声と共に伸ばされた男の手を振り払う。

ああ、イライラする、めんどくさい。

心の中に貯まるモヤモヤと溜まる負の感情に思わず悪態をつく。
一向に退かない男達、普段は見せたことのない弱々しい楓の姿、すべてが感に障る。

抵抗する楓にしつこく声を掛けている男は四人。

「ちよつとごめんよー」

俺は男達の間を軽い口調で通り過ぎる。

「おーやつと見つけたぞ妹よー（棒読み）」

うん、我ながら見事な大根役者っぷりだ。

突然現れた俺に、現状が把握出来て無いのか楓はきょとんとこちらを見返す。

「え？タク 「すみませんねー妹が皆さんにご迷惑をおかけしたみたいでー・・・さ、帰るぞ楓」

何か言いかけた楓を無視するよう一方的に話すと男達から離そうと手を引く・・・が、どうやら世の中、望んでるようには転がってはいくれないようだ。

「まあ待てよ」

「・・・」

嗚呼、めんどくさい。

今日、何度この言葉を呟いただろうか。

男はご丁寧にも楓の腕を掴み俺達を引き止める。

俺の腕を掴んだなら振り払い逃げる事も出来るが、楓の腕力ではそれも出来ない。

「君がその子の兄貴なのはわかった。けどさあ俺のツレその子にぶつかられてケガしたからねえ、こっちとしてもこのままハイそうですかーって帰らせる訳にもいかないんだよねー」

風貌と口調から見るにグループ内のリーダーだろうか。

男はおどけた口調で話すと、取り巻きの男達は汚く笑い俺達との間合いを詰め始める。

「見る限りケガ人はいないように見えるんだけど？」「ああ、ケガした奴って普段から自由奔放な奴でさー君が来る前に一人で病院行っちゃって、ここにはいないんだよ」

「」

「・・・へえ」

会話の最中、楓の身体が僅かに震えたところを見るとどうやらぶつかったのは本当らしい（まあ、あとのケガしたとか病院に行くとかは周りの男達の態度を見る限り完璧に嘘だろうけど）

それにしてもさっきの対応のしかたといい、今のかわしかたといい、男達はこういう状況には慣れてると見える。

まあ何にせよ、まともに対応したところで馬鹿を見るのは目に見えている。

さらに四対一という状況。何度か親衛隊を退けてはいるが、正直なところ、俺は力が強いだけで喧嘩が強い訳ではないので大多数で一斉に襲われればそれに対向する術すべはない。

それをふまえ考えると、万が一状況が悪化し男達が仕掛けて来るような事があれば楓を抱えている以上圧倒的にこちらが不利、というかほぼ負けるだろう。

「ぶつかってケガとはおつれさんも運が無かったねー・・・んじゃ俺達はこれです！」

「なっ！」

そこまで仮定を立てた俺は楓の腕を掴んでいた男の手を払うと走りだす。

一瞬の出来事。

意表をつかれた男達の反応はかなり鈍い。

だが安心は出来ない。

鈍いと言っても動きを僅かに止まらせただけ、このままだと数秒も経たない内に追い付かれるだろう。

なので、俺はもう一つ布石を投げる事にした。

「じゃああとは頼んだぞ！」

『はい！？』

そう言い、肩を叩いたのはさつき俺をナンパしてきた二人組の男達。二人は突然の事に驚き、奇声じみた声を上げたが快く返事を返してくれた、意外と良い奴だったのかもしれない。

「まてまてまて！何が頼んだの！？俺達初対面だよね！？」

「ハツハツハ！二人とも何言ってるんだ、初対面の相手にこんなこと頼む訳無いだろ？じゃああとは頼んだぞ太郎、次郎！」

『誰だよ！？』

ぎゃあぎゃあ騒がしい二人を無視すると楓の手を引き走り出す。

数秒後、後ろの方で男達の怒声やら悲鳴やら聞こえてき気がしたが幻聴だと解釈する事にして、俺達はひたすら走った。

「・・・お、もう大丈夫そうだな」

「っ、ハアハア・・・は、はい」

走ること数分。

足を止め、後ろを振り返ってみると街灯が照らす道には人影は無い。どうやら上手く撒けたみたいだ。

大して疲れてない俺とは逆に楓は胸を押さえ、息を荒くさせていた。

(・・・それにしても)

商店街で会った時も感じたが今の楓は眼を離してしまえば、握っている手を離してしまえば消えてしまいそうなほど儂く、臃げに見えた。

(まさかとは思うけど・・・稟の話信じた・・・とか?)

正直なところ、俺は一つの仮説を除き、楓が稟の話信じるとは思っていないかった。

それは例え第三者を、楓のおじさんを介入させた場合も同様、決して楓は信じないだろうと断言出来る根拠もあった。

ところがどうだ。

今の楓はどこか落ち着きなく、お世辞にも平静を保つてるとは言えない。

(・・・まあ楓が信じたとしてもだ、やっぱ詰めが甘いな馬鹿稟)

楓がここにいるということは大方話に堪えられずに家を飛び出したんだろう。

今頃、あわてふためきながら楓を探す稟の姿が容易に想像出来る。あいつは普段は冷静沈着に物事を進めるくせに人の事になるといつも無鉄砲、猪突猛進になる。

なんとも難儀な性格だ。

まあ・・・

「俺も　　けどな」

「？タクト君何か言いましたか？」

「・・・いやなんでもない、気にするな」

やっと呼吸が落ち着いたので、独り言に反応を示した楓にそう言葉を返すと繋いでいた手を離す。

キョトンとこちらを見る楓の表情はどこも変わった様子はなくいつも通りだった。

「・・・」

「ん・・・タクト君、どうしたんですか？」

ぼんぼんと楓の頭を撫でる。

楓は嫌がったそぶりも見せず俺にされるがままだが、先程弱々しい姿を見たせいか、その姿はどこか虚勢をはり、無理をしているようにも見えた。

「なあ楓、今から時間あるか？」

「えっ？え、えっと　　」

「あつ、やっぱり答えはいいわ、無理矢理連れていくから」

「ふえ！？」

後ろで何か言う楓の言葉を無視し再び楓の手を掴むと、足早に歩き出す。

目指すは楓の家・・・と言いたいが行くのはまだ早い。

馬鹿凩、アフターケアとはしといてやる。

だから、楓が帰ったあとはちゃんと二人で決めろよ？

これから、歩むべき道を。

第十五話 宵闇、明けない心（後書き）

次話、楓編最終回・・・！

第十六話 秋宵、悲劇の終演「前編」(前書き)

皆様、更新遅れて申し訳ありませんでした。

前話の後書きにも書きましたが、当初、この話で楓編を書き纏める筈でしたが予定していた頁数を大幅に上回る事が判明したため、迷った結果、最終的に二話、タクト視点と楓視点に分け、纏めさせて戴く事にしました。

今回はタクト視点から始まります(^ ^)ノ

第十六話 秋宵、悲劇の終演「前編」

アフターケア。

医学用語となるこの言葉を簡単に訳すと治療後や術後の再発防止の為に行う処置の事を言う。

肉体面ならばダメージの程度、身体の部位によって処置や治療法は異なるがダメージが残ってるのであればそこを重点的に治療、リハビリを行えばいい。

体内に疾患がある場合は医薬療法や食事療法など、肉体面には様々な治療法が存在する。

なら目に見えない、精神面はどうだろうか？

精神面でのダメージは肉体的ダメージのように簡単にはいかない。

人により様々なケースが存在し、その治療法も一概には言えないが、精神面を治すとなると最早それは自分との闘いとなると一般論では言われている。

この一般論を聞いた時、俺は「ああ、確かにそれもそうだなー」などと、しみじみと思ったものだ。

以前、某炭酸飲料のCMにて「残り“半分しか無い“と思う？それ

とも“あと半分も有る”と思う?」と言う言葉があった。

この言葉の様に、人は言葉一つにしても様々な捉え方、思考の分岐がある。

人の悪意の無い言葉を勘違いし、気に病む人も居れば同じ言葉に何も感じ無い人も居る。

言ってしまうえば精神面から来た疾患など、殆どが自身の捉え方により起きた問題が大部分を占めているのだ。

それらを踏まえた上で言うと、俺は他人が助言を出し手を引いたところで、最終的にその問題と向き合い和解するも、背を向け一生それを悩み抜くなど決めるのは自分自身、手を差し延べる行為はただ当事者の甘えを許しているだけでその行動は何も意味は為さないと俺は思う。

つまり、有り体に言ってしまうえばどちらを選び、どちらに歩を進めるのかは当事者次第なのだ。

とまあ、普段の俺ならそうばっさり切り捨てるところだが、今回の楓のように嘘や憎しみから来た心の疾患の場合そうも言ってもらえない。

楓の場合、捉え方云々の以前に“稟の嘘”という鍍金で過去を隠蔽し心を護られていた。

だがそれは所詮“鍍金”にしかすぎない。

月日が経つに連れ楓の肉体、精神が成熟する度に心のキャパシティ

は増え“嘘”という鍍金は内側からの膨張により脆く、崩れやすくなった。

・・・いや、実際、それだけならばまだよかった。

以前、楓が先輩と話してる最中に倒れた事があったが、何故楓は倒れた？

結局あの後、理由を聞くころにも保健室に行った時には楓がびんびんしてた為、原因はうやむやになったが、ついこの間亜沙先輩に理由を聞いたところ、倒れる直前まで昔話をしていたそうだった。

ここまで聞いた俺は一つの仮説を立てた。

だが、もしそれを肯定するならばそれは俺が転入してきたという事実が楓に何かしらの影響を与えていたということを裏付けることになる。

そしてそんな事は、冷静に考えればすぐに解る筈だった。

だがそれに気づいたのは、稟が変わり始めて数日経った後。

情けない事に俺は、桜や稟の言い分や主張を一番に考えていた余り、そんな大事な部分に気づけていなかったのだ。

「っ！」

自身の不甲斐無さに唇を噛み締め俺はひたすら歩く。

今も手を繋ぎ俺の後方を歩く楓の態度を見ると、大方の真実を知ってしまったのだろう。

五年間溜め込み、積み重ねた負の感情を楓に認めさせ、向き合わせるということは今まで積み重ねた憎悪や妬み、今まで稟にしてきた所業、そしてそれらを産み出した汚い自分を認めたと同義の意味を持つ。

その反動はどれ程のモノだろうか？

それすら考えず目先の問題だけに捕われ、真実を話すように進めていた過去の自分を殴ってやりたかった。

話した後の反動、後遺症など当事者でない俺がいくら想像したところで解るはずも無いがこれだけは言える。

このままでは楓は、計り知れない自責の念に押し潰され、再び五年前の様に壊れてしまう　と。

例えば楓が自責の念に耐え、今まで通りの日常を送ろうとしても、楓の性格上、稟に対する背徳感や罪悪感に一生悩み、苦しむ事になるのは間違いないだろう。

このままでは、どちらを選んでも悪道に進む・・・そう、

解ってるからこそ、俺は抜け道、打開策を模索することが出来た。

だがその方法を行うのであれば失敗は許されない。

一歩でも道を間違えれば楓は壊れる。

一歩でも道筋を誤れば楓は一生罪に囚われる。

この方法は、そう断言出来る程の荒療治だった。

今の立ち位置を言い換えるならまさしく崖っぷち、もしくは後戻りは出来ない舞台の上といったところか。

冷静に考えても成功率は数パーセントにも及ばないだろう。

(ちっ)

楓の手を引き、ひたすら歩を進める俺は自分らしからぬ情けない考えを切り捨てる。

悪役になるつもりか？偽善だなあ。

頭の中で現実主義者の自分がせせら笑う。

うるせえよ。

鼻から理解してるぞ。所詮この行為は自己満足だなんて事・・・そんな事、鼻から理解してるぞ。

あれだけ問題に関わらないと言っておきながら結局、俺はあいつらを助ける為に駆けずり回ってる。

自分でも思う、なんて滑稽な姿なんだ・・・と。

口からは自嘲したような笑みと共に微かに笑い声が漏れた。

だが、だったらどうしたと言っただ？

そんな事で俺は楓を、大事な奴を見捨てる事は出来ない。
あの日、自身に誓った芯を、歩みを曲げることは出来ない。

万が一失敗し、悪役に成り下がろうがそんなの構わない。
滑稽でもいい。

愚か者だと指を指され、笑われるのも我慢しよう。
偽善者だと罵り笑うのも結構。

笑いたければ笑えばいいさ。

それでも俺はひたすら前を向き、歩き続ける。

それが俺に出来る、あいつらへの感謝の印なのだから。

.....

「ほらよつと」

「あつ……」

冬の冷たい風が肌を刺す。

闇に覆われた公園、街灯と月夜が照らすベンチに俺と楓は座っていた。

このままじつとしているのも寒いだろうと思った俺は、近くの自販機で買ってきたココアを楓に投げる。

不意をつかれた楓は一瞬慌てた様子を見せたものの、なんとか受け止めていた。

手に伝わる温もりに驚いた様子を見せた楓は、慌てたように口を開く。

「あ、あの、私お財布家に置き忘れて……」

「別に気にしなくていい、無理言って振り回してんだからこのぐらいは奢る」

「う……ありがとうございます」

やはり奢られる事に抵抗があつたのか、楓はシュンと肩を落とすと申し訳なさそうに礼を言った。

「……でもなんで公園に来たんですか？」

「いやー……まあなんだ、たまには二人で話したいなーとか思ってたさ、それに久しぶりだろ？この公園に来たのも」

俺何言ってるんだろ、下手くそな言い回し方だな。

楓にそう言い切った後、無理矢理こじつけたような理由に軽く自己嫌悪に陥った。

「一瞬キョトンとした顔を見せた楓は数秒置いた後「そうですね・・・」と同意すると、儂げな表情を見せ、公園を見渡した。

「・・・昔は皆で遊びに来てましたけど最近は来れなかったですから」

「・・・」

「あ、じゃあ、いただきますね」

楓は律儀にもそう言うと、カシュツ、と缶のプルタブを開ける。

その様子を見た俺も自販機で買ってきたコーヒーを開け、口に含んだ。

「それにしても、どうしてこんな時間にあんなところに居たんだ？」

「・・・買い物してたんです。今日お父さんが出張から帰るって連絡があったので・・・」

缶から口を離れた俺は楓に問う。

僅かに間を開け話す楓は、ある程度聞かれる事を予想していたのか、大して動揺した様子も見せず、そう返してきた。

「へえ、さっき財布を持ってないって言わなかったか？」

「っ、それは・・・」

だが所詮は即興で作り出した穴だらけの理由。

綻び、隙間など幾らでもある。

言葉に詰まり、先とは打って変わって明らかな動揺を見せた楓に俺は畳み掛ける様に話す。

「それに、さっきは気づかなかったがそんな薄着で買物か？そんな格好でうろろろしてれば誘ってると思われても仕方ないぞ？」

「あ、あの、それは」

この時期には合わない、楓が着ている薄手のカーディガン、明らかに部屋着であろう格好を指摘すると、楓は視線を泳がせ、逃げようと理由を模索していた。

だがそうはさせない。

「楓」

「・・・えっ？」

俺は俯きかけた楓の頬に手を当てると、無理矢理俺の方へと向かせる。

向き合った瞬間、驚きのあまり楓の眼は大きく見開く。

それもそうだ。

結果的に俺と楓との距離は十数センチにも満たない。

片方が僅かにでも動けば互いの唇が触れ合う距離、驚かないほうが可ましいというものだ。

「タクト・・・君？」

(・・・ああ、よかった)

だがそんな状況の中、俺は人知れず安堵した。

もし楓が向き合った瞬間、時間を置いた今でも羞恥のあまり顔を朱く染めたならば、それはまだ楓の心に余裕があるということになる。だとしたら、これから起こす行動に支障が出る可能性がある。

最早手の無い状況の中、楓の反応にそれはないと判断した俺は、心の中で溜め息を吐いた。

(・・・やっぱり、俺は最低だ)

楓に余裕が無いと解って安堵する自分に吐き気がする。

助ける為だと建前を立て、いくら正当化しようが結果的に俺は動揺を誘った上で楓の本音を聞き出すという汚い手をおうとしている。だがこうする事でしか俺は楓を・・・稟を助けられない。

自分の不甲斐無さに再び歯を食いしつた俺は、どちらかが動けば触れてしまいそうな距離の中、ゆっくりと口を開いた。

「なあ楓・・・」

「お前何か隠してないか？」

息を呑む音が聞こえる。

月明かりに照らされた楓の瞳が驚きのあまり大きく揺れたのを俺は見た。

「　　っ・・・あ、あの」
「・・・・・・・・」

ズキズキと胸が痛む。

今にも泣き出しそうなほど顔を歪め、必死に何かを言おうとしている楓の姿に胸には罪悪感が募る。

楓の頬から手を離す。

すると楓は視線を地面に落とし、ココアの缶を強く握り顔を曇らせた。

暫し間、静寂が公園を支配する。

ベンチに座り、苦しそうに顔を歪める楓の様子を見るときつと迷っているのだろう、俺に話そうか、話すまいか・・・。

「　　っ」

やがて決意を固めたのか、楓はギョツと唇を噛み息を少し吐くと、意を決したように口を開いた。

「タクト君は知ってますか・・・五年前の事故の事・・・」

「ああ、断片的にだけだな、桜から聞いた」

「じゃあ・・・私と稟君の関係も聞きましたよね？」

「まあ・・・な」

重苦しさの中、俺は素っ気なく答える。

答えを聞いた楓は何かに耐えるようにギョツと唇を噛むと、絞り出すような声色で俺に言った。

「私、今まで稟君がお母さん達に電話して、旅行から無理矢理呼び戻そうとしたからお母さんは・・・稟君の両親は亡くなったんだと思ってました」

「・・・」

「・・・でも、今日お父さんから言われました・・・」

ホントは・・・ホントはあの日、稟君じゃなくてお父さんがお母さんに電話したんだって・・・!」

「・・・そうか」

ギョツとスカートを掴み自白する楓に俺は淡々と返事を返す。

「・・・っ、驚かないんですね」

「まあ・・・知ってた事だしな」

今更隠しても仕方ない、そう思った俺は、楓の疑問に軽く答えると、楓の瞳は動揺のあまり大きく見開かれた。

「なんで・・・なんで言ってくれなかつたんですか・・・」

「言ったところで何になるんだ？なら聞くが、もし俺が本当の事を楓に告げたとしてだ、お前はそれを信じたのか？違うだろ？」

「っ、それは・・・」

反論出来ないのか、口ごもり俯く。
その様子を見た俺は宥めるように言った。

「楓、俺を責めたい気持ちは分かる、ただどな、自分の事を棚に上げてどうする？」

あの時もつと速く行動していれば。

あの時もつと速く話を聞いていればなど、いくら過去を悔やもうがそれは所詮“もしもそうならば”、所謂“if”を仮定したモノでしかない。

現実問題にそれを引き出し縊り、更に押し付けるのはただ自分が逃げただけの言い訳にしか過ぎない。

「……ごめんなさい」

「……いや、俺も言いすぎた」

一言謝罪すると、俺は話を切るようにベンチから立ち上がると残りのコーヒーを一気に煽る。

缶に入ったコーヒーはすっかり冷め、お世辞にも美味しいとは言えないが、釣られて缶に口をつける楓を見ると、どうやら空気を変える事には成功したらしい。

俺は一息吐くと、空になった缶を見つめる。

「なあ楓」

「は、はい」

「・・・今からさ、ちつと無粋な質問するけどいいか？」
「えっ？あつ、はい」

突然の質問に楓は若干戸惑った様子も見せたが、しつかりとそう言葉を返した。

答えを聞いた俺は、手元の缶を弄り、更に問い掛けた。

「もしかしたら・・・っていうか、確実に気分害するけどいいか？」
それは線引き。

もしこの問い掛けに楓が了承を返すならば俺は容赦無く、躊躇い無く楓を傷付ける一言を放つ。

これが俺に出来る最大限の譲歩、俺はそんな意味を込めた言葉を楓に投げ掛けた。

言葉の真意に気づいたのか、それとも俺の真剣な雰囲気感化されたのか、楓はしばらく迷ったような様子を見せたが決意が固まったように真っ直ぐ俺を見ると口を開いた。

「・・・大丈夫です」
「ん・・・分かった、じゃあさ、もし心当たりが無いなら無視してくれてもいいからな」

楓の了承を得たところで俺は気分を切り替えるように深く息を吐くと、数メートル離れたくずかごに空き缶を投げ入れる。

カラン・・・。

耳に缶の乾いた音が響く。

同時に俺は視線を楓へと向けると一字一句、決して楓が聞き漏らすことの無いようにハッキリと尋ねた。

「楓・・・」

お前、本当に稟を憎んでいたのか？」

「えっ？」

コッ・・・。

鈍い音とも言えぬ、不思議な音が耳に響く。

音の出所は楓が落としたココアの缶。

まだ中身が入っていたのか、口元からは液体が流れ出していた。

「な、何を・・・何を言っつて　「楓が稟を憎んでるってことはあいつから聞いてたし、今の話でも理解したつもりだ・・・ただ腑に落ちないんだよ。稟の話聞く限り、楓は小学生の頃は稟に直接手を出してたんだろ、ならなんで中等部に上がってからそれを止めたんだ？」

「　っ、それは・・・そんな事しなくてもいいと思ったから

「嘘だな、本当に楓が憎いと思ってるならそんな事、有り得ない」

動揺する楓の言葉を遮る様に、俺は確信を持った声色で、一字一句、

ハッキリとそう続けた。

だが俺の言い分に不満が有るのか、楓は言葉を濁しつつも、反論してきた。

「・・・っ、なんでそう言い切れるんですか、もしかしたら・・・もしかしたら稟君にその・・・いろいろするのを止めたのはその行為が無意味だと気づいたからかもしれない・・・もしくは稟君を無視しようとしての行動って事も有り得るんじゃないですか？」

楓が言葉を濁したのは、きっと今までしてきた自分の行為に背徳感が有るからだろう。

楓の言葉を聞き、数秒間考えた後、言葉を返した。

「確かに、その可能性もある・・・でもな、それまで恨んで攻撃対象にしてきた奴を完全に無視するような事が器用な真似が楓に出来るか？それこそまだ和解も出来てない、遺恨が残った状況でだ」

「っ、それは・・・で、でも出来るかもしれないじゃないですか！」

「・・・じゃあ問題だ楓」

一歩も退かぬ楓の言い分。

心の中で軽く溜め息を吐いた俺は人差し指を軽く立て、楓に尋ねた。

「あるところに一人の子供が居ました、その子は嬉しい事、楽しい声があれば思いつ切りはしゃぎ、稀に声を上げ嬉しさをアピールするような元気な奴だったそうだ、けどそいつが大きく変わった時、嬉しい事、楽しい事が有ってもそいつは声を上げ嬉しさをアピールすること、はしゃぐ事もしませんでしたとさ・・・それは何故だと思っ？」

「・・・恥ずかしかったから・・・ですか？」

「ん、半分正解、半分不正解だな。正解は感情を隠すのが上手く為

つたから・・・だ。人つて不思議なもんでさ、精神や身体が成熟するに連れて、嬉しさや欲求、そんな明るい感情には脳が知らず知らずの内にストップパーを掛けるんだよ」

大人になると子供の様に感情を表に出すことは滅多にない。

それは大人になるに連れ、歳を重ねるに連れ、精神、感情の起伏をある程度コントロールすることが出来るからだ。

「だけど怒り、妬み、憎しみ、そんな負の感情に脳はストップパーを掛けない、いや、掛けられないんだよ・・・何故だか解るか？」

膝を折りベンチに座る楓の目線まで屈む。

すると楓は小さく「・・・分かりません」と呟くと俺と視線を合わせようとせず、逃げるように俯いた。

楓の反応をある程度予想していた俺は構わず続ける。

「負の感情なんて物は人にとって毒でしかないからだ。ほら、よくストレスで胃腸を痛めたり、身体を壊す奴が居るだろ？そんな身体の負担に為るようなもの発散せずに溜め込めば身体、心はどうなるか・・・流石に想像つくだろ？」

「　　っ、はい・・・」

そんな感情を貯めてしまえば人の身体は、心は簡単に壊れてしまう。楓もその事を理解したのか、ゆっくりと頷いた。

「もし、脳みそがそんな感情にもストップパーを掛けたりでもしたらその瞬間、世界は自殺志願者、鬱病患者のオンパレードだろうな」

ハハツと、軽く笑いながら俺はそんな重い事実を告げるとゆっくりと楓の方へと向く。

「さてと・・・ここまで言えばもう解るだろ楓」「

先程までの空気を払うように声色、表情を真剣なモノに変える。

今から言おうとしている事が解つたのか楓は顔を俯かせたまま身体をビクリと震わせる。

「本当に稟が憎いなら俺が転入する約一年半の間、お前、どうやってそんな感情を抑えてたんだ？」

「っ、それは・・・」「ああ、先に言っておくが、さっきみたく見てなかった、意識してなかった、無意味だと思った、なんて答えは無しだ。もし今までがそうだとしても俺はこの一ヶ月稟達と行動してたんだ、桜や先輩を無理矢理除けたとしても俺がいる時点で嫌でも目につくだろ」

「あ・・・っ、」

呻くように声を上げる楓。

その態度にある程度確信を持った俺は、逃げ道を全て塞ぎ、楓に最後の質問を投げ掛けた。

「もう一度聞くぞ楓、お前、本当にあいつを憎んでいたのか？」
「っ!..!」

楓は俺の言葉に心当たりが有るのか、小さく声を上げと何かに怯えたようにカタカタと震えた。

　　「いますぐ抱きしめ不安を和らげてやりたい、何時もみたく、楓を撫で安心させてやりたい。」

自分が追い詰めておきながらそんな甘く、虫のよい考えが頭を過ぎる。

俺はそれらを一蹴すると、ひたすら楓の答えを待った。

「私は・・・」

やがて楓はポツリと、全神経を集中しなければ聞き取れない程、小さな声を零した。

「　　私は嘘をついてたんです」

「・・・嘘？」

聞き返すと楓はゆっくりと頷く。

なんの脈絡もなく言われた言葉に俺は頭に疑問詞を浮かべたが次の楓の言葉によりそれは解決した。

「私、ホントは・・・」

稟君の嘘に気づいてたんです……」

風の音が辺り一帯を支配する。

答えを聞いた俺は楓を抱きしめると小さく囁いた。

ありがとう……と。

永い夢は終わりを告げる。

楓が放ったそれは五年にも及ぶ泡沫の夢を壊す言葉。

そして、それは奇しくも、俺が選んだ選択肢の中で一番待ち望んでいた言葉だった。

第十六話 秋宵、悲劇の終演 「後編」 (前書き)

今回は一人称、三人称が多いのでスペースを空けてみました。

第十六話 秋宵、悲劇の終演 「後編」

芙蓉 楓。

才色兼備、頭脳明晰、性格良好など評価を受け、学園では親衛隊を結成させる程の魅力を持つ彼女。

だが幼い頃の彼女は同じ年の子どもころか、何度か会ったことのある隣人と話す時でさえ尻込みしてしまうような内気で、臆病な少女だった。

そんな彼女を両親はいたく心配し、彼女に寂しい思いをさせないよう優しく、悪く言えば過保護に育てた。

結果、彼女の臆病な性格は進行し、世間一般的に言うお母さんっ子となってしまうたのも仕方がないというものだろう。

保育園、幼稚園と月日は流れ彼女は成長していく。だがいくらず月日が経とうと彼女の性格、本質が変わることは無く、彼女の周りには友達と呼べる人は一人も居なかった。

このままではいけない。

そんな彼女を両親はいたく心配し、何度かアドバイスを試みたものの、肝心の彼女は聞く耳も持たない。

こうなってしまった原因が自分達に有ると理解していた両親はそれ以上強く言うことが出来ず仕方ないと諦め、そんな両親の態度に彼女はこれで良いのだと勘違いし日々を過ごして行った。

そんな彼女にある日、転機が訪れる。

きつかけはある休日、家に両親の友人が遊びに来ると連絡が入った事だった。人見知りの激しい彼女だが、両親からその知らせを聞いた時、楓は特に驚いた様子も見せなかった。

それもそのはず、その人は何度か遊びに来た事があり、彼女とも面識があったからだ。

きつといつものように夫婦二人で来て、夕飯を一緒に食べ、いつものように帰って行くのだろう。

そう思っていた。

だが当日、インターホンを鳴らされ出迎えた瞬間、彼女の予想は外れる事になる。

施錠していた鍵を回し、いつものように“夫婦”を出迎える。

だが彼女の目の前に現れたのは一組の夫婦、そして自身に笑顔を向ける男の子の姿だった。

予想と反する事態に、彼女の思考は固まる。

歳は同じくらい、今まで見たことのない顔、そして自分よりも背が高い。

硬直が溶けた後、彼女は少年を一瞥し僅か数秒でそう判断すると、すぐ脇に立っていた両親の後ろに隠れてしまう。

初対面、更に一言も言葉を交わしていない状況。

楓の不躰極まりない態度、対応に男の子のは気を悪くしたように唇を尖らせ、お返しと言わんばかりに勢いよくそっぽを向いた。

玄関先、険悪な空気が漂う中、楓の両親は人知れずため息をつき、夫妻はそんな二人に苦笑いを向けた。

種を明かすと、楓の両親は夫妻の他に彼等の子供が来るということを知っていたのだ。

だがそう分かっていたいながらも二人は夫婦しか来ないと楓に伝えた。

何故？そう聞かれれば二人は口を揃えてこう言うだろう。

娘のためだ・・・と。

人見知りが激しいくせに人一倍寂しがり屋な楓。

保育園、幼稚園ではまだ自分達が味方となり楓を支えてやる事が出来る。だが小学、中学へと上がるに連れそれは困難となり、このままでは楓は学校で孤立してしまうだろう。

そう考えた時、今の楓に必要なのは手を取り、引っ張ってくれるような友達だ。

そんな結論をだしたものの自分達の周りにはそんな人は居ない。

そんな時二人の元に届いた朗報。自分達の友人が子供を連れて来ると言うのではないか。

幸にも夫妻の子供は楓と同年だと聞いている。もしかしたら楓と友達に為ってくれるかもしれない。

だがこの事を直接、楓に伝えれば彼女の性格上、夫妻が帰るまで部屋に閉じこもってしまうだろう。

そう考えた両親は、あえて楓には伝えなかった。

会ってしまったのは楓も大人しくしているだろう。

そんな淡い期待を込め待ちに待った当日、楓の両親の思惑とは反し初対面だというのに不躰極まりない態度を取った楓。

自分達の様に歳を喰ってるならまだしも年端もいかぬ子供にそんな対応を取ってしまったえば最早友達云々どころではない。

またダメか・・・

そう諦め苦笑いを浮かべた時、思いもよらぬことが起きた。

すつ・・・と遠慮がちに、目の前に差し出された手の平。

自分達の手よりも一回り以上小さく、だが優しさに溢れた手の平は誰のものでもない、男の子の手だった。

楓の両親は向けられた手に驚く。

だがそれでも、当事者である楓ほどではないだろう。

今まで私と関わってきた人はみんな気を悪くし自分から離れて行った。

なのに・・・なのに何故この人はこんなにも優しい笑みを私に向け、手を差し延べて来るのだろうか？

今まで経験したことのない初めての対応に戸惑い、困惑する楓。

両親の後ろに隠れたまま、そっと視線を送ってみる。

目に映るのは自分の気も知らず、未だ笑みを向けてくる男の子の姿。

真っ直ぐ送られる視線。

楓は気恥ずかしさから思わず視線を右往左往させる。

そして数分経った後、彼女は意を決した様に前へと進み出ると、両親が見守る中ゆっくりと差し出された手を握る。

手を取った瞬間、男の子が零した嬉しそうな顔に、楓は照れくさそうにはにかんだ笑みを返した。

これが芙蓉楓と、後に彼女を支える存在となる土見凜との出会いだった。

.....

お父さんとタクト君から叱咤され思い出せた、遠い昔の大切な記

憶。

内気で臆病、両親に頼ることしか出来なかった私が初めて自分の足で選んだ大切な道筋。

だけど私はその大切な道を自らの手で壊した。

稟君が作った虚像を何の疑いも無く信じてしまった。

嘘で塗り固められた虚実を鵜呑みにし、稟君に取り返しのないことをしてしまった。

何故気づけなかった？ それは私が逃げていたから。

何故今まで過去と向き合えなかった？ それは私が卑怯だから。

私の頭の中はネガティブな考えで埋め尽くされる。

前を向こうと努めているのに思考は後ろ向きなまま。

足取りは重く、ズルズルと地に引きずり込まれそうになる。

・・・私は卑怯だ。 お母さんがいなくなったからと託^{かこ}けて逃げました。

お母さんがいなくなったのは自分のせいだと認めたくなかったから、私は稟君に全てを押し付け現実から目を背けてしまった。

「・・・う」

不意に目頭に熱いものが込み上げて来る。

真っ暗だ。

前を向く度に重圧が、心の闇が私を押し潰そうと迫って来る。

解ってる。

いくら懺悔し罪と向き合おうがいくら自らの非を責め後悔しても
現実は何も変わらないなんてことは。

今の私に、泣く資格など無いなんてことは・・・でも！

「おーいかえでー、下ばかり見てるとデコピンするぞ？」

「しっ、下にゃんて見てないですよ!？」

・・・あつ。

先までの暗い感情が吹き飛び、つい反射的に顔を上げ額を守るように手を当ててしまう。

前方に視線を送るとそこには稟君や桜ちゃんをからかう時に見せるような無邪気で、僅かに嗜虐心を宿した笑みを向けるタクト君の姿があった。

街頭と月明かりに照らされ笑うその姿は何時もよりも意地悪見え、そしていつも通りのタクト君の笑顔は切羽詰まっていた私の心に安心感を与えてくれた。

「まあいいや、それよりも楓ん家って確かここら辺だったよな」

「そう……ですね。あつ、でもここからだあと五分くらい掛かりますよ?。」

きよろきよろと辺りを見渡しそう伝えると、タクト君は軽く頷くと、差し掛かった丁字路を左に曲がり歩き始めた。

……あれ?

「あのタクト君、そっちに行く商店街に戻ってしまいますよ?。」

無言のまま踵を返すタクト君。

すれ違いざまに見せたタクトの恥ずかしそうな顔。

その表情があまりにも可笑しく、クスリと小さく笑った私は少し軽くなった心を胸にタクト君の後ろ姿を追い掛けた。

「私ホントは……稟君の嘘に気づいてたんです」

公園での告白。

タクト君の言葉に追い詰められた私は積み重ねてきた罪を認めた。

ただ白状するのならば私自身何時からその嘘に気付いていたのか、そしてなぜその時、一度も自覚してさえもいなかった事実を口に出せたのか解らない。

だけどお父さんから事実を告げられた時、タクト君の話をすんなりと理解し受け入れた事を考えると、きっと私は無意識の内に理解していたのだろう。

そしてタクト君の言葉で再び現実と向き合った私の心は、押し潰されそうなほどの重圧を感じていた。

いつ侮蔑が込められた視線を向けられるのか。
いつタクト君から罵声を浴びせられるのか。

僅かな沈黙が続く中、心の中ではそんな思いから来る恐怖感、そして今まで積み重ねてきたの諸行から来る自己嫌悪が入り混じり心を圧迫する。

私は堪えるかのように膝の上で拳を握る。

吐き気さえ覚える真っ黒な感情。

だがそんな思惑とは反し、タクト君は恐怖と戦っていた私を優しく抱きしめ、安心させるようにゆっくりと頭を撫でてくれた。
そしてあるうことにも、こんな私に向かい“ありがとう”とも囁いてくれた。

本来責められる筈である罪を責めず、向き合った事を褒めてくれた。

そう理解した瞬間、不謹慎だが私は全てを許され救われたような気がした。

それ程甘美で心地好く、優しい囁き。

だが時間が経ち冷静になった時、私は気づく。

私にはそれを享受し、安心する資格など無いんだと。

追い詰められるまで自白出来なかった。

言い換えてしまえば、追い詰められなければ今までの関係を、愚かな諸行を続けていたと肯定することになる。

自らの足で道を選ばなかった。

大切だと思っていた人を信じるが出来なかった。

現実を黙視し、つじつまの合わない過去を信じ、生きようとしていた。

そんな私に一体何が出来るのだろうか？

稟君は・・・どうしたら私を許してくれるのだろうか？

「おい」

沈みかけた思考の海の中、突然聞こえてきた低い声にいつの間にか落としていた視線を上げ前を見る。

そこには瞳を細め、苛立ちを隠さない態度を見えるタクト君の姿があった。

「お前いい加減にしろよ？さっきから一人でうじうじ悩んで一人で死にそうな顔して・・・そんなに自分を責めたいなら家帰ってから一人でやれ」

心底鬱陶しいと言わんばかりの声色と口調。

タクト君は低い声のまま、ばっさりとそう言い切った。

「お前が何考えてるのかは知らないし知る気も無い。けどなあ、お前がそんな顔してたら稟が落ち込むだろうが」

「……稟君は、落ち込んだりしませんよ」

「……あつ？」

力無くそう告げるとタクト君は気分を害したようにぶっきらぼうな返事を寄越し、睨みを効かせた視線を送ってくる。

私は逃げるように俯き喉に込み上げて来るものを必死に押し込むと、タクト君に向かい全てを吐き出した。

「稟君には酷いことをしました。五年間もの間、稟君との間を取り持とうとしてくれたお父さんとも向き合いませんでした。桜ちゃん・亜沙先輩やタクト君にも嘘をつきました……もう……愛想つかれてもおかしくないです」

何度自問し、何度道を外れ、何度この答えにたどり着いたのだろう。

堂々巡りの思考螺旋。

何を考えても前には進めず同じところで足踏みばかりしている。

そんな自分がとても腹ただしく、情けなかった。

はぁ……。

タクト君の小さなため息が耳に届く。

そして面倒臭そうにガシガシと頭を掻くと、「あのなあ」と呆れたような口調で話し始めた。

「稟やお前の親父さんならともかく、俺達の事をそこまで気に病む必要は無いだろうが」

「で、でも」

「嘘をついた、そんな事実があつたとしてもそれは無意識、俺達に對して悪意はなかつたし楓自身自覚すらなかつた・・・誰も気にしてないからそんな事いちいち気にすんな」

荒く並べられた言葉、そして齒に衣着せぬ物言いは鋭利な刃物のように私の心に突き刺さる。

タクト君は困つたような笑みを浮かべると先へと歩を進める。

だが反対に、私はその場から一步も動けずにいた。

確かにタクト君のように物事がある程度軽く考え、もっと簡単に捉えることが出来たのなら何時までも悩むこともない。

そしてもしそれが出来たのなら、未だ胸に重くのしかかっているこの重圧も比較的軽くなるのだろう。

だけど私は、タクト君のように軽く考えることがどうしても出来ない。

大切なお友達だから、こんな私にも親身になり世話をやいてくれた先輩だからこそ簡単に考えたくない、割り切るような真似はしたくない、いや出来ない。

情けなくて、不甲斐なくて、我が儘のまま。

幼い頃と何一つとして変わってない、私は・・・弱々しいままだ。

「　　つく」

塞ぎ止めていた感情が溢れ出す。
誘発するように溢れ、頬を流れる涙はぼろぼろと地面に波紋を広げていく。

きつと嗚咽が聞こえたのだろう。

歩みを止め、何事かと振り返るタクト君は私の姿を見るとギクリ
！と、そんな擬音が聞こえて来そうな程身体をのけ反らせた。

「　　つくたく、なんで泣くんだよ」

「　　な、泣いてなんかいません」

涙を拭いながらの言葉に何の説得力も無いだろう。

「　　あゝはいはいそうですかー」

私の強がりタクト君は呆れたように笑うと頬を流れる涙を優しく拭ってくれた。

まるで小さい子をあやす様な仕種。

こんなにも迷惑ばかりかけている私にタクト君は何一つ変わらず接してくれる。

それが堪らなく嬉しかった。

「お前はいつつもそうだよな、一人で溜め込んで我慢して・・・何でもつと本音を話さないんだよ」

「そんなことないです・・・ちゃんと話してますよ」

不意を衝かれ一瞬言葉に詰まる。

咄嗟にそう返したものの、心臓は全力疾走したかのように早鐘を打ち、そして意思とは関係なく焦燥感にも似た何か体が中を駆け巡る。

言葉とは裏腹に身体は正直だった。

そしてタクト君はそれすらも見透かしたように軽く笑う。

「うそつけ、公園を出てからずっと視線を落としたまま。口を開いたかと思えば自分は許されない事をしたとか愛想をつかれてもおかしくないなんだの上辺のことしか言わない・・・お前、気付いてないかもしれないがこれからの事を一言も口にしてないんだぞ？」

「それは・・・」

「まあ、さっきも言ったが俺はお前が何を考えてるのか知る気も無いし知りたいたとも思わない。これはお前の問題だしお前の性格を考えるとむやみやたらに助言したところで悶々と考え込むだけだしな・・・けどな」

言いたい事をあらかた言い終えたのか。

タクト君はふうと一息つくと、にやりと、不敵に笑った。

「いくら悩んだって、あいつらの前じゃ考えるだけ無駄だと思っぞぞ？」

「えっ？」

私の聞き間違いなのかな？

一瞬、言葉の意味が上手く理解出来なかった私は反射的に聞き返

す。

「考えてもみる。桜、あいつはあいつなりにお前の親父さんの様に二人の仲を取り持とうとこの五年間頑張った。亜沙先輩もそうだ、あの人は幼なじみでもましてや恋人でもない、所詮他人でしかなかった稟と家族同然に接してあいつを元気付けようとした」

異眼の両目を優しく細めタクト君は嬉しそうに語る。

「稟を見てみる。あいつは楓を助けたい、そんな単純な想いを五年間も貫き通してる程の底抜けのお人よしだぞ？親切なんて言葉さえ生温い、そんな希代稀に見るようなお人よしな奴らがお前の悩んでる姿を見たいなんて思うか？苦しそうな顔を見たいなんて思うか？・・・それともお前はあいつらがそれを望むような冷たい奴らだと思ってるのか？」

「っ！そんなわけないじゃないですか！」

稟君達の優しさは表面だけのものじゃない。

そんな事する訳無いじゃないか。

夜更け、住宅街の中だということも忘れ、力の限り声を張り上げた。

だがタクト君は冷静に、予想通りと言わんばかりに笑う。

「ほらな？あいつらの優しさは上辺だけのモノじゃない、そんなことお前が一番理解してるじゃないか、

だったら、いつまでもそんな顔してうじうじしてんじゃねえよ。

自分が今出来ることだけを考えてる、本音を、気持ちをあいつにぶつけてみるよ・・・隠してるだけじゃ現状は、お前らの関係は何一つとして変わらないぞ？」

「タクト君・・・」

ジツと、真っ直ぐな視線を送りタクト君は告げる。

同時にギョツとした圧迫感が心を襲い、思わず手を胸に当てる。

本当に・・・本当にいいのだろうか。

こんな私がもう一度・・・もう一度あの頃のように笑い合いたいと願っても。

もう一度・・・恋をしたいと願っても。

虫の良い願望と解つていながらも葛藤し、揺れ動く心。

不意にコツリと、額に軽い衝撃が走る。

「　　難しく考えんな、それがお前の純粋な想いなんだろう？　　だったら、その気持ちに従えばいいじゃないか」

ぼんぼんと、タクト君は私の頭を軽く撫でると、優しく微笑んだ。

熱い。

心から湯水のように沸き上がる暖かな感情が全身を駆け巡る。

信じてやれよ。

タクト君の言葉の裏にはそんな意味合いが込められているのだらう。

自身の価値観を押し付けず、遠回しな言い方で励まそうとしてくれる。

それは意地っ張りで不器用、口下手で恥ずかしがり屋なタクト君らしいアドバイス。

そう理解した瞬間、目尻からは暖かい涙が溢れ、零れ落ちそうになる。

「おっと、迎えが来たみたいだな」

「え？」

必死に涙を堪えていると唐突に耳に届くタクト君の声。
聞き間違いかと思い、私は顔をゆっくりと上げる。

「　　っそんな・・・なんで　　」

瞳に映ったその姿にドクリと心臓が跳びはねる。

まさか私を探していたの？この寒空の下？・・・家を飛び出してから何時間経った？

それになんで・・・なんであんな酷いことをした私を探してくれるの？

「ハハツ、やっぱり馬鹿だ」

笑いながら口悪くそう言うタクト君。

ただど声色はとても優しく穏やか、そしてありったけの嬉しさを含めているように感じた。

私達が送る視線の先。

そこには額に汗を滲ませ、ゼエゼエと荒い吐息を吐く稟君の姿があった。

「はあはあ・・・つく、うるせえよ」

「おつとつと、聞こえてたか」

「お前、絶つ対に確信犯だろ？」

凄みを効かせた稟君に対し、タクト君は態度を変えることなくケラケラと笑う。

一通り笑ったタクト君はふう、と一息つく。

「じゃ、お邪魔虫は退散しようかな」

「・・・帰り道、わかるのか？」

「さあ？まあなんとかなるだろ・・・っていうか今はそんなこと気にすんなよ馬鹿野郎」

「うえ？」

稟君は素っ頓狂な返事を返すと、一瞬、何を言われているのか解らないようにキョトンとした表情を見せる。

だが次の瞬間、言葉の意味を汲み取ったように顔を引き締め力強

く頷く。

その答えに満足したのか、タクト君は軽く笑い手を振るとそのまま私達に何も言わず帰路へとついた。

そして姿が見えなくなった途端、私達の間を包み込む静寂。

まず最初に何を伝えればいいのか。

どう切り出し、伝えたらいいのか。

いざ二人きりになると緊張、そして気分が高揚してしまいそれすらも上手く考えることが出来ない。

視線を落としもじもじと手を擦り考え込んでいる最中、唐突にそれは起きた。

「ごめん」

「……えっ？」

突然の謝罪。

あまりにも突拍子の無い稟君の行動に頭の中が真っ白になる。

「俺、馬鹿だった。楓の気持ちも考えないで勝手に突っ走って、勝手に嘘ついて……でもあの時はそれが最良の方法だと思ってた」

だが私の心境を知らない稟君はお構いなしに言葉を綴る。
声色には悔しさ、悲しみ等の様々な負の感情を宿らせ、そして頭こぶを垂れたその姿はまるで懺悔するかのように見えた。

どうして・・・どうしてどうして？

沸き上がる様々な感情が私の心をぐちゃぐちゃに掻き乱す。

なぜ稟君は私に謝るの？なぜ稟君がそんな顔をするの？悪いのは私なのに、稟君に落ち度など無いのに・・・なぜ稟君は今にも泣き出してしまいそうなほどに顔を歪めるの？

(・・・タクト君の言う通りだったんだ)

未だ綴られる稟君の言葉を聞きつつ、私は人知れず濁いた笑みを浮かべた。

稟君は今までの事を気にした様子も見せず、こんな私にも優しく接してくれる。

タクト君の言う通り、稟君は本当に底抜けのお人よしで誰よりも優しく、何よりも温かくて・・・思わず優しさに溺れてしまいうくなる。

でも、このままじゃダメだ。

「稟君、ごめん・・・なさい」

「っ、かえ　「すべて私が悪いんです!」

私は綴られる稟君の言葉を止めるため、そして感極まったこの感情を隠すため稟君の胸に飛び込み、謝罪の言葉を述べる。

そして何か言おうとする稟君の言葉を遮り私の心情を、本音を伝えた。

「稟君に落ち度なんて何一つありません・・・お母さんが・・・稟君の両親が亡くなったのは私の責任なんです、責められるのは私の方なんですよ?・・・稟君は、潰れかけた私を助けてくれました、だから・・・っ、だから稟君がそんな顔をする必要なんてないんです・・・稟君、私は　「っ、もういい!・・・もういいから」

稟君は苦しそうな顔を見せると私の身体をギュッと抱き寄せる。

何がいいのだろう。

私はありのままの事実を言っただけなのに、本音を伝えたただけなのに稟君は庇うような仕種を見せる。

・・・ああ、本当に

「稟君は・・・優し過ぎますよ」

暖かな体温、心強い言葉。

それらを感じると同時にじわりじわりと心を侵食していく安心感と幸福感。

甘美な優しさを堪えるように、私は稟君の胸回りに回した手に力を入れた。

「なんで・・・なんで稟君は私なんかにも優しくするんですか、私は稟君に沢山酷いことをしてきました、なのになんで・・・」

人の心とは醜いものだ。

一回の嘘や行為。

例えそれが自らの行い、あるいは他人からの所業だったとしても、一度目の当たりにしてしまえば心の奥深くに疑心が芽生える。

人には表があれば裏もある。

私はもう夢見る子供ではない。

そんなことはとつくの昔に・・・憎いという醜い感情を隠して来た時点で理解したつもりだった。

だけど稟君は違う。

いつも当たり前前の事を当たり前に行く。

本音で他人と向き合い自分が見たいと思ったことをする。

泣き声や予迷言、恨み言は一切言わず真っ直ぐに行動する。

優しさ、それが稟君の本質だと理解したつもりだ。

でも・・・だからこそ小さな疑心が芽生える。

「私は稟君が憎かった！お母さんを奪った稟君が大嫌いでした！だからいっぱい酷いことをしてもそれが当たり前だと思ってました！でも

っ、でも稟君は嘘をついた時から分かってましたよね？私から憎まれるなんてことは・・・だったら、だったらなんでこんな事したんですか！」

「楓・・・」

ボロボロと涙を流し、私は声を張り上げる。

稟君はそう分かってても尚わざと傷付くような真似をして、私なんかの為に悪役に回るような行為を取った。

それが稟君だと頭では理解出来ても心は受理してくれなかった。

「こんな事しても見返りなんて何も無い、ただ傷付くだけなのになんで　っ、なんで私を助けるような真似をしたんですか！　っ、稟君は馬鹿です・・・私は！・・・私は稟君が傷付く姿なんて見たくありません！稟君には笑って欲しかった、いつも明るい姿を見せたい欲しかったです」

嘘に寄り掛かっていた。

今の事態に手を下したのは誰でもないこの私自身なのになんて自分勝手な言葉なんだろう。

でも・・・それでも言わずにはいられなかった。

これが嘘、偽りの無い私の本音。

嫌悪感や蟠り、すべて払った時に浮かび上がった私の願いなのだから。

「　　つ、ハハツ、また言われたな・・・」

自重気味の笑い声を漏らした稟君は未だ泣く私を優しく抱き込む。

「みんなから言われたよ、馬鹿だとかもつと人の気持ちを考えてとかいろいろ・・・でも本当にそうだった、あの時もつとちゃんと考えてれば違う方法が見つかったのかもしれない、楓が、みんなが悲しまない結末もあつたのかもしれない・・・本当にごめん」

嗚咽を堪えているため声が出ない。

謝らないで下さい。

そう伝えるため私は稟君の胸元で首を横に振る。

「・・・でもさ、見返りはちゃんとあつたよ」

髪に触れる稟君の手。

大きく、そして確かな温もりを持ったそれは冷えきつた心を溶かしていく。

「　　楓が、笑ってくれた」

「りん・・・君」

「楓が元気になってくれた、例えそれが嘘でも、例えそれが身を削る行いから来たものだったとしても・・・それだけで、俺にとつては十分な見返りだったよ」

私を抱き留めたまま稟君は優しく告げる。

その言葉は疑う事しか出来ないでいた心の枷を外していく。

「稟君、私は・・・」

震える声。

声帯を震わせるのは恐怖、喜び、不安といった感情。

それらを飲み込むようにゴクリと喉を鳴らすと私は稟君の瞳を見ながら、ありったけの勇気と望みを込め伝えた。

「私は・・・私は稟君に許されても・・・いいんですか・・・？」

その言葉を聞き稟君は優しく、穏やかに笑う。

「許すも何も・・・俺は楓から許しを乞われるようなことは何もしてないよ・・・」

「っ」
「だからさ楓・・・笑ってくれよ。俺はお前の笑顔が大好きなんだから」

「」

叫びたい程の歡喜が心一杯に広がっていく。

その言葉を最後に、私は稟君の胸の中であたたか泣き続けた。

小さな、子供のように・・・。

泡沫の夢。

この五年間を称するにはその言葉がぴったりだ。

振り返ればそこはからっぽ、実のある事などない一切なかった五年間もの時間。

だけど今、私はあの日から止まっていた時間が動き始めた音を確認に聞いた。

ああ・・・愛おしい。

とめどなく流れるこの涙は嬉しさから。

ならば湯水のように溢れるこの気持ちは、想いは一体どこから来るのだろうか。

五年間もの間、蓋をしていた気持ちがこぼれ落ちそうになる。

切なく、暖かいこの想いを伝えたら稟君はどんな顔をするのだろうか。

驚くのかな？

困った顔を見せるのかな？

それとも笑って、私の手を取ってくれるのかな？

っ、でも・・・

緩みかけた口元を引き締め自らに言い聞かせる。

今はまだ伝えられない。

今の私に稟君の隣は不釣り合いだから。

もう少し・・・あと少し私が前に進めた時、成長出来た時、自分を誇れることが出来た時は稟君に想いを伝えよう。

その間にもしかしたら稟君は誰かを好きになるのかもしれない。桜ちゃんと・・・両想いになるかもしれない。

でも・・・それでもいいんです。

だからそれまで・・・どうかそれまで、あなたのそばに居させて下さい。

胸を締め付けられる程切ない想い。

だが同時に心は嬉しさで満ちていく。

私は気づく。

私はもう稟君しか愛せないんだと。

私の世界は稟君で満たされているんだと。

この身も、心も、存在も、すべては彼の為にあるんだと。

そしてそれは、私にとって、この上ない喜びだった。

第十六話 秋宵、悲劇の終演 「後編」 (後書き)

更新が遅くなり申し訳ありませんでした。

こんな亀更新の小説をお気に入りしてくれてる皆様、そして今まで感想をくれた機械屋さん、ARTさん、朱さん、桜さん、ムタさん、ゼヘルさんに感謝です。

これからも頑張りますので応援よろしくお願いします。

あとスペースに関しても皆様の意見お待ちしております。(。(。)

ノ

第十七話 動き出す日常と心情

土見稟と芙蓉楓の様子がおかしい。

それは休日を含んだ週明けのこと、通学路、学園内で二人の姿を見かけた人は口々にそう言った。

甲斐甲斐しく稟の世話を焼く楓。

戸惑いながらもそれを拒絶することなく素直に受け入れる稟。

会話を弾ませ楽しそうに笑う二人。

そして八重桜、相沢タクト、時雨亜沙と話すときに見せる表情は今まで見たことが無いほど綺麗、実に可憐なものではないか。

突然の変貌に学園内には様々な噂、憶測が飛び交い、学年、クラス関係なく二人には好奇の目が向けられるようになった。

そして噂通り、仲睦まじい姿に誰もが驚き度肝を抜かした。

二人の姿、雰囲気には今まで感じさせていた溝や隙間は一切無い。良い意味でも悪い意味でも学園内で有名だった二人の様相に学友は疎か、傍観者でしかなかった教師までもが首を傾げた。

だがそれも今までの事を考慮するとそんな反応は当たり前、致し方が無いというものだろう。

「 稟君と喧嘩してました、でも大丈夫ですよ」

二人に好奇の目が向けられ始めて数日経ったある日の事、クラスメイトの一人が二人の関係の変事について楓に尋ねると、楓は淡々とそんな答えを返した。

嘘だ。

約一年と数ヶ月しか交流の無い間柄。

だが他のクラス、学年よりも二人の関係を見てきたクラスメイト達は誰もがそう感じていた。

犬猿の仲。

そんな言葉でさえ生温く感じるほど険悪だった二人。

実際、楓は稟を恨んでいるなどといった噂話が流れる程二人の仲は最悪だった。

そして何より、楓は稟の事に関して、それこそ目の前で親衛隊に呼び出された稟を無視するほど無関心だったはずだ。

“喧嘩”という言葉では到底納得も理解も出来ないほど端から見ても度を越していた楓の行動や態度。

クラスメイト達の頭の中は尽きない疑問で埋め尽くされる。

もっと詳しく、掘り下げて聞こうとクラスメイトは口を開く だ

が、その疑問を口に出すことは出来なかった。

楓は言葉の最後に大丈夫だと付け加えこの話を終わらせている。

それは土見稟との仲を修復したから大丈夫という意味なのか。

それとも楓自身を、もしくは稟達との関係を含めて心配しなくとも大丈夫だと言っているのか。

どちらにせよそれは楓が引いた自分達、傍観者と部外者に対する境界線。

これ以上話す事はないという意思表示だった。

何か深い事情が二人の間にあった。

そしてこの一週間の間にそれを払拭出来る程の出来事が起こった。

僅かな情報しかない中、クラスメイトは今までの経緯や楓の態度を考慮し、考えた結果そんな結論を叩き出す。

これといった矛盾点もなく、実に筋の通った結論に納得したように頭を僅かに動かしたクラスメイトは楓と二言三言言葉を交わし、そそくさと自分の席へと戻って行った。

そしてこの日を境に、事態は沈静へと向かっていく。

きっかけとなったのはやはり楓の大丈夫だという一言だった。

それはクラスメイトを介し学園内に広まり、今まで学園内を行き交っていた根も葉も無い噂も、憶測も、想像も一瞬で払拭させた。

最初はクラスメイトのように疑問を抱くものや、好奇心に負け楓に

理由を尋ねる者もいた。

だが楓に上手くはぐらかされたり距離を置かれたりと、皆が皆同じ結果を辿った。

八方塞がりの現状は疑問という疑問を押さえ込み学園内に平穏を与えようとしていた。

だがいくら押さえ込める事が出来たとはいえ、今までの経緯を見た皆の胸には疑問が募る。

二人の問題は本当に解決したのだろうか？

もしかしたら芙蓉楓は土見稟に脅されそう言ってるだけなのでは？

そんな疑問が……。

笑い合い、手を取り歩む二人の姿。

親友とも呼べる人に囲まれ、本当の自分をさらけ出す楓のその姿に、今は違和感を感じるのかもしれない。

今までの事を振り返り、不信任を募らせるのかもしれない。

だがそれも僅かな間だけだ。

彼等が抱いた疑問は時が流れて行くと共に風化し忘れ、二人に感じていた違和感も次第に薄れていく。

いずれ疑問を抱いていた人は気づくだろう。

これが、芙蓉楓と土見稟の有るべき姿なんだと。

そしてその未来は、きっと・・・きっとそう遠くない日に。

.....

さて、唐突だと思うが言っておきたい事がある。

俺こと、相沢タクトは人というものが大っ嫌いだ。

・・・うん、こうして口に出してみるとものすごく厨二臭い台詞だがまあそれは一旦置いてまず語らせてくれ。

人を嫌いになつた原因はいろいろ。

それこそ大なり小なり存在するが上げるとキリが無いので一番の理由を上げてみよう。

それは“汚い”ところだ。

語弊を生じさせないため言っておくが俺は別に人の容姿や外装の事を言ってる訳ではない。

人の内面の事を言っている。

人は欲求を満たすためならどんな手段をも厭わず行使する。

こうして口に出すと実に重々しい言葉だがこれはどんな人にも当て嵌まる、言ってしまうえばごく自然なモノだったりする。

例えば空腹。

例えば渴望。

例えば眠気。

これはとても小さな事象だが、人はそれを極限までとは言わないがある程度我慢した時、それを最優先に取ろうと行動を起こす。

腹が減れば食べる。

喉が渴けば水を飲む。

眠たくなったら床に就く。

きっと人はそれを当たり前だと平然と言うのだろうがここで気付いてほしい。

それを肯定するならば、俺の言葉を肯定していると同義の意味合いを持つということに。

つまりそういうことだ。

さて、話は戻るが空腹や睡眠、それらは三大欲求にも数えられるほど実に当たり前のモノだ。

ただ人間はそんな可愛い欲求だけを己の内に飼っているわけではない。

肉欲、物欲。

所謂二次欲求とも言える欲求は、三大欲求のように限度があるわけではなく、人はそれを満たすために様々な行動を取り各々欲求を満たし、虚栄を張る。

そんな人間を見る中で、俺は一つの結論にたどり着いた。

それは人というものは自分の欲求を満たす為ならば平気で人を傷つけ、陥れる醜い生き物だということだ。

・・・ああ、我ながら実に湾曲し、捩曲がった考え方だと思う。

だがそれも致し方が無いというものだ。

俺は幼い頃、母親の遺産を巡り人間の暗部とも言える部分を見過ぎ、そして触れすぎた。

私服を肥やそうと目論む輩、優しさという暖かさを餌にちらつかせ俺に近寄る大人。

俺はそんな人間という生き物に至極、嫌気がさした。人の中に流れるドロドロの欲望に恐怖さえ覚えた。

だから俺は壁を作った。

誰も近付いては来ない、強固なる壁を。

俺は人と距離をとった。

付かず離れず、相手に隙を見せないように。

そのためか、俺は稟や楓、桜といった壁を作らず心を許せる仲間が出来てもそれ以外の人を信頼することが出来ない。

人間恐怖症・・・とは違うと思うが、まあ人と関わることが億劫に為ったのは確かだ。

だから俺はこの街に帰る前、心に誓った。

誰にも関わらないと。

確かに稟達のように裏表の無い奴もいる。

信頼するに値する奴がいるのは事実だ。

もしかしたら転入する学校にもそんな奴がいるのかもしれない。

だけど人を理解するには時間が掛かる。

だから俺はあいつら以外の人と関わるのは止めようと心に決めた。
あいつらさえ傍に居てくれさえいれば他の奴らなんてどうでもいい、
そう思っていた。

そう思っていた・・・はずなんだけどなあ

「・・・えつと、タクちゃん？ボクの顔に何か付いてるのかな？」
「っ、いや、なんでもないですよ」

先輩の声に、俺は思考の海から意識を引き上げる。
長い緑髪を風に靡かせ、困ったようにこちらを見る先輩の姿が目
映る。

頬が朱いところを見るとどうやら無意識に視線を送っていたらしい。

俺はそっけなく、はぐらかすようにそう返すと手元の弁当箱へと視
線を移す。

すっかりたまり場となってしまうた屋上。

秋と言うには若干肌寒く、冬と言うにはやや暖かくも感じるなんと
も微妙な気候の中、俺は稟達と昼食をとっていた。

「……………」

「……………(じ)……………」

食べかけの弁当へと箸を動かす間にも感じる先輩の視線。

ちらりと、何気なく先輩の方へと目を向けるとそこには怪訝そうに
瞳を細める先輩の姿があった。

チクチクと針の様に刺さる先輩の視線。

俺はそれから逃げる様に、前方へと顔を向けた。

「はい、あ〜ん」

「あ、あの、私のもどうぞ」

「……………お、おう」

「……………」

だめだ、どちらにしる痛いには変わり無い。

屋上に何脚か置かれたベンチに座る稟達。

右方に桜を、左方に楓を、そして二人に挟まれた稟はまさしく両手に花と言ったところか。

「ってかそのあーんの前に稟が食べてた弁当って楓が作った物だよな。」

「だったら弁当の内容変わんないんじゃないか？」

「右方に桜を、左方に楓をはべらせた稟は満足げに頷いた……」

「おい、今の俺の対応と顔をどう見たらそんな事が言えるんだ!？」

「とりあえずそんな無粋なツツコミは置いて稟には適当なナレーションを入れてやる。」

すると稟は箸を向けられたまま器用にツツコミを入れた。

「気恥ずかしさからか、顔を真っ赤に染め箸を向ける楓、そして楓とは反対に、楽しそうに笑い箸を向ける桜。」

「稟に寄り添い、幸せそうに笑う二人は客観的に見ても実に可愛らしく、そして二人に挟まれ狼狽する稟は実にへタレ野郎に見えた。」

「うるせー、こっちはお前らの甘い光景見せ付けられて口から砂糖吐きそうなんだよ、大人しく弄られる」「命令!??ってかこれは俺が望んだ事じゃなっ」「!」

「・・・そっか、稟君、心の中じゃ迷惑だっと思ってたんだ」

「ごめんなさい、稟君・・・」

「えっ、いや、俺は別に迷惑だなんて」

「稟の鬼畜」

「稟ちゃんのすけこましー」

「余計にややこしくなるんでちょっと黙ってて貰えませんか!？」

「はい」

軽快な返事と返すと先輩は残りの弁当を突っつきはじめた。

俺も稟を弄るのにも飽きてきたので先輩と共に食べかけの昼食に手をつけることにした。

「いや、だからさ、嬉しいのは嬉しいけど・・・やっぱりほら、桜達も人前であーんなんて恥ずかしいだろ？」

「私は恥ずかしくないもん!」

「わ、私も稟君の為なら我慢します!」

「おお、桜ちゃんも楓も大胆だね」

「ですね」

必死に桜と楓に弁解している稟を眺めながら俺は先輩と軽い会話を交わしながら弁当を食べる。

数分たった今も視線の事に触れないところを見ると、どうやら先輩は忘れてしまったらしい。

ありがとう稟、お前の犠牲は無駄にはならなかったぞ。

心の中で軽く合掌した俺は再び稟達の痴話喧嘩へと目を向けた。

「いや、我慢するくらいならやらない方が・・・」
「私は・・・私は稟君のお世話をするのが生き甲斐なんです！だから稟君が喜ぶことはなんだったします！」
「っ！わ、私だって稟君の為なら恥ずかしいことだってなんだったするよ！」
「あ、いや・・・二人の気持ちは分かったからさ、とりあえず大声で叫ぶのは止めようか」
「おお、稟の奴、いつの間にか二人を調教してやがる」
「稟ちゃんってホントに鬼畜だったんだ・・・」
「・・・・・・・・」

ガツクリと肩を落とす稟を見ながら、俺と先輩は顔を見合わせ笑い合う。

ああ、本当に信じられない。

「稟、さっさと飯食ってしまえよ、そろそろ授業始まるぞ」
「えっ？　　っやべ！桜、楓、早く食ってしまっぞ！」
「うん、じゃあ・・・」
「はい、稟君・・・」
『あーん』
「時間ギリギリまでそれで食わせるつもりなのか!？」

あんなに馴れ合うのが大嫌いだった俺がこんな暖かい空間にいるな

んで。

距離をおこうと努めていた先輩とこうして一緒に笑い合えるなんて。

「ほらほら、早くしないと授業に遅れちゃうよ。それはちょっと先輩として見逃せないね。」

「先輩、笑いながら言われても説得力皆無ですよ?。」

「もう、タクちゃんは黙ってて! あっ、そだ、これなら早く食べれるでしょ。」

「あ、亜沙先輩、まさか・・・!。」

「んしょ、・・・はい、稟ちゃん」

「あーん」

「・・・」

「あーん」

「あ、あーん・・・」

「ハハッ」

願わくば。

願わくばもう少しの間だけこの暖かい空間に俺を浸らせてくれ。

自分勝手に自己中な俺だけど・・・臆病で馬鹿な俺だけど、俺は

「ど、どう?。」

「う、旨かったよ」

「!そ、そっか! そのおかず、私がつつただけど口に合ってたよ」

「り、稟、私のはどうでしたか?。」

「ああ、楓のも文句なしに旨かったぞ」

「・・・っ、よかったです／＼」

「稟ちゃん、三人の女の子からのあーんはどうだった？」

「いろんな意味で死ぬかと思いました」

「そっか、あ、タクちゃんもあーんする？」

「や、丁重にお断りします」

俺はお前らが、大切だからな

第十七話 動き出す日常と心情（後書き）

どうも皆さんお久しぶりです。 。 。 ） /

最近忙しく急いで買い上げた文なので少々荒かったかもしれませんが如何でしたか？

誤字、脱字の報告。

感想お待ちしております！ 。 。 ） / ”

第十八話 クリスマスイブ 「前編」 (前書き)

今回は短めです。

第十八話 クリスマスイブ 「前編」

春夏秋冬。

季節は巡り景色は移ろいでゆく。

帰ってきた当初、色鮮やかな葉や花で埋め尽くされていた情景も次第に色あせ、鮮やかな秋から灰色が基調となる冬へと変わって行く。

あんなに綺麗に色付いていた葉も木々から枯れ落ち、やや寂しくも感じるこの季節は人肌が恋しくなるのは俺だけではないだろう。

その証拠に、一步外へと足を運べば鬱陶しいほど、イチャつくカップルの姿が目映る。

特にキリストの誕生の前日である今日、所謂クリスマスイブの今日は恋人達の間では特別な日。

恋人達にとって、今日は聖なる夜だった……。

「 というわけで！今頃街中で人目も憚らずにイチャつくカップルにあやかかってボク達も精一杯楽しんじゃおう！」

「 いえーい 」

「 い、いえーい…… 」

「 ……はっ？ 」

……と、言う訳の分からない発言から始まったこのパーティー。

電話で呼び出され、招かれた(？)先輩の家。

先輩に通されリビングに入ると、そこには一目見ただけでも手の込んだと解る料理が所狭しと並び、そしてそれを囲むようにいつも通りのマイペースを一切崩さない亜麻さん、そして言わずもがな稟、楓、桜といったいつもの面子が座っていた。

「ほらほら、いつまでも立ってないでタクちゃんも座って座って！」

「あーはいはい」

「はいは一回！」

「・・・はい」

適当なコントをした後、先輩に促されるまま稟の隣に腰掛けるが、いまいち状況を理解できてないので、少し浮いている様にも感じる。

・・・隣に座る稟が“諦める”と言いたげな眼をしていたのがちょっと気になったが・・・見間違いだよな？

「ほら！稟ちゃんもタクちゃんも遠慮しないで食べて食べて！今日の料理は楓や桜ちゃんと腕によりをかけて作ったんだから！」

「あっ、いただきます」

「・・・」

必死にこのテンションについて行くこととする俺を尻目に、稟は手慣れたように受け答えを返す。

まあ、俺よりも先輩との交流が長い稟にとってこんな事は日常茶飯事だったんだらう。

しつかりとこの場に適應している稟を横目に、俺は小さく溜息を吐いた。

先も触れたが今日は十二月二十四日、クリスマスイブ。

学校は冬休みへと突入したものの、いつもの習慣で早起きしてしまった俺はコタツでゴロゴロと、怠惰なる時間を過ごしていた。

冬休みに入った瞬間に宿題を片付けたので大してやることも無いしこれといった用事も無い。

二度寝しようにも眠気が襲って来ない現状ではどうしようもない。

消去法でやることが無いと解った俺はとりあえずリビングに赴き、年中無休で設置してあるコタツ（直すのめんどい）に入り、ゴロゴロとしながらテレビを見ていた。

暖房に暖かいコタツといった暖房機具は人が生み出した英知の結晶と言っても過言ではない。

こんなくそ寒い中外に出かけるカップル共の気がしれないなあ。

テレビに映し出された“聖なる夜！今日はどこ行くカップル特集！”なる番組を見ながら、地味に寒がり屋な俺はしみじみとそう思った。

そんな時、ポケットに入れていた携帯電話が勢いよく震えた。

この携帯番号を知っている人が少数に加え、鳴るということ自体が珍しい（別に気にしては無い）ので思わず身体を強張らせてしまっ

たのは仕方ないことだろう。

ポケットから携帯を取り出し画面を確認すると、ディスプレイに映し出された番号の頭には光陽街の市街局番があった。

この番号を知っているのは学校の教師か親族を名乗る馬鹿な奴ら、もしくは稟達の誰かだが、どうやら電話主はこの街に住んでいる人らしい。

俺は携帯機能を上手く使いこなせないため携帯のディスプレイには名前が出て来ない。
だが冬休みに入っている事を考えると、十中八九、稟達の誰かだろう。

某名探偵バーロー顔負けの名推理をたたき出した俺は、未だブルブルと震える携帯を手に、俺は数秒間考えた後 無視を決め込んだ。

・・・えっ？何で？分かってるならでろよ！と突っ込みたい人もいるだろうがあえて言おう。

めんどくさい！

テンションだだ下がり中の俺には話す事もましてや身を起こして話すなんて事は最早めんどくさい以外の何物でもないのだ。

怠け者と罵られようが白状者と後ろ指を指されようがこのめんどくさがり屋な性分は治らない。

堪えてやるうじやないか！

・・・選択ミスという事実気付いたのはそれから数分経った後だった。

誰が予想出来ただろうか？

電話の相手が稟でもなく楓でもなく、ましてや桜でもない。亜沙先輩だということに。

そして誰が教えたのだろうか？

俺の携帯番号を。

全てを理解した時、俺は冷たいフローリングの床で一人、正座をしながら先輩の説教を聞いていた。

・・・とまあ、そんな経緯がありここにいるんだが。

「はい稟君、あーん」

「・・・あーん」

「あ、稟君。こっちのも美味しいですよ？」

「あ、ああ。じゃあ」「はい、あーん」

「……………」

「アハハ りっちゃん両手に花だね〜」

「……………相変わらずですね」

「……………相変わらずだね〜」

「……………気まずい。」

非っ常〜に気まずい。

こういうやり取りは学校の屋上で何度も見たし、先輩と一緒にからかいもした。

だがこんな間近で見るのは初めてなため、先輩との微妙な距離がややむず痒く、ギクシャクしているように感じる。

人の家だということも忘れイチャつく三人。(もっとも、稟は被害者に当たるんだろうが)そして、何故か三人に混ざり気味な亜麻さん。

すっかりおいてけぼりを喰らった俺達は、ただただ、黙々と箸を進めるしかなかった。

(……………ああもう、俺は一体何をしてるんだ、らしくもない)

黙々と箸を進める中、俺は心の中で悪態をついた。

別に気まずくなる理由なんてない、三人を無視して、ただ先輩と話を続ければいいだけじゃないか。

先輩の様に何の脈絡も無い話を振ったり、稟の様に気の利いた言葉を掛ければいい。

そう、ただそれだけ　それだけじゃないか。

解っている、だけど今の俺は先輩に話を振ること所か、話し掛ける事も出来ない。

ただ俺はどんな話を、どういう話題を、どう話し掛ければいいか解らないのだ。

関わりを持って初めて分かる今までの行い。

情けなさの余り、俺はグツと奥歯を噛み締める。

振り返るとそうだった。

話といえば稟や先輩が振った話に乗るだけ。

なるべく人と関わらずに、悪く言えば避けて生きてきた俺は、今までそんな事で困ったことなんて一切無かった。

今までどんなに稟達に頼っていたのか、寄り掛かっていたのか。

(ホント・・・俺は何をやってるんだ)

そもそも俺は帰ってくる前に決意した筈だ、人と距離を置こうと、もう誰にも関わらないと。

なのに、今の俺はその決めた事さえ無かったかのように平然とこの

場所に居て、人と関わっている。

まるで何事も無かったかの様に。

「タクちゃん？」

「……はい？」

「どうしたの？難しい顔して……もしかして美味しくなかった？」

「いやいや、先輩の料理はとっても美味しいですよ」

「……そう？ならよかった」

俺は心境を悟られまいと、なるべく自然に見えるようにそう返す。

すると先輩は安心したのか、浮かべていた不安げな表情を崩し、依頼のない、とても嬉しそうな笑みを向けた。

純粹で、真っ白な笑みを。

先程の後ろ向きな思慮が残っているのか、妙にいたたまれない感覚に襲われた俺はやや頬が引き攣るような、そんなぎこちない笑みを返すと再びテーブルへと向き直った。

「あーん」

「あのな桜、ここ先輩の家だしそろそろ」

「っ、り、稟君。こっちの料理もどうぞ！」

「いや、あの」

『稟君！』

「……」

稟を挟み勃発したあーん合戦。

楓と桜のあーんは最早意地の張り合いと化し、俺達どころか、あの

亜麻さんを黙らせるという快挙を成し遂げていた。

さつきから稟がチラチラとこっちに視線を送っている気もするが、
えて触れないでおこう。
馬に蹴られたくないし。

「ね、タクちゃん」

「はい？」

トントンと肩を叩かれ、俺は振り返る。

先輩は先の笑顔を崩さず、言葉が続けた。

「ちよつとさ、外出ない？」

「・・・別にいいですけど」

「ん、ありがとう」

突然の誘いに一瞬、動揺したもののすぐに返事を返した俺は箸を起
き立ち上がる。

先輩は小さく笑みを零したかと思うと、そそくさとリビングから出
て行ってしまった。

何か用事があるか、もしくは話でもあるのか？

呼び出された理由が全く解らず、見当もつかない俺はただ先輩の後
を追うことしか出来なかった。

「ずっと見てるだけっていうのも悪いし、ボクも参加した方が
いいのかな？」

「亜麻さん!？」

リビングを出る時に聞こえたそんな台詞と、直後にゆったりとした
“あーん”という声が聞こえたような気がしたが、きっと幻聴だろ
う。

そう思い込む事にした。

第十八話 クリスマスイブ 「前編」(後書き)

皆さんお久しぶりです、楓編を書き終え、燃え尽き症候群に襲われていたクロです・・・。

お気に入り登録をしてくれていた皆さん遅れて申し訳ありませんでした！

久しぶりに書いたので文章がやや粗めですが楽しんでくれたら幸いです。

感想、指摘、何でもお待ちしております。(。)(。)/

第十八話 クリスマスイブ 「後編」

ザクザクザク・・・。

いつの間に降ったのか。

住宅街内の道路や歩道、ガードレールなど至る所に真っ白な雪が見える。

降る前から感じていた身を刺すような冷気も雪が加わったせいか、一段と寒さを醸し出していた。

ホワイトクリスマス。

そんな単語が頭を過ぎる。

きつといつもの先輩なら積もった雪を見るや否や子供の様にはしゃぎ、雪玉の二、三発はぶつけてくるだろう。

“いつもの”先輩なら ね。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言。

先輩の家を出てから、俺と先輩は一度も言葉を交わすことなく、ただ黙々と歩いていた。

行き先も、目的も告げられぬままただ黙々と。

何度か話し掛けようとした。だが今の先輩の表情　何かを気負っているような、覚悟するような表情を見せられたら話し掛けることも出来ない。

「……………」

先輩は何を考え、何を思い俺を連れ出したのか。

それは先輩しか知り得ないこと、だがこんな風に妙な沈黙が続くといやがおうでも考えてしまう。

先輩に何か、やってはいけない事でもしたか？

俺は腕を組み思案する。

……そういえば、今朝居留守使ったなあ……。

「……………」

いやいや！んなことで先輩が怒るはずはない！ならもっと別の事と考えるのが妥当。

もしかして、先輩に何か言っではいけないことでも言ったか？

ダラダラと流れる汗を拭い再び腕を組み、思案する。

……ああ、確かずっと前に一度だけ「先輩って乙女心あるんですか？」なんて聞いたことがあったなあ……。

「……………」

過去を叩けば叩くほど、探れば探るほど出てくる心当たりに頭を悩ませる。

だけど今の先輩の様子を考慮するとどれも違うような気もする。

ならもつと別の事。

あのおおらかで突拍子もない事を平気でする先輩を揺さ振るほど、悩ませる程の大きな出来事でもあったのか？

・・・いや、ない。ってかその線もほぼ有り得ない。

稟達の問題は解決した、それに冬休みに入るまでね昼休みや放課後といった時間帯も毎日のようにみんなでつるんでいた。

それに例え先輩に何かあったとしても誰かが気付くだろうし、第一、嘘が下手くそな先輩にそれを隠し通すような真似は出来ないはずだ。

ザク、ザク、ザクツ・・・。

不意に、前方で先輩の歩みが止まる音が聞こえた。

「タクちゃん、着いたよ」

外に出て初めて聞く先輩の言葉。

先輩は強張った表情を崩し笑うと、「ジャンジャジャーン」と一昔前のBGMを口にし、こう言った。

「ようこそ！国公立バーベナ学園へ！」

・
・
・

・
・
・

・

「いやいや、いかにも母校のように言ってますけど先輩、まだ入学してないでしょ！」

「今年入るから問題無しだよ！」

飄々と言つてのけた先輩は校舎の方へと向き直る。

国公立バーベナ学園。

魔界から来る魔族、神界から来る神族、そして人族との異文化交流と勉学の更なる発展を目的とし、確か二、三年ほど前に三国協同で作られた学園だ。

普通の高校よりも三倍は広い敷地内に建てられた校舎。グラウンドや体育館は勿論、プール、テニスコート、学園の近くには野球場やサッカー場などの施設も完備。

そしてなんといつても一般教養である数学、歴史といったカリキュラムの他に世界で初めて魔法を専門に取り扱う学科、魔法学なる教科を造るなど、勉学に励む生徒にとっては至り尽くせり。まさに文句の付けようがない学園となっている。

「いつ見ても大つきいよねーここって」

「まあ三国協同で作り上げただけのことはありませんよね・・・先輩、ちゃんと勉強してるんですか？」

「・・・ま、まあね。皆が見てない所でコツコツと、しっかり勉強してるから楽勝だよ！」

「でも国公立って言うくらいだから入試も難しいんじゃないですか？」

「うっ！」

「それにこの追い込み時期にパーティー開いた張本人がそんな事言っても、何の信憑性もないですけどね」「グハアッ！」

リアクション芸人真つ青の反応を見せた先輩は冷たい雪に膝をつけガツクリとうなだれる。

そんな先輩をあえて無視しつつ俺は校舎へと再び視線を向ける。

冬休み、それにクリスマスということもあってか、ぐるりと校舎内、グラウンドを見渡しても今は生徒は疎か教師の姿すら見当たらない。

「・・・この学校に進学したいって事は何か目的でもあるんですか？」

ふと、俺は頭の片隅に浮かんだ疑問を唐突にぶつけてみる。

「へっ？目的？」

「ここって三界が協同で設立したこともあって世界的に有名な進学校じゃないですか。設立して間もないのに将来有望な若者を輩出しているとかで有名だし・・・わざわざここを受けるって事は何か目的があるんですよね？」

「・・・うーん」

ああ、やっぱり目的は無いんですね。だと思いましたよ。

何となく予想はしてたもの、こうあからさまに反応を返されるとどうしようもない。

未だ地面に座頭を悩ませる先輩に生暖かな視線を送りつつ苦笑いを浮かべる。

「……………」

いつまでもみんなとくだらないこと話して、遊んで、馬鹿やれたらいいのに。なんて子供染みた事は言わない。

だけど心の中ではまだ時間がある、まだまだ先の話だと先伸ばししてきた事について、俺は否定はしない。
気がつけばもうそろそろというところまで近付いてきた。

俺達の進級、先輩の進学、受験、そして……別れが。

「時間って……速いですね」

ぼつりと、俺は小さく、独白する。そして口にしたことにより気付く。

今までそんな事、一度思ったことはなかった。と。

時間は無限じゃない、有限だ。

それは始まりがあれば終わりが訪れるように、出会いがあれば別れがあるように当たり前の事。なのに、今の今までそんな事一度た

りとも、考えた事も感じた事もなかった。

ここに帰るまで、それに違和感を感じたことなんてなかった。
ここに帰るまで、それに何の疑問も抱くことはなかった。
ここに帰るまで、それに恐怖を覚えることなんてなかった。

だけど・・・今は。

「ね、タクちゃん」

「・・・なんですか」

落ちかけた思考を無理矢理打ち切る。

そして気のない返事を返しつつ未だ冷たい雪の上に座る先輩へと向くと、先輩はニコリと笑い

「タクちゃんはこの街好き？」

と、相変わらず、何の脈絡もない話題を振ってきた。

呆れつつも答えを返そうと口を開く　が、同時にズキリと、理由は解らないがまるで鋭利な刃物に付かれたような鋭い痛みが胸に走る。

グツと奥歯を噛み締め、動揺を見せないために顔を引き締めながら、俺は先輩へと答えを返す。

「・・・好きですよ」

「そっかぁ」

先輩は満足げに頷くと立ち上がり膝についた雪を払う。

「ボクもね、この街大好きなんだ。そう思うのはやっぱり育った街だからかな？こうやって受験とか進学とかいざこの街を離れるって選択肢が出来ると嫌でも感じさせられるんだ　　やっぱりこの街から離れたくないなって。ああ、ボクってこの街が大好きなんだなあって」

先輩は子供のように眼を輝かせ、無邪気に笑う。

「.....」

先輩は一体何を思い、何を考えてるんだろう。

先の質問の意図、今までの行動の真意を見せないままただだ、先輩は話を進めていく。

「街の人はみんないい人ばかりで暖かいし優しい、まさにアットホームって感じだよ　それに商店街のスーパーはありえないくらいタイムセールがお得だし、洋服とか穴場スポットも抱負で盛り沢山！」

でもさ、きつとそれだけじゃないと思うんだ。ボクがこの街を好きな理由、ボクがこの街に居たいと思う理由って」

何故先輩はこんな話を切り出したんだろう。

パーティーを抜け出して、こんな話をして、一体何の意味があるんだろう？

解らない。

先輩の意図も、思想も、考えも。

「ね、タクちゃん。タクちゃんは解るかな？」

解らない、解らない。

俺は力無く首を横に振る。

「そっか・・・」

俺の答えに先輩は予想通りと言わんばかりに、そして僅かに残念そうに空虚に微笑むとそう返した。

そして訪れる、僅かな静寂。

嫌な空気が俺達を包むのを肌で感じつつも、俺は先に口を開くことはしない。

やっと・・・まだ臆げで影しか見えないがやっと先輩の意図が、真意が見えてきた気がしたから。

「あのね」

やがて、先輩は意を決したように重い口を開く。

「なら教えてあげよつか、タクちゃん」

「・・・何をですか？」

「ぼ、ボクがこの街に居たいホントの理由」

言葉をつつかえつつも、顔を僅かに染めつつも、先輩一生懸命言葉を紡ぐ。

だが緊張のせいか、先輩はそこで一旦言葉を切ると朱く染まった顔を逸らし、口ごもるようになかなか続きを話してくれなかった。

「……………」

先輩の意図、考えがようやく理解出来た俺はいざとなれば予想を口に出し話を続けることも、きつと合っているであろう先輩の言葉を先に言うことも出来た。

だがいくら時間が過ぎようと俺が口を挟むことはなかった。

先輩の気持ち、を負い、覚悟を裏切るような、踏みこむような真似だけはしたくなかったから。

「あ、あのね」

先輩は覚悟を決めたように　だがまだ緊張しているのか、やや力みながら話し始める。

「……………」

「ここにタクちゃんが、タクちゃん達が居るからだよ」

先輩の想いが、言葉がスルリと、何の抵抗もなく心へ落ちていく。

「・・・先輩」

「えへへ、こうやって面とむかつて言うのも恥ずかしいね　でもこれがボクのホントの気持ち。タクちゃんと一緒に稟ちゃんからかったり、楓と部室で一緒に料理したり、桜ちゃんと洋服とか買いに行ったり・・・そんな何の変哲もない時間があるから。この街にはボクの一番大切な時間があるからボクはこの街に居たいって、離れたくないって思ったんだ」

先輩は本当に大切そうに、まるで自分の宝物を自慢する子供のように無邪気に、天真爛漫な笑顔で話す。

「だからボクはここに行く。タクちゃんや稟ちゃん、楓や桜ちゃんがいるこの街に居たいから、ボクはこの街が大好きだから！」

「・・・そうですか」

綺麗な緑髪を靡かせ、自分の気持ちと向き合うように力強く言い放つ先輩に対し、俺は簡易な返事を返す。

「あつ、もしかして呆れてる？　“全く、そんな深く考えずに簡単に進学決めて”・・・って」

「似てない声真似は辞めてください！・・・別に呆れてなんかいいですよ。だいたいこれは」

「　先輩自身の問題だから・・・かな？」

「・・・ま、そうですね」

「フフツ、タクちゃんならそう思うたよ」

ホントに・・・よくもまあ数ヶ月の付き合いでここまで俺の考えを汲めるものだ。

心の中で呆れつつ　内心、湧き出る嬉しさを噛み締めつつも、俺は再び校舎へと視線を向けた。

「でも……いいですねそういって考え、俺そういって嫌いだじゃないですよ」

「ふえ？」

「実を言いますとね俺、中学卒業と同時にこの街出ようって決めてたんですよ」

「……えっ？」

素っ頓狂な声を上げる先輩。

度肝を抜かれた様な、驚きのあまり呆けた様などっちつかずの表情に思わず笑ってしまう。

「けど　「どっせえい!!」ブハッ!？」

構わず続けようとした瞬間、俺の顔面に先輩のヘッドバットが炸裂する。

「こっの、バカチンガー!」

悶える隙もなく首にラリアット、反動で倒れた瞬間には鳩尾に張り手をプレゼントと、息も絶え絶え、あっという間に虫の息と、かなり手荒なツッコミ(?)を貰ってしまった。

「……いや、黙ってた俺も悪いですけどせめて最後まで聞きましょうよ。」

「ハアハア……フウ。で、なんでタクちゃんはこの街から出ようなんて考えたのかな」

「……………」

「ふうーん、話してくれないんだあ。ならもう少し、タクちゃんの身体に聞かなきゃねえ」

「……………!?(ブンブン)」

先輩、それ洒落になってないです。

鳩尾に良いモノを喰らったせいかわることは疎か息さえ吸えない。恐ろしいほど無機質な笑みを浮かべ静かに拳を鳴らす先輩に無言の静止を呼び掛け、こっそりと身体全体に魔力を流し治癒魔法を掛ける。

それでも回復に数分掛かり、やっと立ち上がれる様になった時には先輩の機嫌は最高に絶不調と、思わず涙が出そうになる。

「で、なんでなのかな?」

「えーと家庭内の事情で　ごめんなさい。冗談ですから手を振り上げないでください」

軽い嘘で切り抜けようとしたらこのざまだよ。
もうこの人に勝てる気が全くしない。

「……………あのですね」

「うん」

「あ……………」

どこから話すべきか。

そう考えた時にまず思い浮かぶのが家庭の事情。
両親の事、自分の事、エセ親族達の事。

とにかくこのまま黙っててもラチが明かないのでとりあえず両親の事から話すことにした。

「俺、両親居ないんですよね」

「それも・・・冗談？」

「冗談だったら良いんですけどね」

目に見えて狼狽する先輩に軽口でそう返す。

「でも正直、俺はそんなのどうでもいいですよ。母親は俺が小さい頃に亡くなっただんで思い出なんて数える程しかないし父親に関しては論外だから大した感傷も湧かないし」

「・・・それはどういう意味？」

「そのまんまですよ。俺の父親、母親が亡くなると同時に俺を捨てたんです」

「えっ？」

「それを知ったのは母親の葬儀から一年くらいたった後ですけどね。子供って奴はどんな馬鹿な奴だって一度経験すると嫌でも学習するもんでね。俺は身近な、それも血の繋がった奴から裏切られたんだからその反動も半端なかったですねー」

ハツハツハと軽く笑いながらなるべく明るく、軽口のまま話すが先輩の表情は硬い。

「・・・やっぱり話さなければよかった。」

いくら事情を話すとはいえ我が身の事のように悲痛な表情を浮かべ、傷みを耐えるかのように胸の前で強く拳を握る姿に自責の念が重くのしかかる。

先輩は優し過ぎる。

それに・・・今更こんな事話して一体何になるんだよ。

「・・・まあそんなこんなで、軽い人間不信に陥った俺は稟達のおかげで何とかなっただんですけど、五年前に父親が魔界で亡くなったらしくって、一旦、この街を離れたんです」

軽口のまま、あくまでも気にしてないように話を進める。

だが言葉とは裏腹に、口調とは裏腹に心が疼く。

「で、ここに帰った時決めたんですよ。もう誰とも関わらないって」

「それは・・・なんで？」

「稟達以外信じられなくなったからです」

俺が唯一信じる事が出来た人間。

それがあいつらだった。

無愛想で馬鹿な俺を振り向かようとあいつらは一生懸命動いてくれた、こんな気味悪い餓鬼を身を削ってまでも救ってくれた。

だから俺はあいつらを信じるしあいつらに何かあったらどんな馬鹿な事だってやる。

ギブアンドテイク。

合理的且つ理論的な脳みそはそんな答えを返す。

結局、人というのはそういうモノだ。僅かなリスクを負ってくれりような人しか、自らを顧みず行動してくれるような人しか信用できない。

心のどこかで人間というものは怖いモノだと解ってるから。恐ろしい生き物だと解ってるからそんな生き方しか出来ない。

嗚呼、なんて悲しい生き物なんだろう。

「じゃあ、ボクはどうなの？」

「……………」

不意に先輩が声を上げる。

「タクちゃんは今誰とも関わらないって言ったよね、信じられないって言ったよね？なら……ならなんでボクとは関わったの？」

不安そうな、怯えた様な細かい声色。

なんで……か。

先輩の質問の答えを模索するように俺は眼を閉じる。

正直言うと、俺もなんで先輩と関わったのか解らない。

稟達の事があつたから？

いや、違う。

楓や桜との交流があり話を聞きやすいと思つたから？

いや……違う。

きつとそんな複雑な事じゃない。
もつと簡単で単純な

「
」
そう考えた時、一つの答えへと行き着く。

簡単で単純、且つ明確な答えに。

ああ、そっか

「先輩が」

こんなに・・・簡単な事だったんだ。

「先輩が、俺と面と向かって会話してくれたからですよ」

「えっ？」

稟も楓も桜も関係ない。

ただあの日　先輩が俺と稟を間違つて張り手を喰らわせた日、先輩は俺の眼を見ても気味悪がる事もせず、魔法を見ても臆する事なく話掛けてくれたから俺は知らず知らずの内に先輩に気を許してたんだ。

ただ単純に嬉しかったから、心の奥深くで心を許してたから俺はこの人と、時雨亜沙という一人の女の子と一緒に話したり、笑い合ったりしたんだ。

「俺はハーフでもないのにオッドアイ、しかも変に混ざった奇妙な色だったからいつも気味悪がられてました」

転入した初日、俺はクラスメイトは疎か教師にさえ奇異な眼で見られた。

いつもそうだ、何かした訳でもない、何か話した訳でもないのに距離を置かれる。

だから俺は勝手に心の中で見切りを付けると、強固な壁を作り人との距離を取った。

これ以上関わりたくなかったから。

これ以上、傷付きたくなかったから。

だけど

「先輩はそんな事を気にしないで俺に話し掛けてくれた、笑いかけてくれました」

好奇心、疑心、妙心。

あの日、俺に話し掛けてきたクラスメイト 教師でさえそんな感情に動かされ、俺と一歩置いた位置で会話を交わした。

だけど先輩だけは違った。

俺を見ても気味悪がる事もなかった。

この異眼に疑問を抱くこともなかった。

ハーフでもないのに変だと思わないでいてくれた。

そして何よりも、俺と対等に接してくれた。

それが堪らなく嬉しかった。

「だから・・・だから俺は先輩に気を許してたんだと思います」

誰よりも優しくしてお人よし。

自分が傷付くのは平気なくせして他人が傷付くのは嫌う、目を離したら自由気ままに動き回り、動いた先で人が困ってたら迷わず手を差し延べるそんな稟と似たり寄つたりの性格な女の子。

それが先輩だった。

そんな先輩だからこそ俺はずっと傍に居た。

そんな先輩だからこそ俺は先輩を大切だと思つたんだ。

「ハハッ」

今までこんな簡単で、大切な事に気付かなかつたとは。

心の奥深くから湧き出るえもいわれぬ感情に思わず笑みが零れる。

「タク・・・ちゃん？」

突然笑つた俺を変に思つたのか、先輩は怪訝そうな表情で顔を覗き込む。

不安や心配。

先輩の顔からはそんな感情が見て取れる。

だが、答えに行き着き気分が高揚している今の俺にとって、嗜虐心を煽るその表情は逆効果だった。

「先輩」

「な、なにかな？」

俺は先輩の肩にゆっくりと手を置き、先輩の顔を真つ正面から見据える。すると先輩の表情はみるみる、面白いくらいに真つ赤に染まり始める。

「俺がこの街に留まるって思ったのはね、ここに稟達以外にも大切な人が出来たからですよ」

「た、大切!？」

普段の俺なら考えられないような歯の浮く台詞。

俺はジツと先輩の瞳を覗き込み何の迷いもなくそう告げる。するとボンツ!と、あれ程朱かっていた先輩の顔は更に朱く染まり、先輩は逃げるように慌てて眼を逸らす。

「タタタ、タクちゃん!？も、もう、か、からかつちゃダメ からかつてなんかいませんよ」ひゃ、ひゃい!？」

最早呂律が回っておらず、なにを喋っているのかいまいち聞き取れない。

だが俺は気にせず続ける。

「先輩さっき言っていましたよね？稟達がいるからここに居たいって。」

俺もそうです。ここに稟達が、先輩がいるからここに居たいって思いました。これは冗談でも嘘でもない、紛れも無いホントの気持ちです」

「あ、あのタクちゃん？」

絆、人と人との繋がり。

俺はこの数ヶ月で何度もそれを感じ、その大切さも、儂さも身で感じてきた。

冗談と言われるのは心外だった為、こうして力説してしまったのも仕方ない。

「俺は稟や楓、桜と同じくらい、先輩の事が好きですし大切なんです」

「あつ あの、えっと、あのあのあ」

「 ?先輩、どうかしましたか？」

壊れた機械みたく同じ台詞を繰り返し発する先輩。
高揚感マックス且つ先輩と同じく半分壊れかけた俺は先輩が何故こんなにも慌てているのか解らず、思わず首を傾げる。

「 た」

「 た？」

「 た、た、タクちゃんのバカアー!!」

「 ブフツ!？」

そして突然繰り出される必殺の一撃。

先輩の拳は鳩尾よりも少し上 ちょうど人体でいう心の臓の部分にヒットし、思わず意識が飛びかける。

「タクちゃんのバカー！唐変木う！すけこましー！」

途切れかけた意識の中、先輩は稟の代名詞とも言える三大言語を俺に浴びせると顔を朱く染めたまま、明後日の方角へと走って行ってしまった。

そして残された俺はというと意識の赴くまま冷たい雪の上に戻り伏し、日が落ちるまで意識を手放すという何ともお粗末な結末を迎えたとき。

ちなみに、これはまったくの余談だが、俺がまともにクリスマスをお過ごしたのは今年が初めてだったりする。

・・・ハハツ、違う意味で涙が出そうだ。

第十八話 クリスマスイブ 「後編」 (後書き)

皆さんお待たせ致しましたクロです。

今回はやや長めなこともあり更新が遅れてしまいました。

東方小説も近い内に更新する予定なのでよかったです。そちらも楽しんで頂けたら幸いです。

では。。。)

閑話 凧の日々

人は何かを失った時、初めてその大切さを知る。

小説やドラマでよく使われるこの台詞。

大体の人はこの台詞に共感を受けるだろう。

友達と絶交した。

恋人と別れた。

両親や親族と死別した。

友情、恋情、親愛。

人生を過ごし、何かを失わない人はまず居ない。

小さいものから大きいものまで、人は必ず何かを失い生きていく。

そして経験したからこそ、この台詞に共感し、感動を覚える事が出来る。

だが人はただ共感するだけで、それから何かをすることは疎か、それ自体を今まで以上に大切にすることなどない。

そして時が経ちその“何か”を失った時、人は必ず後悔し、再びこの言葉を思い出し認識する。

もう少し、ああしていればよかったと過去に想いを馳せ、あの時、本当にあれでよかったのか？と悔やまずには居られない。

もしもという可能性。

“if”という有り得ない可能性を捨てることが出来ないくたらない生き物、それが人間。

後悔するくらいなら何で行動しなかったんだ？

冷たい、どこまでも冷めきつた声が脳内に響き渡る。

その言葉を発したのは公園のベンチにふてぶてしく座る一人の子供。そして彼の視線の先には同じ年くらいの男の子と、その影に隠れるように佇む一人の女の子の姿があった。

くだらない事で悩むくらいならさっさと謝ればいい。んな風に馬鹿げた事に時間掛けて悩んで、勝手な理由で人傷つけた後は自己嫌悪で悲劇のヒーロー気取りか？御苦労なことだな。

子供らしさのカケラも無い瞳。軽蔑、嫌悪感が滲みだした声色と冷たい口調は視線の先に佇む男の子を狼狽させる。

意地を張り、自尊心が先行するあまり自ら折れることも、泣きながら走り去る女の子を引き止めることも出来ず、ただただ後悔し、うじうじする馬鹿に向けたのは侮蔑、放った言葉は皮肉。

今思えば懐かしい。

それは　その言葉は俺こと相沢タクトが、土見稟という一人のガキに初めて掛けた言葉。

相手の事なんて微塵も想っていない言葉と見下すような視線は稟と隣でジツとこちらを見る楓を怯ませる。

くだらない。

幼い俺は空を仰ぎ、夢げに呟く。

頬を撫でる涼やかな風と、秋特有の小春日和の暖かな日光は今でも覚えてる。

・・・何故俺はこの時、稟に言葉を掛けたのかは今でも解らない。

ただ目の前に居るそいつが目障りだった。

ただうじうじするそいつの姿が鬱陶しかった。

ただ何となく、そいつの悔しげな表情にムカツ腹がたった。

ただそれだけだった。

根本的な理由を理解できない今でも、それだけは覚えている。

実に・・・くだらないね。

一拍置き、心の奥底から絞り出した言葉は稟に対する批難でも皮肉

でもない、この世に対しての 絶望。

ああ確かに。人ってのはホントにくだらない。

薄れ行く意識の中、俺は同調するように呟く。

弱くて欲深く、偽善で偽悪、狡猾で中身のない正義を振りかざし、高いプライドを持つが一切の信条を掲げることもなく、ただただ、人生という水の中を流れるままに生きる。

それが人間。

ドロドロに濁った眼をした幼い頃の俺の頭の中にはそれしかない。視野を広げず、馬鹿みたいに悲劇のヒーローを気取る俺には自分を正当化する理論しか持ち合わせていなかった。

だけどその反面、不思議な魅力でそんなことを忘却させてくれ、甘ったるい位に優しく、熱くも冷たくも無いぬるま湯に浸るような居心地の良さを感じさせてくれるのも他ならない、人間という生き物だ。

だが時雨亜沙という先輩、人柄に出会い、初めて稟達以外の絆が出来た時、俺が思い描く人間像は少し変わった。

この街に帰ってきてから俺は、生まれて初めて人間という生き物を認知し、認めるという行為を行った。

結局のところ、人間なんてものは良いところもあれば悪いところも有る、プラマイゼロの生き物。

うん、それに気づいただけでも大きな進歩、とても喜ばしい事だと思っ。

.....

.....

.....

あーうん。今なら何となく・・・何となくだが解るような気がする。

以前、先輩が俺に言っていた“ツンデレ”の意味が。

他人に冷たく、放任主義だと言っても最終的には手を貸し助言するこの性分は第三者 他の人から見ると確かにツンデレっぽいのだろっ。

なら認めてやるっではないか。

稟に負けじとも劣らず、意地っ張りで頑固者な俺は、“少しばかり” ツンデレなんだということ。

.....

「.....やっぱ前言撤回で」

寝ぼけ眼を擦りながら誰に語るのでもなく一人ベッドの上でそんなことを呟く。

夢とは言え事実だと認めた瞬間、体内に有るやる気やら気力やらが一気に削がれ、ものつすごく萎えた。

あんなの無し、却下だ却下。第一何なんだよ、男のツンデレって、んなもん流行らんよ。

くさくさした気分を体内から出すように俺は大きく息を吐く。

・・・それにしても気持ちが悪いくらいリアルな夢だった。

ベンチの固い感触、風の冷たさもやさつきまで稟に向けてた嫌悪感もまだ胸に残っている。

ベッドに入ったまま大きく伸びをすると近くに転がっていた携帯を取り時間を確認する。

8時30分。

普通ならいくら頑張っても遅刻確定の時間帯。

だが昨日から学校は春休みに入った為その心配は無い。安心して二度寝に入れる。

じゃあまた。バーベナ学園でねー

先日、学校内で行われた三年生の卒業式。

バーベナ学園の入試に無事合格した先輩は卒業証書を片手にそう言

い残すと、何も変わらず、涙すら見せないまま学校を卒業した。

逆に料理部と一緒に頑張ってきた楓や、よく先輩と買い物していた桜の方が眼に涙を溜め、凜と宥めるのに大変だったのを覚えている。

(・・・まあ、先輩らしいっていえば先輩らしいのかな)

ゴロリと俯せに為りながら、俺はしみじみとそんなことを考える。

遺恨を残さず、さっぱりとした笑顔で去る。

強気で竹を割ったような性格の先輩らしい別れ方だ。

まあ

「最後の最後で弄れなかったのが少し残念と言えば残念
へえ、タクちゃんそんな事考えてたんだ・・・ボク知らなかった
なあ」・・・

もう春だというのに背中にダラダラと冷や汗が流れる。

今、俺の背中越しに聞こえた声は何だ？

いや考えるまでもない。

俺の知り合いに“ボク”なんて一人称使う人なんて二人しか居ないのだから。

・・・いやまあ、昨日俺は確かに鍵を掛けた、どうやって入った？
ピッキング？まさかドアを蹴破ったのか？でもそんな音は　　まて
まてまて！少し落ち着け。

暴走しかけた思考を無理矢理落ち着かせ、ひとまず深呼吸をする。

「で、何でここに居るんですか 先輩」

「んーなんでだろうねー」

そう答えるのは先日学校を卒業した亜沙先輩。

先輩はやる気の無い返答を返すと、笑いながら俺の脇腹にグリグリと指を押し込んでくる。

グリグリグリ……。

「……いや先輩、地味に痛いんで止めてもらえます?」

「ええ〜?やだ」

「止めないと不法侵入で警察に連れていきますよ?」

「……」

どうやら自分が悪いことをしている事は解っているらしい。

先輩はゆっくりと俺の脇腹から指を離し顔を横にずらすと、「ごまかすように下手くそな口笛を吹く。」

先輩の地味な攻撃から解放された俺はベッドから身を起こし近くのカーテンを開けると、ボサボサに乱れた髪を撫で再び大きく伸びをする。

窓から差し込む淡い日差し。

日の光を身体一杯に浴び、清々しい気持ちに浸りながら、俺は未だに下手くそな口笛を吹く先輩にむかいこう言った。

「んじゃ先輩。飯食つたら一緒に警察行きましようか？」

「ええっ、この流れで！？タクちゃん許してくれたんじゃないの！？」

「アツハツハ。誰がそんな事言いました？とりあえず、世の中はそんなに甘くないって事をその身に刻んで下さいね」

慌てふためく先輩を余所に俺はリビングへと下りていく。

・・・どうやら蹴破ったという線は無いらしい。

未だ玄関に顕在するドアを眺めた俺は感量深くそんなことを思いつつ、リビングへと入る。途端、懐かしい香りが香腔を通り抜ける。

香りの出所はどうやらコンロに置かれた片手鍋の中らしい。

蓋を開け、中を確かめるとそこには温かそうな味噌汁が湯気を漂わせ、そして近くに備え付けられた炊飯器の中には炊きたてのご飯があった。

「タクちゃんってちゃんと料理出来たんだね」

きつとそれは味噌汁を作るときに見たであろう冷蔵庫内の生鮮食品などを見ての感想なんだろう。

リビングへと下りてきた先輩は唐突にそんなことを言い出す。

「出来たんだねって・・・俺、たまにだけ弁当持って行きますよ？」

「うん。でも中身が冷凍食品だけだったり簡単な焼き物しか入っていないってのが多かったからホントは苦手なのかなあって」

先輩は軽く笑いながらそう言うのと唐突に“やっぱり迷惑だったかなと？”と控え目に聞いてくる。

不法侵入しといて今更迷惑も何も無いだろ。

心の中で呆れ、苦笑しつつもこうして朝飯を作ってくれた先輩に感謝の意を示すように笑顔で返す。

「驚きはしたけど迷惑だとは思ってませんよ・・・まあ不法侵入はもう勘弁ですけど」

「アハハ、ごめんね。ボクもやりすぎたよ」

「・・・その前に先輩。どうやってこの家に入ったんですか？つてか先輩、俺ん家の場所知ってましたっけ？」

「ああ、それはねえ」

先輩は得意そうにそう言うのとポケットを探り、一本の鍵を取り出す。

ストラップも付いてなく、飾り気のかの字も無いそれは最早言うまでもない。

この家の合い鍵だった。

「・・・えっ？まさか先輩、勝手に合い鍵作ったんですか？」

「今更なんだけど、タクちゃんの中のボクの評価って一体全体どうなってるのかな？」

ややムツとした表情を浮かべたと思うと先輩は否定の意を示す。

まあ、いくら先輩でも流石にそれは無いとは解っていた。
だがだとしてもだ、何処から入手したかも分からない鍵を持って
いたら誰だって疑わずにはいられないだろう。

「もう。これは稟ちゃんから借りたもの　あれタクちゃん？急に
携帯取り出してどしたの？」

「いえ、とりあえず先に稟を突き出そうかと」

「何処に!？」

どうやら犯罪を犯していたのは稟だったらしい。

旧友にこんな形で別れを告げるのは辛いがここは心を鬼にし携帯の
ダイヤルを押す。

だがそれは先輩の一言により打ち止められた。

「　　待つて待つて!っっていうかこの鍵はタクちゃんが直接稟ちゃ
んに渡したんでしょ!」・・・はい?」

それは全く身に覚えの無い行動。

軽く頭を押さえ過去へと記憶を探ってみるものの何時、何処でそん
なことをしたのか全く思い出せない。

・・・まあ、いつか。

あいつがこういう事に関して嘘を付くなんてことはまず有り得ない
し、それに持つてたら持つてたで何かと便利は良いだろう。

考える事がめんどくさくなつた俺は勝手に自己完結すると再び先輩
へと視線を向ける。

「・・・で、何でその稟に渡した鍵を先輩が持つてるんですか？」
「今朝稟ちゃんにタクちゃんの家聞いた時にボクに貸してくれたんだ」「あいつ絶対に居留守使っんでいざとなったらこれ使ってくたさい」って」

「いや、居留守使う前にインターホン聞こえなかったですよ？」

「うん。だって鳴らしてないんだもん」

「・・・ハア」

飄々と言つてのける先輩に最早ため息しかでない。

だがこんな事にいちいち突っ込んでても話は進まない。

いくら知り合いだとはいえ法律に対し土足で踏み回る先輩に、俺は痛む頭を押さえつつ、今回の根本的な理由を投げ掛けることにした。

「で、先輩は何でこんな朝っぱらから家に来たんですか」

「ん？遊びに来た兼タクちゃん家の場所の確認と疚やましい本とか持つて無いかの家捜しかな？あ、因みに稟ちゃんは二冊くらい持つてたよ」

ああ稟、ご愁傷様です。

きつとこれは勝手に俺ん家の鍵と場所を教えた罰なんだよ。是非とも、二人の妻に心を折られるまで叱られてください。

今頃芙蓉家内は泥沼、もしくは阿鼻叫喚の地獄絵図なんだろうなとしみじみと思いつつ、俺は心の中で稟に黙禱を捧げた。

っていうかあいつ、よくあんなナリでそんな雑誌買えたよな。

児ボ法と店員、ちゃんと仕事しろよ。

「・・・で、先輩。肝心の疚しい本は見つかりましたか？」

俺は意地悪く笑いながら先輩にそう問い掛ける。

俺は健全な生き物なのでそんな本は一冊も無いし、そして先輩も事前に家捜しを終えてたのか首を横に振ると軽くため息を付く。

「もう、タクちゃんはもうちょっと稟ちゃんみたいに欲望に忠実に生きなきゃ駄目だよ？」

「忠実に生きたら生きたで稟みたく荒らされるのがオチでしょ？」

「・・・むう。まあ確かに」

「ああ、否定はしないんですね」

驚きつつ、呆れつつ。苦笑でそう返すと先輩は華が咲いたような笑顔で“もちろん”と返す。

「よし！問題も解決したしそろそろ朝ご飯にしようか。タクちゃんは座っていいよ、ボクが装ってあげるから」

「じゃあ、お願いします」

先輩の好意に甘え、リビングにある椅子に座り、先輩が作ってくれた料理が来るのを待つ。

食器棚から食器を取り出す音、ご飯をつぐ際に聞こえるしゃもじがお碗を擦る音。

何度か学校の家庭科室で先輩の料理を食べたり、芙蓉家で楓や桜の手料理もご馳走になったが、やっぱりこの家、この空間で聞くとそ

んな何気ない音でも全てが懐かしく聞こえてくる。この空間で聞くとそんな何気ない音でも全てが懐かしく聞こえてくる。

懐かしい　それはかなり昔、まだ母さんが生きてて、あの馬鹿野郎がまだこの家に居た頃の事を彷彿とさせた。

うん、たまにはこんな日があってもいいのかもしれない。

リビングから見える先輩の後ろ姿、長い髪の毛を尻尾の様にフワフワと動かす仕種を見ていると思わず、そんな想いも沸いて来る。

確かに過去はいい思い出ばかりじゃないが、決して悪い思い出ばかりという訳でもない。

(やっぱり丸くなったな・・・俺)

きっと一昔前の俺なら皮肉の一つや二つ言って懐かしむことなんてしなかった。

きっと一昔前の俺なら弱くなったと嘆き、こんな日々が嬉しいとは思わなかった。

(　　こんな日も・・・悪くないのかもしれない)

でも今の俺は違う。

俺は弱くなったんじゃない、これは嘆く事なんかじゃないと否定できる。

一歩踏み出せたんだと、やっと成長できたんだと喜び、歓喜すべき事なんだと胸を張って言える。

窓から差し込む春先の日光。

夢の中で浴びたあの日の暖かさ、懐かしさに浸りながら俺は喜びを噛み締め、そして照れ隠しするように独り、シニカルに笑うのだった。

閑話 凧の日々(後書き)

久しぶりにアクセス数を拝見するとPV 三十万オーバー。ユニーク数 四万五千オーバーと嬉しい数値が。

なので今回は本編から少し離れまったりとした日常を書いてみました。

これからも変わらずの鈍速更新ですが、ゆるりとまったりと読んでいただけたら幸いです。

誤字、脱字の指摘。

ご意見感想お待ちしております。(。。(。)/

第十九話 分岐 「前編」

ザア・・・。

暖かい熱気を孕んだ風が並木道を通り抜けると、左右両方に均一に植えられた桜の木は花びらを数枚落とし枝を揺らす。

季節は春。

暖かい気候、花に彩られたこの季節は出会い、そして別れの季節でもある。

学生なら卒業式や入学式。
社会人なら新入生や転勤。

そして今年三年生に進級した俺達に待ってるのは受験という分かれ道。

亜沙先輩の誘いに何となくノリでバーベナに入学することを決めた俺。

芙蓉家に居候している身分で進学しても良いのかと悩む稟。そんな稟を心配する楓は俺と同じくバーベナに進学することを決めたのに対し、桜は夢を追い掛けるためこの街を離れることを決意した。

桜の進学に関してはまさに寝耳に水。
初めて聞いた時は驚き、亜沙先輩共々引き止め、食い下がりました。

だが桜の夢に向かう確固たる意思を確認した俺達は最終的に桜を大手を振って見送ることにした。

桜とあと一年で離れ離れになるのは寂しい。

だがそんな安っぽい感情で止められるほど桜の夢は軽くない。

それに誰よりも強くそれを感じているのは誰でもない、当事者の桜なのだから俺達に残された道は桜の背中を押してやる、ただそれだけだった。

「はてさて、これからどうなるのか。見物だねえ」

凜は一体どんな答えを出すのだろうか。

ヒラリと舞う桜の花びらを見上げそんな独り言を漏らす。

そして心行くまで堪能した俺は並木道から外れ、目的であった日用品を買うため木漏れ日通り沿いにある商店街に向かい歩き始める。

そういえば街に帰って間もない頃は商店街に辿り着けなかったり、仮に辿り着けたとしても目的の場所に行けなかった事もあったが半年近く通い続けた今は何の問題もなく行ける。

(・・・俺も成長したなあ)

情けないがしみじみと痛感させられる現実。

だがこれで方向音痴なんてレッテルも貼られなくてすむのは喜ばしい。

(さて、済むもん済ませてさっさと帰るか)

眩しい春の日差しに眼を細めながら俺は目的を果たすため、商店街内を黙々と歩いて行くのであった。

.....

春は出会いと別れの季節。

桜の花びらが可憐に散るこの季節にはそんなジンクスがある。

そのジンクスについて俺様はあれこれケチを付けるつもりは毛頭ない。

社会では新卒者達が入り、同時に社会人達はこの時期には転職といった入れ代わりも激しい。

学生にとっても卒業式、入学式といった有り触れた別れ、そして出会の行事が行われたりするのでそんなジンクスにも確かに一理あるとは思う。

そんなジンクス 出来ても仕方ないとさえも思う。

だがだからといって俺様はこの季節に他人と別れてもそんなジंक
スを感じたり思ったりもしない。

それどころか俺様は他人に運命的な出会いを求めたり出会いに心を
躍らすといったこともない。

何故？

そう理由を問われれば俺様は逆にこう尋ねるだろう。

何故君達はそんな当たり前の事を特別視するんだい？ と。

小中高と、学校は何年制と決まってる。

ならその時間を過ごし消費してしまえばいずれ別れが来るのは道理。
社会人だってそうだ。

歳を取れば人はいずれ退社、勤務中には転勤する人もしくは嫌にな
り辞める人も居るだろう。

新卒者もそうだ。時期になれば来るのは当たり前、みんなそれを覚
悟の上、認知の上で入社し働いている。

ほら、出会いも別れも 大抵は予想できるもの。

死別といった特殊な場合を除いて別れなんて全て予想出来るものじ
やないか。

なのに何故みんなはいずれは訪れる別れに、いずれは必然的に来る
出会いに心を躍らせたりする？ 離別の悲しみに暮れる？

全くもって解らない。

別れや出会いに特別な感情の欠片も抱いたことのない俺様には全く解らない。

相変わらず夢がないのですよ。

冷めた奴、大人ぶったいけ好きな奴など周囲から囁かれる俺様にとって、唯一の話し相手である彼女 幼なじみの彼女に似たようなことを話した時はそんなことを言われた。

ふん。別に構わないさ。

俺様は簡易に、興味なさそうにそう返した。

現実問題、夢なんて見なくても生きて行ける。

夢なんてものは、所詮現実から眼を反らすための道具 弱い人間が見る空想にしか過ぎないのだ。

だからそんなものに思いを馳せても何も意味を為さない、為らない。

大事なのは今なんだ。

現実から眼を反らして、逃げて一体何になる？夢を見て一体何にな

る？

もがいて、足掻いてこそ人は前に、未来へと進める。

そう解っているからこそ俺様はこのスタンスを一切変えない。

俺様は他人に妬みも、嫉妬も、羨望も。

自身には夢も、空想も、妄想も、想像も、幻想の一片も抱かない。

抱くぐらいなら行動しそれを顕現させる。

俺様に見えるのは夢でも理想でもない。ただ目の前に広がる現実^{リアル}

それだけで十分だ。

良く言えば有現実行の現実主義者^{リアリスト}

悪く言えば悠々自適、手前勝手な利己主義者^{エゴイスト}

それが俺様　　緑葉　　樹という存在を形作る形象だった。

「　ふう」

光陽町の駅のホーム。

電車から降りた俺様は小さく息を吐く。

ホームを上がり駅構内へ、そして改札口に居た駅員に切符を渡し外へと出る。

光陽町。

国立バーベナ学園設立に伴い、人間界で神族や魔族が差別無く平等に暮らせることをコンセプトに発展した街だ。

駅周辺には若者向けとして建てられたショッピング街。

そしてショッピング街を抜けた奥には生活用品や日用品を豊富に取り揃えた商店街　木漏れ日通りがある。

(ふん・・・確かに凄いな)

駅に有った街に関するパンフレットを片手に、俺様は素直にそう評価する。

昔と比べると少なくともはなったが未だ各地に根強く残る異族との壁。

それは差別だったり、異族が持つ魔法に対しての畏怖だったりと様々　だがこの街の人はそんな境界線など微塵も感じさせない。

一歩街の中へと踏み込むと至る所に神族と魔族の姿があるがどの人も共通しているのは皆、楽しそうに話し、そして互いに笑い合っ

いる。

それは暖かく、傍観するこっちにまで微笑ましい感情が伝わってきて……多少、羨ましくも感じた。

「……ふん」

他人が持つものを欲しがるのは人の悪い癖だ。
くさくさした気持ちを切り替えるように大きく息を吐く。

そして小さく頭を振り、メガネのブリッジを上げると商店街へ
木漏れ日通りの方角へと歩いて行く。

向かうは国公立バーベナ学園。

この街が有名になった大元の理由であり、三界交流のシンボルとな
った学園へ俺様は黙々と歩みを進める。

「……流石に壮観だね」

広大な敷地にずっしりと佇むバーベナ学園。

巨大な校舎に引けを取らないほど巨大な体育館。

校内に設置されたテニスコートには春休みだというのに男女の部活
生が練習に性を出し、やや離れた所にある野球場ではバットとボー

ルがぶつかり合う軽快な音が響いていた。

青春だねえ。

「・・・ふむ」

外観、校風、施設。

どれを取っても今まで見てきたどの学園、学校よりも質が高く迫力もある。

流石は三界を代表する施設と言ったところか。

これからは魔法主体のビジネスが流通する。

人族にとって未知の力である魔法。

攻撃、強化、治癒、変換などの柔軟性を持ち、そしてここ数年間の飛躍的に発展した医学、魔法を組み込んだ高度な工芸やそれに伴う技術者の向上。

そして三界交流による貿易、流通の進歩などをトータルで考えた時、誰しもがその答えに行き着くだろう。

そしてこれからの未来。

高校、大学を卒業した将来、社会で成功を納める為には一体どうしたらいいか。

そう考えた時に導き出した答えがこの学園
国公立バーベナ学園
だった。

学力の高さは勿論のこと、三界初の魔法専攻の学問 魔法学。

異族の講師を招き人種関係なく魔法について学ぶ、俺様に唯一足りない知識を学ばまさにうってつけの授業。

「・・・フフッ」

この学園は俺様が思い描く将来へと続く掛橋になる。

込み上げる笑みを噛み殺しながら俺様は木漏れ日通りへと歩き始める。

目的地は木漏れ日通り内にあるフローラという小さなカフェ。

フローラは軽食は勿論のこと、ケーキやコーヒーといったサイドメニューも充実し、光陽町内でもかなり有名な店だ。

光陽町に行くんだったらフローラでお土産かってくるのですよ。あつ、ついでにどんな街だったかちゃんと教えてねー

(・・・別にコーヒーを飲むついでだ)

家を出る前に言うだけ言いとつと遊びに行きやがったナイチチパパラッチの幼なじみに吐き捨てるように呟く。

(っていつかあいつ俺様が光陽町行くなって何処からその情報仕入れたんだ?)

相変わらずあいつの情報網は凄まじい。

それをもっと別の用途で使ってくれればいいのに。

感心するように、そして呆れたように俺様はため息を吐き歩き出す。

「おっと、これはこれは。そこにいるのは緑葉先生ではないですか」

「おっ、先生も学園の見学ですかい？」

が、ピタリと。背後から掛けられた複数の声に俺様は数歩も歩かない内に足を止める。

不自然なまでに友好的、丁寧な声。

(ハア・・・)

振り返るか否か。

一瞬迷った俺様は最終的に振り返らず、そのまま目的であった木漏れ日通りへと再び歩き出す。

「チツ、おい！無視してんじゃねえよ！」

「・・・ああ、君達か」

肩を捕まれ強引に引かれる前に手を弾き、さも今気付いたかのように取り繕う。

声を掛けてきたのは男二人組。

大して似合っていない金髪を肩まで伸ばし、お洒落のつもりなのか片方は鍍金が剥げかけているネックレスを付け、もう片方は耳に複数のピアスを付けていた。

「やっぱ先生もこの学校受けるんですかあ。頭いつすもんねえ」
「はっ！まあ天才の緑葉先生から言わせたらこんな学校楽勝っしょ？」

外見、口調、中身とともにただの意気がった不良崩れ。

ただ悲しい事にこの馬鹿二人組は同じ学校に通う、いわば同級生だった。

・・・ああ、うざりたい。

利無く、害しか産まない存在。

名前も知らないこの二人組は何かしら理由を付けて俺様に絡んで来る。

幼なじみ曰く俺様が成績優秀の優等生だから。

幼なじみ曰く俺様の見下すような態度（一度たりとも意識したことはないが）がただ旦に気に入らないから。

幼なじみ曰く俺様がちよっつとばかし異性にモテるから。

まあ、総じて言えばこいつらは俺様が気に入らなく、一方的に嫉妬念を燃やしているだけ。

・・・はあ、くだらないね。

これ以上時間を裂かれるのは避けたい。

そう考えた俺様は未だ何かを言いつづける馬鹿二人組を一瞥すると踵を返し木漏れ日通りへと歩き始める。

「！」

「い！」

背後でベラベラベラベラと五月蠅い轉りが聞こえる。

所詮意気がるだけ。

俺様に手を挙げる事もできず無駄な悪態しか出来ない奴ら。

未だ空虚な言葉を発する不良達。

俺様は無視を決め込み、黙々と歩を進める。

「ツチ、おっと、そうだ。緑葉先生にはハーフの幼なじみが居たっけなあ！」

「おっ、そうだったそうだった！」

でもさあ、あいつ正直気味悪いよなあ！」

まだ後ろで馬鹿二人組が悪態をついでる。

しかも反応しないと解って、今度は“あいつ”に標的を移したか。

目に見えた挑発。

くだらない。

そんな挑発に引っ掛かると思っているのか。

俺様が突っ掛かるのを待っているように不良二人組は更に声を張り上げ蔑むようにあいつを批難する。

「そうそう！ハーフの癖して魔法の一つも使えねえ出来損ないの幼なじみが居たよなあ！」

「まあ、けど虐めても虐めても泣かないってのはいいよなあ！お陰で良いストレス解消にもなるし？」

「……………」

くだらない……くだらないくだらないくだらないくだらないくだらない。

頭では解ってる。

所詮挑発。

度胸の無いこいつらにあいつを殴ることは疎かそうという類の行為をしたことないことも解ってる。

解っている。だけど……

気が付けば俺様の足は止まっていた。

「おまけにイビルアイと来たもんだ！あんな眼で見られたら気味悪くて仕方ねえよ！」

「ハハツ、確かに！気味悪いしム力つくから休み明けにでもまたあいつ虐めてやるうか？」

「だな！どーせあんな奴虐めても誰も気にしないしなあ！」

「

聞くに堪えない不毛な会話。自然と右手に力が籠る。

どうせこいつらとはあと一年の付き合いだ。ここらで引導を渡すのも悪くない。

沸騰しきった頭は普段は考えもしないかなり過激な答えを導き出す。そして身体が理解した瞬間、俺様の身体はほぼ無意識の内に動いていた。

「

まずは右足を軸に力を乗せ身体を半回転させると油断しきった不良の片割れの右頬を込めれる限りの力を込め打ち殴る。

ガッツ！と鈍い音が鼓膜に届く。

アスファルトに倒れる不良は頬を抑え呆然と俺様を見上げる。

驚愕、後悔、そして恐怖。

様々な感情が入り混じった不良の表情は実に小気味よい。

自然と俺様の口元にはうつつすらと笑みが浮かび上がる。

「　　っのお！」

そしてやっと状況を理解したのか、もう片方の不良が拳を振り上げ殴り掛かってくる。

だが頭に血が上っているせいか、向かって来る不良の拳を視認しているのに身体が全く反応しない。

再び鈍い音が鼓膜を伝い脳に届く。

同時に頬に痛み、口内には血の味が広がる。

どうやら歯で口の中を切っただけらしい。

「……………」

「　　ひっ」

口内の血を吐き、睨みを利かせると相手の身体は強張り、情けない声漏れる。

やはり思った通り。

こいつらは所詮口だけの不良。喧嘩慣れは疎か軽く睨んだだけでこのぎまだ。

「……………」

情けない。

相手がという訳ではなく、自分が 情けない。
軽く自己嫌悪に陥るほど恐ろしく情けない。

こんな奴らの挑発にみすみす乗り、いざ相手に取れば軽く睨んだだけで怯えるというこのさま。

熱くなったこつちが馬鹿を見る。

興醒めだ。

乱れた衣服を正し、付いてもいないホコリを叩くと本日二度目となる目的地 木漏れ日通りへと歩き出す。

「 まっ、待てよ! 」

「 …… 」

またもや掛けられた声。

だがこれ以上時間を裂かれるのは避けたいこの状況だったため俺様は特に意に介することなくただ黙々と歩く。

「 おい! れは いって! 」

「 うるせえ! に よー! 」

つち、五月蠅いな。

二人組との距離は大分離れた筈なのに未だ背後で何かを言い争う不良に軽く舌打ちを打つ。

だがその言い争いのような会話も俺様が予想していたよりも早く終わる。

不自然な程早く、まるで“会話を打ち切ったような早さ”で終わる。

「
」

所謂、虫の知らせと言つものだろう。

嫌な予感が体中を駆け巡るとほぼ同時。背後を振り返る。

まず眼に映つたのはこちらへ駆けて来る不良の姿だった。

頬が腫れてないのを見ると彼は俺様を殴り、怯えた方の不良。

明らかに怒気を孕んだ表情。だがそれでいて彼の口元にはうっすらと笑みが浮かび、彼の表情には狂気が満ちていた。

一瞬、彼が何故そんな狂ったようにこちらへ向かって来るのか理解に出来なかった。が、そして彼の目的もすぐに理解した。

彼の手の中に握られた鈍く光るナイフ。

折り畳み式の刃渡り十センチも無いようなサバイバルナイフは一目見ただけで安物だと解る。だが歴れっきとした凶器は矛先を俺様に向け、その鋭利に尖った刃先は俺様との距離を徐々に縮めていた。

一瞬、頭の思考回路が麻痺する。

明らかに先のやり取りから産まれた怒りの余り、彼からすれば咄嗟に取ってしまった、無意識の行動だろう。

その証拠に片方の不良は必死に叫んでいた。

止める！ と。

だがそれは被害者になるであろう俺様にとっても、そして当事者、加害者である彼等にとっても遅すぎた。

俺様と向かって来る不良との距離はもう十メートルも無い。

賽はもう投げられた。

防御しようにも頭が麻痺したこの状態では何処に来るのか予測すら出来ない。

あと五メートル。

避けようにも突然の事に硬直した脚は地面にへばり付き一歩も動か

ない。

何処をどう見てももう詰んでいるこの状況。

あとは 刺されるだけ。

あと三メートル。

走馬灯のように見える景色がゆっくりとスローモーションになっていく。
やがて腹に刺さるであろうナイフの先、相手の表情や周りの情景がくつきりと見ることが出来た。

身体は麻痺しているのに脳はちゃんと機能している。

何とも不思議な気分だ。

防御も回避も諦めた俺様はもうすぐ来るであろう痛みにも備えギョッと眼を閉じる。

あと・・・零メートル。

どんっ！と目論見通り、脇腹に衝撃が走る。

「 っあ！」

肺から空気が漏れ込み上げる痛み。思わず声が漏れる。

額から脂汗を流しながら、俺様は脇腹を押さえ、後ろへよろける。眼を閉じているので解らないがきつと自分の脇腹からは血が溢れ地面に斑紋を作っているだろう。

そう思っていた。

「・・・えっ？」

刺されてから十数秒たった今、俺様はようやく“痛まない脇腹”に気づき咄嗟に眼を開ける。

無い。

傷が無い。脇腹から血が出てない。

いや、それどころか凶器のナイフすら刺さっていない。

これは一体・・・どういう事だ？

何が起きたのか解らなかった。

自分が見ているこの状況を受け入れる事が出来なかった。

いやまて、そもそも俺様は本当に痛みを感じたのか？

脇腹に衝撃が“あつたから刺された”と勘違いしただけ痛みが走ったと勘違いしただけではないのか？

カランっ……。

思考がそこまで行き着いた時、前方から乾いた音が響き俺様の意識を覚醒させる。

アスファルトに転がった一振りのナイフ。

てらてらと光った刃にはベツトリと赤い液　血と思われるモノが付き、刀身を真紅に染めていた。

何だ？何がどうなってる。一体何が起こった？

次々と起こる不可解な事象。

鼻孔に漂う鉄臭さに精神は追い付められ上手く思考を働かせる事が出来ない。

「あっ」

そして俺様はようやく気付いた。

俺様の前方　不良との合間に一人の男が立っていることに。

やや癖のある黒髪。

肉付きの良い体格、後方から見る彼の背中力は強く、頼もしい。

そんな彼の左手からは真っ赤な“ナニカ”が溢れ出していた。

朱く、艶やかで、そしてなめかしい　彼の血液がとめどなく、
ただただ、流れ行くままに流れていた。

春は出会いと別れの季節。

俺様はそんなジnkスは信じないし運命なんて浮ついた事も信じない。

出会いはただの偶然。

別れはただの必然。

だから信じない。

ただ・・・確かに一理あると思う。

春は別れ、そして　出会いの季節。

そんな魔法地味た力が働く季節に、俺様達は出会った。

相沢タクトという　人間らしくない人間に。

そしてこれから俺様の親友　もしくは悪友となる存在に、俺様は

出会った。

第十九話 分岐 「後編」

幼なじみの女の子が虐められていた。

理不尽な 完膚なきまでの不条理な理由で虐められていた。

だけど誰も助けない。

彼女の育ちが特殊だから。彼女の容姿が少し特別だからという理由で誰も助けない。

皆が皆、見て見ぬ振りを貫く。

その時から俺様は綺麗事だけでは。正義を振りかざすだけでは前に進めないと理解した。

俺様は他人より少しだけ、勉強が出来た。

教師から褒められ得意になった俺様はその日から勉学に励み、人一倍努力しひたすら知識を蓄えた。

すると次第に教師からクラスの誰よりも賢いという評価を貰うようになった。

結果、俺様はクラスメイトから嫉妬の念を一心に浴びることになった。

最初は鼻屑だと喚き、次第に才能という一言だけで終らせた奴らは

薄汚い恪気の念を俺様に向ける。

差別、嫉妬、妬み。

それが無駄だということに気づかない。何の益にも為らないことに誰も気付かない。

気がつけば、俺様は人と距離を置くようになった。

淡々と物事を進め、初めから裏切らないと分かっている知識だけを詰め込む。

誰とも群れず、ひたすら人との距離を置いた。

結果、俺様の周りには幼なじみ以外友達と呼べる存在は一人も居なかった（幼なじみの方もどちらかと言えば悪友と言った方がしっくりと来るのだが）

次第に俺様は、努力して得た知識を才能の一言で終わらせ、嫉妬し、ただ切望するだけの他人に興味を見出だせず見下すようになった。

だけど俺様は一度たりともそれを間違ってると思ったことはない。寧ろ、そう感じることに對して当然だとも感じていた。

他人より頭が良いからこそ人間の汚い部分を、醜い部分に敏感だった俺様は成長した時、夢を描くことを止めた。

成長した俺様は誰よりも現実主義者リアリストだった。

他人の様にこうなったらいい、こんな風になりたいなんて希望や望みは一切持たない。

“ なりたい ” んじゃない、俺様は “ なるんだ ”

他人の様に目標を夢や想像、空想で終わらせたりはしない。

努力して　それがどんなに難しくても困難な道でも努力して努力して努力して努力して努力して　いずれ現実にしてみせる。

所詮この世は結果がすべて。

嫉妬するならすればいい。妬むなら好きなだけ妬めばいい。

俺様は　前に進む。

そう決意してからの俺様はひたすら努力した。

同時に、誰とも深く関わる事はしなかったし、故に誰にも迷惑を掛けずに生きてきたとも自負している。

なのに・・・なのにどうしてこんな事になってしまったんだろ
う。

俺様の眼前に佇むのは俺様の身代わりとなりナイフを受けた一人の
男。

彼の指先から流れる血はアスファルトへと落ち、小さな血だまりを作る。

自棄になり、襲い掛かってきた不良はやっと冷静さを取り戻したのか、自分が招いた結果に顔を青く染めていた。

「お、おい！」

状況に着いていくことが出来ず硬直していた俺様は走り、彼に声を掛ける。

「！！！」

彼に駆け寄ると手の怪我の酷さがよくわかる。

安物のナイフで切り付けられたせいか、はたまた切り付けられた角度が悪かったせいか。彼の右手の平の皮膚は裂かれ、夥しい量の血が流れ出ていた。

「……っ、くそ！」

再び鈍りそうになる思考を大声を出し振り払う。

こんな時、一体何をどうすれば良いのかの判断さえまともに出来ない。

情けない。

不甲斐無い。

だらしが無い。

俺様がそんなだから彼が巻き込まれ、怪我したんじゃないか！

悔しさの余り噛み締めた奥歯がギリツと嫌な音をたてる。

とりあえず未だ何も喋らない彼の二の腕を取り、止血しようとして着ていた上着を無理矢理引き千切り巻き付ける。

医学関係の知識は皆無だがやらないよりはマシだろう。

「ひっ！お、お前！」

そんな時だった。

されるがままの彼の二の腕に上着だったモノを巻き付けた瞬間、今まで狼狽していた不良が小さく息を呑み、彼の顔を指差した。

動揺した表情。

平静を失った不良の指先は小刻みに震えていた。

「お、お前何なんだよその眼！」

・・・眼？

何の脈絡もない言葉を疑問に思った俺様は彼の眼を覗き込み、そして俺様も不良同様、息を呑む。

(あいつと・・・麻弓)と一緒に紅と蒼のオッドアイ)

だがあいつみたく、はっきりとした色合いでも鮮明な色合いでも無い。

彼の眼は麻弓の紅と蒼に黒の絵の具を混ぜたような、少し濁り気味の紅と蒼だった。

「き、気持ち悪い！こっちみんな！化け物！」
「・・・・・・・・」

不良の罵倒を彼は何も言わず、無表情のまま聞いている。

見慣れた筈のオッドアイ。

俺様はこの不良達のように異族や特異な外見の人に対して差別や卑下た対応は決して取らない　だがそんな俺様でも彼の瞳は明らかに変だと、特異だと評価せずには居られなかった。

「　　ハア。あのさあ」

やがて不良の反応に呆れた様に、彼は頭を掻きながらゆっくりと口を開く。

その声色、態度は至極面倒臭そうに。
そして彼自身、そんなことどうでも良いと言わんばかりに怠そうだった。

「もうちょっとさ、こう・・・リアクションに変化というかバリエーション増やしたりとか出来ないわけ？いい加減　　そういうの飽きた」

「は、はあ？お前何言って　　ブヘッ！」

平静を取り戻して来た不良は軽口を叩こうとする。

だが不良が言い終わる前に、彼の拳は不良の顔面にめり込む。

ゴツッ！という鈍い音が聞こえたとほぼ同時、不良の身体は一瞬浮

き上がったかと思うとそのまま後方へ吹き飛ばされる。

そして地面の上を水切りの如く跳ねながら、数メートル転がるとい
う明らかに人間離れの芸当を俺様ともう一人 後方で啞然とした
ままの不良に見せ付けた。

「 で、そのあんたもあんなふうになりたい?」「ひ、ひいつ
！近づくんじゃねえよ！ば、化け物お！」
「はっ、それしか言えないのかよ?」

不良の片割れは倒れている仲間を背負うと一目散に走り逃げていく。
吐き捨てた不良の台詞に答えるように、彼は鼻を鳴らすと殴った拳
を痛そうに揉んだ。

“ 化け物”
“ 気持ち悪い”

幼い頃、俺様の幼なじみ 麻弓も差別に苦しみ、時に彼と同じ事
を言われ泣いたり、落ち込んだりして何とか乗り越えてきた。

ただどいくら辛い差別を乗り越えた麻弓でさえ、彼のように達観した
ような台詞を言った事はない。

“ 慣れた”
“ 飽きた”

間を置くことなく。
顔色一つ変えず平然とそう返した彼は一体、今までどんな人生を歩
んできたのだろうか。

それはきつと、彼と似た境遇である麻弓でさえも理解出来ないだろう。

「……ありがとう。怪我、大丈夫かい？」

もやもやとした感情を胸に抱きながら、静寂を破る様に俺様は彼に近付き、礼を述べる。

「別に……こんな気にするほどのもんじゃない」

「いや、気にするなっていうのは無理な相談だろ」

子供の様に強がり、刺された手を痛そうにプラプラと振る（刺されたというのに随分軽いアクションだ）彼に俺様は苦笑を浮かべる。

「じゃあとりあえず病院に行こうか。化膿でもしたら大変だ」

「……別にいい。そんなところ行かなくても怪我ならもう治った」

「あーはいはい。そうかい」

ぶつきらぼう返す彼は心配される事に馴れてない様に頬を掻くと、唐突にそんなことを言い出した。

ハア、何を言い出すのかと思ったら。

適当な相槌を打つと同時に怪我の具合を調べるため彼の手の平を掴む。

第一、こんな酷い怪我そう簡単に治るわけない　えっ？

彼の手を取り再び手の平を見た俺様は言葉に詰まる。

(怪我が・・・なくなってる)

俺様を庇い出来た傷が、ナイフで確かにえぐられたはずの怪我が跡を残すことなく、完璧に無くなっていた。

皮膚はピッタリと塞がり、彼の手の平には裂かれた事を証明するように固まった血液がこびりついているだけだった。

それはまるで、怪我など初めから無かった様な錯覚さえ覚える。

「もしかして・・・魔法？」

「おお、「こ名答」」

混乱する頭を回転させ絞り出した答えを彼はあっけらかんと肯定する。

(本当に魔法なのか?)

だがいくら答えを突き付けられても俺様は納得出来ずにいた。

だってそれは俺達、人族にはありえない話なのだから。

確かに人族にも神族や魔族同様、魔力は有る　　が、人族にはそれを魔法に変換する事はまず出来ない。

理由として上げられるのは魔力の総量が他の二族と比べ劣るということ。

ハーフでもない人間が魔法を使おうとすれば術が発動する前に体内の魔力が枯渇してしまい気絶するのは必須。

更に人族は魔力を扱うことが著しく下手だということもあり無理に行使でもすれば良くて気絶、最悪の場合魔力が暴走してしまうためハーフでもない人間が魔法を使うことなどまずないのだ。

だが彼は使った。

行使する瞬間さえ見てはいなかったが確かに切られた跡もなく、完璧に治してみせた。

「でもそんなこと有り得ないはずだ。人族が魔法を使うなんて・・・」

「だがあくまでも俺様は食い下がる。」

人族が魔法を使う。

そんな異例の事象を肯定してしまえばあの不良の言葉を肯定してしまふことになる。

そんな気がしたから。

「君を見る限り、俺様と同じ普通の人間じゃないか」

「・・・確かに俺はハーフでも異族の血を引いてる訳でもない。血縁を見る限りまともな人と人との間に生まれた正真正銘の人族だ」

「ただ一つ聞くけどな。お前はハーフでもないのにこんな眼をしていて、人族の癖に平気で魔法を使うような俺を“自分と同じ”“普通の人間”と呼べるのか？」

「それは・・・」

「違うだろ？俺の外見は明らかに“異端”だし魔法を使う俺は“普通の人間”でもない・・・だからそんな変な発言はするな」

「・・・」

思わず言葉に詰まる。

彼の言う通り、普通の人が彼の様な特殊な容姿、そして魔法を行使する場面を見れば異端とも思うだろうし普通ではないとも思うだろう。

それが一般的な反応。

差別なんてものは裏を返せば普通との差異を計る“区別”でしかない。

その区別する物差しから弾かれた彼を一般的に評するなら誰だって異端と言うだろう。

彼は誰よりもそれを理解している。

そして誰よりもその事実を認知しているからこそ彼は突き放すような言葉を出せるんだ。

ただ少し特殊な外見だから差別を受ける。

ただ他人とは特殊だから分別される。

中身を見ずに外見だけで判断され先程の様な中傷を受ける。

同じ人間なのに篩にかけ、差別する。

それがこの世界の理であり本質。

だけど　　だけどそれは余りにも不条理じゃないか。

「　　そんなの関係ない」

「・・・あつ？」

「君が变だとか他人より変わってるとかそんな事俺様には一切関係ない。俺様はただ自分が見て感じたことをそのまま口にするだけそこに他人の基準や物差しなんて、全く関係ないね」不条理な世の中、圧倒的に不平等な世界だからこそ彼の良さは理解されない。

言葉に隠された不器用な優しさに気づかない。

見ず知らずの俺様を庇うようなお人よしの彼の本質を理解し合う事をしない。

なら 俺様だけでも彼を理解しようじゃないか。

「・・・ふん。“お前も”変わった奴だな。ったく・・・何でお前等は好き好んでこんな奴に関わろうとするのかね」

彼は一瞬驚いたように眼をぱちくりとさせるが照れ隠しの様に小さく呟くとそっぽを向く。

お前等・・・か。

微かな安堵と共に俺様の心の中には好奇心が芽生える。

やっぱりこの街は面白い。

俺様と似た思考のやつが居るのか、はたまた彼同様、底抜けのお人よしがいるのか。

どちらにせよ、俄然、この街に興味が沸いて来た。

「そうかい？俺様はただ“普通”の人と話しているだけだよ。それでも、君は俺様を変だと思っかい？」

「そう言える時点でお前は十二分に変だよ　ハア。何でこうも俺は厄介者に引ッ掛かるのかねえ」

「ははっ、失礼だね」

普通という部分を強調して言うと彼はにやりと、ニヒルに笑うと皮肉めいた言葉を返す。

だが彼は言葉とは裏腹に、実に嬉しそうに笑う。

そして互いに自己紹介した後、俺様達は歩いて行く。

タクトと同じ歩幅、歩調でひたすら前へと　。

受験まであと一年と迫った今日、俺様達は出会った。

善行が報われない世の中だからこそ、俺様は彼の味方で居ようと決意した。

我ながら感傷に浸った偽善者地味た行いだと嘲笑した。

それでも尚、俺様はタクトの味方で居ることを決意した。

この道の先には何があるのか、どんな道筋なのか分からないが険しい道程は変わらない。

でもきつと　この道は今まで体験したことのないような未来が俺様を待っている。

そんな気がしてならなかった。

「　　そういえば今は春休みだつていうのにタクトは何であんな所に居たんだい？バーベナに何か用事でもあつたのかい？」

「いや、ちよつと木漏れ日通りに用事があつて・・・な」

「へえ、ならちよつと行く途中で巻き込まれたのか。君も運が無いね」

「・・・そういう訳でも無いんだがな」

「えっ？でも確かバーベナ方面から木漏れ日通りに行くにはあの道を通るしかないし、それに駅方面から来たならあそこの道は通らない筈だけど　あれ？」

「・・・」

「・・・ねえ、タクト」

「・・・何だ」

「君はもしかして迷　　「樹、俺は断じて迷子になつた訳じゃない。ただ移り行く光陽街の季節を感量深く感じながら歩いてたらいつの間にかバーベナの近くまで来ていただけだ！つまりこれは迷子じゃない、うっかりしたただけだ」・・・随分と苦しい言い訳だね」

木漏れ日通りに行く際に、二人の間にそんなやり取りがあつたのは余談である。

第十九話 分岐 「後編」(後書き)

誤字や脱字報告、感想お待ちしております！

第二十話 変わり、巡る環境（前書き）

お待たせいたしました。久方ぶりの更新です。

第二十話 変わり、巡る環境

桜の新芽が芽吹く、まだ春とは言い難い弥生の月。

俺達は皆、無事に中等部を卒業した。

俺、楓、稟は亜沙先輩の誘いに乗りバーベナへ。

桜は夢を追い掛けるため一人街を離れ、聖ストレチア学園への進学が決定していた。

結局、稟は最後の最後まで桜との関係に答えを出すことはなかった。

稟曰く「楓の事もある状態で桜の想いに答える自信がない」　だ
そうだ。

話を聞くとどうやら稟はまだ楓が過去の事を引きずってるのではないかと危惧しているらしい・・・が、ぶっちゃけるとそこら辺は俺がもう解消済みなんだけどな。

確かにあの日　楓がおじさんに真実を打ち明けられたあの日。

あのまま楓が自分と向き合うこともせず、ただただ後悔に囚われたまま許されてたなら、きつと稟が危惧した通りの結末へと事は進んでいただろう。

だがあの日、楓は俺と対話し自分の罪、深い自虐の念と向き合った。

自身の行いに対しての罪悪感。

心のどこかで解っていないながらも無意識についてしまった泡沫の嘘。

決して消えない行い、許されない罪。

楓は自身の罪と真つ正面から向き合い、重さを理解した上で楓は稟に自分の心情を吐露した。

その時点で、楓の心の中には悔やむという選択肢は存在し得なかった。

楓は考えた。

己が積み重ねてきた罪の重さ　　いくら稟に許されようとその罪が軽くなり、無くなる事はない。

そしてこの心情の吐露が稟との関係にどんな結果を招こうとも、自分が後悔し続ければ必ず稟に心配を掛ける。

ならどうすれば良い？

楓は考えた。

そうして楓が行き着いた答え　　それは“献身”だった。

幸いにも自分は家事も、料理も得意だ。

例えこれが原因で稟君との関係が修復できなくても、例え稟君とのあいだに深い溝が出来たとしても、笑顔を絶やさなければ不愉快な想いを味あわせることもない。

助けられたこの身体も、心も、全ては彼のためだけに　私は身を粉にして稟君に尽くそう。

稟君が居なくなるその日まで　。

そんな決意を胸に秘め　楓は心情を吐露した。

だがまあ、相手はあの底抜けお人よしの旗男の稟。

そんな楓の心情も露知らず、稟は優しく甘い詐欺師顔負けの巧みな話術を駆使し、楓の心に残った僅かなしこりを取り除き、気が付けば楓を自分色に染め上げ虜にしていた。

無自覚で節操無しの甲斐性無し　楓の件が終わった後日、亜沙先輩がおもむろにそう呟いたのは良い思い出だ。

コホン。まあそんな訳だから楓の事に関してはそこまで危惧する事はないのだがこの鈍感男はそこに気が付かなかった。

まあ説明してない俺も幾分かは悪いのだがそこら辺は楓の態度で察して欲しいものだ。
ん？無茶ぶりだと？いやいや、これは愛情の裏返しというものだ。
決してめんどくさかったとか、ついすっかり忘れてた などという理由ではないので履き違えないで頂きたいと、俺は切に願うのだった。

.....

「ふあ」

新調した制服を着込みバーベナへと歩く俺は欠伸を噛み締める。

今日は記念すべき、バーベナ学園の入学式。

新入生ということでネクタイをきつく締め身嗜みはきっちり、今の俺はどこからどう見ても真面目な模範生にしか見えないだろう。

「えっ？」

「嘘だろ・・・！」

気合いを入れいざバーベナ学園の門を潜ろうとした時、背後からそんな声が聞こえた。

振り返るとそこには真新しい制服に身を包んだ稟と楓の姿。

普通なら適当な挨拶を交わし合うのだがどこか様子のおかしい二人に思わず躊躇してしまう。

驚愕、まさにそんな感情を燈した稟の表情。

そして稟の横に立つ楓も、稟まではいかないが普段の落ち着いた雰囲気ではなくどこか驚いた様に俺を見ていた。

「・・・えっ？なに？」

「その声・・・！お前は・・・お前はホントにタクトなのか！？」

「そ、そんな　！」

何気なく声を発した瞬間、二人の表情が更に硬くなる。

・・・えっ？なにこの状況？新手的イジメかなにか？

「まさかタクトが　」

「あのタクト君が　」

『道に迷わないなんて！』

「・・・」

とりあえず、それは喧嘩売ってるって認識してもいいよね？いいよな？

呆然と俺を見る楓には軽いデコピンを。

そして未だ愕然とした表情を浮かべている稟には渾身のアイアンクローを喰らわせる。

ミシミシと不穏な音が稟の頭蓋からなっているがあえて無視を決め込む。

「まったく、入学そうそう無駄な体力使わせやがって」

「し、ごめんなさい」

「いだだだだたっ」

涙目になりながらも謝罪する楓とは裏腹に稟は痛みを訴えるばかり。

・・・仕方ないな。

「稟、何か言うことは？」

「タクト！？頭！頭割れるからそれ以上力をいれようと　ぎゃあ
あっ！」

牽制のつもりで力を入れたつもりだったのだがあまりにも稟の反応が面白かったためそのまま折檻を続行する。

このままクラス発表を見に行っても良いのだが万が一、こいつらと同じクラスになれなかったら暇なのは確実　なのでとりあえず俺は暇潰しもかねて時間ギリギリまで稟をひたすら弄り倒すことにした。

校門前ということもあり若干視線が痛かったが仲の良い奴等がじゃれあつてると解釈してくれるだろう・・・多分。

.....

「.....」

「り、稟君、大丈夫ですか？」

「大分顔色悪いな。大丈夫か稟？　たく、だから昨日あれほど早く寝ると」

「そんな“イベント前で興奮しすぎて眠れなかったから顔色悪い”

みたいなポケは入らないからな？寧ろ原因は百八十度違ってるのは自分が良く知ってるだろうがこの野郎」

痛そうに頭を擦りながら的確なツツコミを入れる稟。

無駄に万能である。

「まあとにかくよかったよ。お前のことだから学園の場所が分からなくて迷ってるんじゃないかって心配だったんだぞ？」

「ふっ、舐めるなよ稟。この俺がいつまでも道なんか迷うとでも？」

「そう思ってたから早めに家を出てお前の家まで向かえに行っただけどなあ楓」

「はい、でもいくら呼び鈴を鳴らしてもタクト君は出てこなくてその……」

「もう手遅れだったと思ったわけだな」

「えっと……はい」

それであんな驚いた顔をしてたのか。

合点がいった俺はそう意地悪く尋ねると楓は遠慮がちに肯定する。

……まあ、実をいうと緑葉との一件が無かったら稟達が思い描いた通りに迷子になってただろうし。

ここは素直に感謝を表すのが筋つてもんだらうな。

「まっ、心配してくれたのは素直に礼を言うよ。ありがとな、二人

とも」

「……」

「……」

「おい、なんで黙る」

「いや……なんだ。意地っ張りなお前が素直に礼を言うとは思わなかったからちよつと驚いてな」

「……ふん」

嬉しそうに顔を綻ばせ笑う稟の対応にどこか居心地の悪さを感じた俺は下駄箱前に大きく貼り出されたクラス表へ視線を向ける。

流石世界有数の進学校と言うべきか。

一年のクラス表だけでもかなりの生徒の名前が連なっており探すのがかなり面倒臭い。

……ふむ、どうやら俺達三人はまた同じクラスらしい。

良い意味でも悪い意味でも目立ちそうな一年になりそうだな。

「なんというか。お前もずいぶん丸くなったよな」

「……なんだ、藪から棒に」

「別に、なんとなくそう思っただけだ……これも、亜沙先輩のおかげかな」

「……はい、私もそうだと思います」

「ん？楓、稟は最後何て言った？」

「ふふふつ、タクト君には秘密です」

クスリと、楓は楽しそうにそう言い残すと稟と共に教室へと歩いていく。

・・・まあいつか。

多少気にもなるが、楓が笑うような内容だったら気にする必要もない。

指定された靴箱に適当にを放り込むと稟達に続き教室へと向かう。

途中、廊下ですれ違う在校生や新入生。

比較的人族が多いこの学校では特徴的な耳を持つ族の姿がいやに目を引く。

なんだか校内で魔族、神族の姿を見るとやはり新鮮な感じがしていない。

「おっ、ここだな」

稟は“1-A”と書かれたプレートを見上ながらおもむろに呟く。

そして取っ手に手を掛け一気に引き

「おはよう楓ちゃん！そして俺様の胸の中へウェルカム！」

熱烈な歓迎の抱擁を受けた。

喧騒に包まれていた教室が一気に静まる。

同校の友人と話す者は固まり。勇気を出しコミュニケーションを取ろうとした者は恨みがましく俺達を睨んでいる。

誰も喋らず、身動きすらしない。
まるで体感時間が緩やかになってしまったかのような錯覚を俺達に
与える。

未だ暑い抱擁を交わしあう二人。

興味津々といった風に俺達をガン見するクラスメイト達。
そして理解が追いつかず呆然と立ち尽くす楓。

・・・ふむ。

なんともいたたまれない空気の中で、俺はゆっくりと口を開く。

「稟よかったな。楓と見間違っほどの美少女って褒められたぞ」

「嬉しくねえええええ!!」

俺なりの精一杯のフォローは稟の渾身の叫びによって掻き消される
のであった。

.....

「はあ、まさかこの俺様が稟なんかと暑い抱擁を交わす羽目になる
とはねえ。稟、とりあえず殴っても良いかい？」

教師が来るまでのあいだ、適当に空いてる席に座った俺達は何故か
は知らないが飛び付いてきた男 緑葉 樹と適当に話していた。

っていつかこいつ、稟達とも知り合いだったのか。

世間とは狭いものである。

感量深くそんなことを思っていると緑葉はニッコリと、明らかに作った笑顔を張り付けゆっくりと右手を掲げる。

そんな緑葉に対し、稟は神妙に口を開いた。

「とりあえずお前誰だ？」

「えっ？まさかの展開？」

おっと、反射的に突っ込んでしまった。

ジト目で、まるで緑葉を観察するように凝視する稟に緑葉はおかしそうに口元を緩める。

「おいおい稟。まさか、俺様の事を忘れたのかい？」

「忘れるわけないだろ。でも俺が知ってる緑葉樹はいきなり抱き着いて来るような奴じゃなかったからな」

「・・・そう言われてみればそうだったな」

俺は初めて緑葉と会ったときの事を思い返しながら稟の言葉を肯定する。

緑葉の第一印象は堅物の優等生。

さつきみたいな抱きつくような行為は愚か、今みたく冗談を言いよるような性格ではなかったような気がする。

「まっ、人は見かけによらぬってことなんじゃないか？」

「タクトの言う通りさ稟。人とは日々成長し進化し変わり行く生き物。俺様はあの頃よりも一回り以上成長したんだよ」

「樹が言うのと妙に説得力があるな」

「ああ。だけど俺が思うに緑葉の場合、進化じゃなくて退化だと思っぞ」

本能に赴くまま抱きつく時点でチンパンジー並に退化しちゃってると思うのは俺だけでしょうか？

「まっ、そう評するのは人それぞれということさ」

酷な評価を聞きつつも緑葉は不敵な態度を崩さず眼鏡のブリッジを弄る。

稟並に整った容姿を持つ緑葉だとそのキザったらしい行為が妙にマッチしており、クラス内の大半の女子の視線を釘付けにしていた。

「それよりも樹。お前タクトとも知り合いだったのか？全然知らなかったぞ」

「ああ、彼とは去年の春に会ってそれから二、三度しか会ってないからねえ。なかなか連絡先を教えてくれなかったしいつもツンツンした対応しか取らないからかなり攻略が難しかったよ」

「ああ、それについては同意する」

「同意すんな、バカ稟！」

「ぐあっ!?!」

バチンッ！という快音と共に稟の頭が大きく揺れる。

予想外の威力に緑葉は固まっていたがやがて口を開いた。

「・・・ああそうだタクト。実はね、君に会わせたい奴が居るんだ」
「パスで」

「・・・つれないねえ。やっぱり君はあれだね、俗にいうツンデレ
ブハツ！」

くだらない事を抜かす緑葉の腹に軽く拳を入れる。

椅子の上で激しく悶絶しているが気にしないでおこつ。

「・・・タクト、やりすぎだ。別に良いじゃないか、会うくらい」

「いやだ、めんどくさい」

「友達が増えるかもしれませんか？」

「いらん」

「・・・はあ」

素っ気ない態度に稟は大袈裟なため息をつく。

楓も稟の様に態度には出さないが、その表情は困ったようにややしかめていた。

こいつらが言わんとしていることは大体予想はつく。

大方、俺に友達を作つて欲しい、もしくは少しでも他人に対する壁を無くして欲しいと いった所だろう。

だけどそれは無理な相談というものだ。

中学では運良く亜沙先輩という大切な人が出来た。

それは俺　相沢タクトを形成する大本、人間嫌いを多少にかかわらず緩和した。

だが所詮は緩和、人間嫌いの本質を取り除くことは出来なかった。

人と話さない　多少は話す但簡単な日常会話程度。

人と関わらない　多少関わるようになったが深く関わることはない。

その程度の変化だった。

(・・・きっとこれは甘えなんだろうな)

人は一人では生きていけない。

それは例え強がっても、いくら虚勢をはっても決して覆らない唯一無二の事実だと理解も、実感もしている。

それでも、俺は他人と関わろうとはしない。

分かっているながらも、俺は関係を築こうとしない。

何故？他者からそう問われれば俺は真っ先にこう答えるだろう。

怖いからだ　と。

・・・怖い。

俺は他者に影響され、変わることが怖い。

過去を忘れ、この居心地の良いぬるま湯の関係に身を沈めることが怖い。

一人思い耽てると聞き慣れない声が聞こえてくる。

過去に体験した裏切りが傷が哀しみが、他人に、人という生き物に関わる事に恐れを生じさせる。

信頼の裏側には必ず疑心が付きまとい、俺の心を揺さぶる。

他人とは関わらない。

俺は頑なに意地を張り続ける。

後戻りの出来ないところまで来ているのに気が付いてるのに見向きもせず、どこまでも愚直に自分の意思を貫き通す。

意味のない行為だと理解しながらも、俺は差し伸べられた手を払い他者を拒絶する。

俺は　そんな俺が大嫌いだ。

「　　うっわっ、緑葉君が他人と話してる。もしかして天変地異の

前触れ？」

一人思い更けていると突然、そんな声が耳に届く。

女性特有のやや高い声。

何事だとおもむろに顔を傾け　硬直した。

目を反射する明るい銀髪。

女性らしいスレンダーで華奢な身体。

そして何よりも眼を引いたのは俺と同じ　朱と蒼の左右対称の瞳。

「やあ麻弓、また同じクラスになるとね」

「全くなのですよ。腐れ縁もここまで来れば運命なんじゃないかって思えてくるから嫌になってくるので・・・す？」

緑葉と言葉を交わす最中、不意に彼女と目が合う。

瞬間、彼女は俺と同様硬直した。

燃えるように鮮やかな朱。

冷たい印象を抱く深い蒼。

麻弓と呼ばれた少女の瞳は俺と同じ朱と蒼のオッドア。

だけど彼女の瞳は俺のように濁ってはなく、彼女の容姿に栄え艶やかで

とても綺麗だった。

俺はまだ知らない。

緑葉 樹、麻弓マユタイムという人物がこれから描き始める俺の物語じんせい
にどれだけ影響を及ぼす存在なのかを。

俺はまだ、気がついていなかった。

第二十話 変わり、巡る環境（後書き）

誤字脱字の報告、ご感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2267j/>

SHUFFLE! ~ ENDLESS LINK

2011年11月28日02時50分発行